



2025年度
日本韓国研究会第5回研究大会
発表予稿集

日時：2025年8月31日（日）

《第1部》10:00-12:30

《第2部》13:30-17:30

場所：（対面）慶應義塾大学 日吉キャンパス

来往舎2階中会議室

（オンライン）Zoom

主催：日本韓国研究会（JAK）

お問い合わせ：大会事務局 jak.jimu@gmail.com

目次

■プログラム

- ・ポスター
- ・スケジュール

■研究発表

- ・飯田華子（大阪公立大学 日本学術振興会特別研究員（RPD））
「日韓の大学生における禁止を意図する言語表現の使用実態」
- ・仲島淳子（京都女子大学国際交流センター助教）
「韓国語推量表現の婉曲的用法に関する考察」
- ・李載賢（関西大学非常勤講師）
「ChatGPTによる字幕翻訳の可能性と限界
—日本語・韓国語ドラマを対象に」
- ・유아리사(이화여자대학교 한국학과 박사 수료생)
「일본에서의 한국어 수량사구 교육 현황 분석
-한국 현지와의 차이를 중심으로-」
- ・方閏濟（関西学院大学）
「『밤을 걸고』에 나타난 난민적 주체의 공간과 윤리 연구」

プログラム

ポスター

日本韓国研究会 Japan Association of Koreanology 第5回研究大会 2025年8月31日(日)



会場：慶應義塾大学 日吉キャンパス 来往舎2階中会議室
+ オンライン (Zoom)

第1部 特別企画

司会：高橋 梢（新潟県立大学）

「国交正常化60年の今考える日本、韓国の民主主義のあり方」
2024年12月、韓国では「戒厳令」とその後の市民社会の動きによって、民主主義は危機と回復（レジリエンス）を経験した。現在の韓国、日本、そして東アジアの重要なテーマである民主主義について、私たちほどどのように考えるべきだろうか。

10:00 趣旨説明

10:10 金 根三（志學館大学）

「地方分権と財政民主主義の観点からみた韓国の前後民主主義の発展への考察
—日本との比較」

10:40 韓 恵仁（アジア平和と歴史研究所）

「民主主義はどのように弱者の苦痛を公論化するのか
：日本軍「慰安婦」運動の経験と含意」

11:20 登壇者同士の質疑

11:40 質疑応答

第2部 研究発表

13:30 飯田 華子（大阪公立大学 日本学術振興会特別研究員-RPD）

「日韓の大学生における禁止を意図する言語表現の使用実態」

司会：楊 廷延（関東学院大学）

14:15 仲島 淳子（京都女子大学国際交流センター助教）

「韓国語推量表現の婉曲的用法に関する考察」

司会：飯田 華子（大阪公立大学）

15:05 李 載賢（関西大学非常勤講師）

「ChatGPTによる字幕翻訳の可能性と限界—日本語・韓国語ドラマを対象に」

司会：仲島 淳子（京都女子大学）

15:50 유 아리사（イハ여자대학교 한국학과 박사 수료生）

「日本에서의 한국어 수량사구 교육 현황 분석-한국 현지와의 차이를 중심으로-」

司会：朴 天弘（東京大学）

16:35 方 閔濟（関西学院大学）

「『밤을 걸고』에 나타난 난민적 주체의 공간과 윤리 연구」

司会：米沢 竜也（神戸大学）

18:00 懇親会（対面参加者のみ）



← 参加登録フォーム：<https://forms.gle/vKFRraEVMN9YwZxH6>

※ 登録期限 8月25日(月) 予稿集・オンラインURLはご登録の方にお送りします。

お問い合わせ：日本韓国研究会(JAK) jak.jimu@gmail.com

スケジュール

第1部 特別企画：

国交正常化 60 年の今考える日本、韓国の民主主義のあり方

10:00-12:30	司会：高橋梓（新潟県立大学） 1. 金根三（志學館大学） 「地方分権と財政民主主義の観点からみた韓国の前後民主主義の発展への考察—日本との比較」 2. 韓恵仁（アジア平和と歴史研究所） 「民主主義はどのように弱者の苦痛を公論化するのか：日本軍「慰安婦」運動の経験と含意」 登壇者同士の質疑、質疑応答
12:30-13:30	昼食休憩

第2部 研究発表

時間	発表者	発表タイトル	司会	頁
13:30- 14:10	飯田華子 (大阪公立大学)	日韓の大学生における禁止を意図する言語表現の使用 実態	楊廷延 (関東学院大学)	7
14:15- 14:55	仲島淳子 (京都女子大学)	韓国語推量表現の婉曲的用法に関する考察	飯田華子 (大阪公立大学)	13
14:55- 15:05		休憩		
15:05- 15:45	李載賢 (関西大学)	ChatGPT による字幕翻訳の可能性と限界 —日本語・韓国語ドラマを対象に	仲島淳子 (京都女子大学)	27
15:50- 16:30	유아리사 (이화여자대학교)	일본에서의 한국어 수량사구 교육 현황 분석 -한국 현지와의 차이를 중심으로-	朴天弘 (東京大学)	43
16:35- 17:15	方閏濟 (関西学院大学)	『밤을 걸고』에 나타난 난민적 주체의 공간과 윤리 연구	米沢竜也 (神戸大学)	64
17:15-17:30		閉会式		
18:00-		懇親会（対面）		

研究発表

日韓の大学生における 禁止を意図する言語表現の使用実態

飯田華子（大阪公立大学日本学術振興会特別研究員）

＜要旨＞

本研究は、禁止を意図する言語表現を対象に、日韓の大学生の使用実態の同異を明らかにすることを目的とする。調査方法は、回答選択形式のアンケート調査を用いて、日本と韓国それぞれの大学生を対象に、場面ごとの禁止を意図する言語表現について使用調査を行った。

キーワード 禁止、言語行為、日韓比較、行為指示、ポライトネス

1. はじめに

本研究は、日韓の大学生を対象に、禁止を意図する言語表現の使用実態の同異を明らかにすることを目的とする。本研究で「禁止」とは、「話者が聴者に対してある行為をしないようにするもの」であり、これを意図する「言語表現」とは、言語形式や語の本来の意味に焦点を当てるのではなく、発話の効力に焦点を当てた言語行為¹を前提とするものである。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

行為指示の中でも、依頼や命令に関する研究が活発に行われてきた。篠川（1999）、梶田（2003）、문양수（2017）はその中でも、親疎上下関係と依頼の負担度の観点から、発話の形式の特徴を分析しており、本研究の分析と類

¹ Austin (1962) や Searle (1969) などによる、言語を形式言語（記号）として意味を伝達するものとしてではなく、言語の行為的側面に着目した考え方を指す。

似する研究と言える。その半面、行為の不実行を指示する禁止に関しては、それほど活発に行われてこなかった²。しかし、禁止は聴者の行為を制限するため、発話により注意が必要な言語行為であると言える。

また、不満の言語行動は、聴者の行為に対してマイナス評価を与える点で、禁止と類似する言語行動と言える。朴（2000）は、日本語母語話者、韓国人日本語学習者、韓国語母語話者を対象に、不満の感じ方、不満表明の方法、言いにくさについて調査した。しかし、相手の行為への抑制よりも自身の感情を表出することに焦点が置かれている点で禁止とは異なると言える。

禁止表現を一つの表現として扱い、その使用に焦点を当てた先行研究が見当たらないこと、また上記のことから、類似表現との差異と禁止表現の研究の必要性が明らかになった。

3. 調査概要

本研究は回答選択形式のアンケート調査を用いて、日本と韓国の大学生を対象に、場面ごとの禁止を意図する言語表現について調査を行った。調査日は、2025年4月2日～3日（韓国）、2025年4月21日（日本）で、被験者は、韓国216名、日本242名であった。

被調査者には、18個の提示された状況において、禁止を意図する発話をを行う際に、どのような発話をを行うのか、5個の選択肢の中から最も近い発話を選んで回答してもらう方法³で調査を行った。また、選択肢の中に該当する発話がない場合は、「その他」を選び直接発話を入力してもらった。

禁止の対象となる行為の種類は、状況における発話の当然性、親疎関係、対象行為による被害の対象者を考慮し、話、非協力的行動、迷惑行為、割り込み、侵入、ルール違反の6個を設定した。それぞれ話者と聴者の上下関係を3種類設定（禁止対象行為の種類6×上下関係3、計18場面）した。

選択肢として提示する表現の形式は、テレビドラマを対象とした禁止を意図する表現の使用に関する事前調査（飯田：2024）において、多く使用されていたものを中心として設定した。

² 行為指示に関する先行研究の詳細と、禁止に関する研究が活発でなかった理由に関しては、飯田（2024b）で言及している。

³ 先行研究では、記述式の調査を行ったものも多くみられるが、発話を文字にして書く際に、実際の発話よりも丁寧な言葉で書いてしまうことを懸念し、今回は選択式の回答を採用した。

表1 禁止を意図する表現の形式の詳細

選択肢	表現の形式	文末表現の例	文の形式 ⁴	話法 ⁵
1	命令の形式	～ないで	①	直接 話法
2	不許可の形式	～たらだめ		
3	希望の形式	～ないでほしい		
4	理由説明	-	③	間接 話法
5	他の行為の提案	-		
6	その他	-	-	-

4. 結果と考察

18個の設問ごとに、「言語表現の形式」×「国」で χ^2 検定を行った。その際に、選択肢6「その他」のデータは除き、選択肢1から5までの結果のみを対象とした。禁止の対象となる行為ごとに、日韓の相違点について分析していく。

4.1 禁止対象行為「話」

場面1は、仲良い友人の悪口を言われた場面で、日韓の間に有意差はみられなかった。「他の話しない?」というその他の行為の提案が最も多く、その次に理由説明の形式を使用していた。

場面2は、聞かれたくない恋愛について聞かれた場面で、日韓の間に有意差がみられた。日本では「他の話しよう」というその他の行為の提案の形式の使用率が圧倒的に高かった。韓国では「더 이상 안 물어봤으면 좋겠는데…」という希望の形式の使用率も高かった。

場面3は、触れられたくない体型について言われた場面で、日韓の間に有意差がみられた。日本では「他の話しよう」というその他の行為の提案の形式の使用率が圧倒的に高かった。韓国では、「몸매에 대해서 말하지 마세요.」という命令の形式、「몸매에 대해서 말씀 안 하셨으면 좋겠는데…」という希望の形式、そして「다른 이야기하지 않으실래요?」というその他の行為の提案の形式の使用率がほぼ同じくあらわれた。

相手の話していることをやめさせる場面において、日本では話題を変える

⁴ 宮崎他 (2002) の行為要求の形式を参考に、①本来的に禁止の機能をもっているもの、②本来は別の機能を持っていたが、禁止の機能に移行し、その機能が定着したもの、③状況に依存して禁止の含意を派生するもの、の三つに分類する。

⁵ 発話文と発話意図が同一であるかどうかという観点から、①と②を直接話法、③を間接話法とすることができる。

間接的な言語行動をとることから、そのことに触れずに回避しようとしていることがうかがえるが、韓国では、話題次第では直接的な表現を使用して、確実にその話をやめてもらおうとしていることが差としてあらわされた。

4.2 禁止対象行為「非協力的行動」

場面4は、みんなで勉強会をしているのに写真を撮って遊んでいる、場面5は、皆で話し合っているのに携帯を見ている、場面6は、発表の内容を決めているのに関係のない話をしている、という内容である。すべての場面において、日韓の間での有意差は認められず、日韓の言語行動に違いが認められないという結果となった。また、これらは聴者の非協力的行動的が対象となる場面であるが、その他の行為の提案の形式が約50%を占め、理由説明の形式がその次に多い結果となった。

4.3 禁止対象行為「迷惑行為」

場面7は、授業中に他の話題で盛り上がっている場面で、日韓の間での有意差は認められなかった。大部分がその他の行為の提案の形式が選ばれ、理由説明の形式がその次に多い結果となり、80%以上の回答が選択肢4と5の間接的な表現であった。

場面8は、頻繁に約束時間に遅れて迷惑をかける場面で、日韓の間での有意差は認められなかった。選択肢1から3の直接的な表現の使用率の合計が、日本60.0%、韓国64.0%と、日韓ともに非常に高くあらわされた。日韓ともに、相手の迷惑行為に対して、上下関係が「同」の場合は間接話法、上下関係が「下」の場合は直接話法を使用していることがわかる。

場面9は、お酒を飲みすぎてお店に迷惑をかけている場面で、日韓の間で有意差がみられた。日本はその他の行為の提案の形式が53.3%に次いで、理由説明の形式が24.6%と、間接的な表現を主に使用していたが、韓国はその他の行為の提案の形式が61.2%に次いで、命令の形式26.8%と、直接的な表現の使用も一定数みられた。つまり、親しい先輩の迷惑行為に対して、日本では直接的な表現を避ける傾向が見られるが、韓国では直接的な表現の使用も少なからずあることが言える。

4.4 禁止対象行為「割り込み」

場面10は、自分が荷物を置いていた席に座ろうとする、場面11は、エレベーターの列に割り込んで先に入る、場面12は、食堂の列に割り込んで自分の前にいる、という内容である。すべての場面において、日韓の間で有意差が認められた。三つすべての場面において、韓国では希望の形式の使用が低かった一方、日本では使用が高くあらわれていた。また、場面11の目下の相手が聴

者の場合では、日本では理由説明（50.5%）が最も多く、その次にその他の行為の提案（25.0%）が多かったが、韓国ではその他の行為の提案（51.8%）が最も多く、その次に理由説明（36.8%）が多いという、反対の結果になった。

日本では、すべての上下関係の聴者に対して理由説明が多かったことから、「割り込み」行為に対して、聴者の無意識による行動の可能性を考えていること、またそのような言語使用で丁寧さを保とうとしていることがうかがえる。韓国では、特に目下の聴者に対しては、理由説明による聴者への配慮よりは、明確な行為の指示を行う傾向が見られた。

4.5 禁止対象行為「侵入」

場面13は、自分の学科専用の研究室に入ろうとする、場面14は、学祭の準備で予約していた教室に外部の人が入ろうとする、この二つの場面において、日韓の間での有意差は認められた。大きな特徴として、不許可の形式の使用が、日本では低かった（場面13：3.72%、場面14：7.85%）反面、韓国では使用率が高い結果（場面13：17.29%、場面14：35.98%）となった。

場面15は、勉強会で予約していた教室に入ろうとする場面で、日韓の間で有意差はみられなかった。日韓ともに85%以上が理由説明の形式を使用していた。

相手の「侵入」行為に対して、日本では上下関係に関係なく、理由説明の形式が大半を占めている一方、韓国では上下関係が下、もしくは同じである場合には、不許可の形式の使用も増えるという結果となった。

4.6 禁止対象行為「ルール違反」

場面16は、自習のための教室でうるさく喋っている、場面17は、図書館でうるさく喋っている、場面18は、喫煙所ではない場所でたばこをすっている、という内容である。すべての場面において、日韓の間で有意差が認められた。

直接的な表現（回答の選択肢1から3）の結果をみると、日本では命令の形式と希望の形式が韓国に比べて使用率が高く、韓国では不許可の形式が日本に比べて使用率が高くあらわれていた。

間接的な表現（回答の選択肢4と5）の結果をみると、目上の相手が聴者となる場面18において、日本では他の行為の提案の形式を多く使用していた（47.93%）が、韓国では日本より低い結果（29.44%）となった。

5. おわりに

本研究では、日本と韓国それぞれの大学生を対象とした禁止を意図する言

語表現について使用調査を行い、言語形式ごとに両言語の調査結果を整理し、似ている場面ごとに日韓の言語形式の使用の同異を分析した。

日本語と韓国語は、文法体型が似ており、今回調査対象とした直接話法に該当する表現の形式（命令の形式、不許可の形式、希望の形式）についても、日韓で同じ表現が存在する。しかしながら、これらの表現の使用については、上下関係、親疎関係、被害の対象、発話の当然性の観点で、日韓に違いが認められた。本研究の結果を、日本語母語話者である韓国語学習者を対象としたコミュニケーション研究につなげていくことを今後の課題としたい。

＜参考文献＞

- 飯田華子 (2024a) 「日韓リメイクドラマに現れる禁止表現—機能と親疎上下関係からの一考察ー」『日本言語文化』67 : 7-24.
- _____ (2024b) 「行為指示の言語行動に関する研究状況について—韓国語と日本語を対象とした研究を中心にー」『韓国文化研究』14 : 45-60.
- 笹川洋子 (1999) 「アジア社会における依頼のポライトネス(for you or for me)について： 日本語・韓国語・中国語・タイ語・インドネシア語の比較」『親和國文』34 : 154-181.
- 梶田和美 (2003) 「日本人学生と韓国人留学生における依頼の談話ストラテジー使い分けの分析—語用論的ポライトネスの側面からー」『小出記念日本語教育研究会論文集』11 : 41-54.
- 朴承圓 (2000) 「「不満表明表現」使用に関する研究 ー日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語母語話者の比較ー」『言語化学論集』4 : 51-62.
- 宮崎和人・野田春美・安達太郎・高梨信乃(2002) 『モダリティ（新日本語文法選書4）』くろしお出版
- 문양수 (2017) 「한국과 일본 고등학생들의 부탁 발화행위 대조 연구」『日語日文學』74 : 63-79.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge University Press. (田中典子 (監訳) 2011『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- Searle, J. R. (1969) Speech Acts: an Essay in the Philosophy of Language. Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊 (訳) 1986『言語行為－言語哲学への試論』勁草書房)

韓国語推量表現の婉曲的用法に関する考察

仲島淳子（京都女子大学）

＜要旨＞

本稿は、韓国語の多様な推量表現について이상속(2024)で提示された 12 項目を対象に、婉曲的用法の有無、話者が推量する際の情報が直示的か、非直示的か、そしてその判断が主観的なものか客観的なものかという観点から考察したものである。「-을까 보-」を除き、婉曲の機能がないと述べられていた「-은/-는/-을 모양이-」「-은/는가 보-,-나 보-」「-은/는지」を含む 11 項目に婉曲的用法が確認され、表現ごとに使用場面や語調、情報の根拠が異なることが明らかになった。既存の教科書ではこれらの婉曲的用法がほとんど扱われていない。指導モデルの構築や語用的判断トレーニング、チェックリストの開発などが今後の課題である。

キーワード 婉曲、推量表現、直示性、非直示性、主観的、客観的

1. はじめに

韓国語の推量表現には代表的なものとして「-겠-、-은/는/을 것 같다、-을 것이다」などがある。これら推量表現は時に婉曲的な用法で用いられることがある。推量表現としての意味や文法、会話での機能などについてそれぞれを比較した先行研究や、推量表現の婉曲的用法として個別に研究されたものがあるが、推量表現を用いた婉曲的用法全体を比較したものはない。そのため、推量表現の婉曲的な用法におけるそれぞれの違いについて考察を行う。

2. 先行研究

김미형(2000)は、文章範疇の婉曲表現を聴者中心の婉曲表現、話者中心の婉曲表現、話者と聴者以外の第三者中心の婉曲表現に分けている。まず、聴者中心の婉曲表現は話者が聴者に依頼をするとき、禁止や命令をするとき、良くな

いことに対し質問をするとき、相手の間違いや失敗を指摘するときに、聴者の発話行為負担を減らす効果を持つとする。そして話者中心の婉曲表現は話者が自身の主張や陳述を行うとき、相手に断るとき、相手に恩恵を与えることになったとき、相手の行為で話者が恩恵を被ることになったときに、話者の行為に対する婉曲表現を通じ、聴者の発話行為負担を減らす効果を持つとし、第三者中心の婉曲表現には、文章叙述で「-한다고 본다、-라 할 수 있다、-라고 생각한다、-가 아닌가 한다、-는 듯하다、-듯 싶다」などをあげている。

성미선(2009) 韓国語の推測表現の丁寧化について、韓国語コーパスで推量表現の頻度数の分析を行い、意味機能の分析を通じ婉曲語法として使われる表現を抽出しそれらの教授方法について、断り、意見、提案・依頼、評価及び遠回しに話す、という場面を設定した教育法案を提案している。具体的な場面を提示し、その場面で用いる推量表現を練習する構成となっているが、教材ではないため、授業を運営する教師の役割と技量に任せる部分が大きい。そのため学習者自身が選択しやすい特徴の提示が求めらる。

金善美(2016)は、「-을 것 이」と「-겠 -」を直示的情報・非直示的情報という観点で考察している。非直示的推量を表す平叙文においては「-을 것 이」の使用が自然で、「-겠 -」の使用には現場からの直示的情報が関与すると述べている。

이상속(2024)は、これまでの推量表現に関する先行研究を概観した上で、意味と機能から推測表現の範疇を設定し、その中から「教育的価値」「教育的実用性」「教育的実際性」を考慮し、韓国語教育の現場で指導する推量表現を選定している。そしてそれら推量表現を、形態・統辞的特性と意味・語用的特性に分けて考察し、学習段階¹に応じ指導する推測表現項目を設定し、各段階の教授モデルを提案している。語用的特性で推量表現の婉曲機能については中級以降での教授を提案しているが、具体的な教授方法については触れていない。

3. 研究方法

研究対象となる韓国語の推量表現は、이상속(2024)の推量表現を基準とし、それぞれの婉曲的用法について考察する。その理由は、이상속(2024)で設定された教育用推量表現項目の選定基準による。教育的価値と必要性の判断基準を設定するにあたり、韓国の国立国語院「한국어교육 문법·표현 내용 개발 연구」を用い、이상속(2021)の韓国人の口語コーパス²頻度分析結果を教育的実

¹ 初級、中級、高級をそれぞれ 1段階・2段階とし、6段階に設定

² 国立国語院「21世紀世宗コーパス」2011年配布版「現代口語形態分析コーパス」

用性を補うための基準に、「국제 통용 한국어 교육 표준 모형 개발 2단계」目録を基盤に韓国語教材での出現頻度が高いにも関わらず抜けていたり、韓国語能力試験項目に含まれているのに抜けている項目などを補充し、さらに現在の韓国語教育現場の内容を反映するために이상속(2021)の韓国語教材³の分析結果を追加で反映し教育用推量表現項目を選定している。「教育的価値」「教育的実用性」「教育的実際性」を考慮し、韓国語教育の現場で指導する推量表現を選んでいるため相応しいと考える。

本稿で用いる推量表現の婉曲的用法は、양정(2018)の婉曲表現の定義を踏まえ、次のように定義する。話者がコミュニケーションを円滑に進めようとする目的で、直接的な表現を避け推量表現を用い間接的に表現する語用的用法を推量表現の婉曲的用法とする。

研究方法は、이상속(2024)で設定された教育用推量表現項目で、語用的機能として婉曲の機能があるとされているものに加え、それ以外の推量表現も含め、韓国の国立国語院「국립국어원 비출판물 말뭉치(버전 1.0)」より「국립국어원 일상 대화 말뭉치 2020(버전 1.1)⁴」（以下、母語話者コーパスとし、用例の出典表示には母の略称を用いる）を用い、実際の母語話者の用例から、婉曲的用法の特徴を考察する。

4. 推量表現の婉曲的用法

表1は、이상속(2024)による推量表現項目と語用的機能として婉曲機能の有無、判断の視点、判断根拠制約、場面、各項目の推奨学習段階である。

表1 이상속(2024) の推量表現項目

No.	推量表現項目	婉曲機能の有無	判断の視点	判断根拠制約	場面	学習段階
1	-은/-는/-을 것 같-	有	過去・現在		口語 非格式	中級 1段階
2	-은/-는/-을 뜯하-	有	過去 現在		文語 格式的	高級 1段階
3	-은/-는/-을 모양이-	無	過去 現在	現場知覚経験 直接経験不可	文語 格式的	高級 1段階
4	-은/-는/-을지 모르-	有	発話する現在	確実な根拠不可		中級 1段階
5	-을 것이-	有	発話する現在	直接・間接問わず過去経験	格式的	中級 2段階

³ 서강 New 한국어 1-6、서울대 한국어 1-6、연세 한국어 1-6、이화 한국어 1-6

⁴ 2021年5月31日に公開の15個の主題、13個の提示資料を対象に二人の話者が自由に対話した日常対話資料(計2,739名の話者、対話当たり約15分、計500時間分)から作成されたコーパス

6	-을 터이-	有	發 話 す る現在	過去経験		中級 2段階
7	-은/는가 보-, -나 보 -	無	發 話 す る現在	現場知覚経験 話者の直観や感覚は 判断根拠不可	口語 非格式	中級 2段階
8	-을까 보-	無	發 話 す る現在	確実な根拠不可		中級 2段階
9	-겠-	有	發 話 す る現在	現場知覚経験 直接経験不可		中級 2段階
10	-은/는지	無	過去 現在	現場知覚経験		中級 1段階
11	-을까	有	發 話 す る現在	確実な根拠不可	口語 非格式	中級 2段階
12	-을걸	有	發 話 す る現在	過去経験	口語 非格式	中級 1段階

以上(2024pp. 17)は、すべての推測表現は、判断根拠を持っているとし、判断根拠は特性によって、「客観的、主観的」「直接経験、間接経験」「発話現場の経験、過去の経験」などに分けられると述べている。また、金善美(2016)は、推量表現「-을 것 이」と「-겠-」を非直示的、直示的という基準で使用形式が決まるとしている。こうした推量表現に関する特性をもとに、それぞれ婉曲的用法を考察する。

4. 1 -은/-는/-을 것 같-

- (1) a. 제 생각에는 옷이 좀 {큰 것 같아요/*클 거예요/*크겠어요} .
 b. 교수님, 내일 수업에 못 {올 것 같습니다/못 올 거예요} .
 (以上(2024 pp. 99) より引用)

(1)a. は「服が似合っていない」という話者の考えを遠回しに表現している場面で、直示的情報による判断である。もし服を買おうとしている聴者に対し、それはあなたには大きいだろうと言う場面であれば「-을 것이-」、「-겠-」も使えるが、「服が似合っていない」という婉曲的用法としては使えない。また、(1)b. は「明日は学校に来れない」という断りを目上の人に伝達するとき事実をそのまま伝えるのではなく可能性があると表現することで丁寧さを表している。「-은/-는/-을 것 같-」の代わりに「-을 것이-」を使うと丁寧さの意味は感じられなくなると説明している。

母語話者コーパスから収集した例を見てみよう。(()) 内は筆者による翻訳。下線は筆者による。以下同様)

- (2) a. 아이를 낳고 엄마가 되면서 생각이 많이 달라진 것 같습니다. (母 :

子どもを産んで母になって、ずいぶん考えが変わったと思います。)

b. 그리고 유명한 배우들도 많고 그래가지고 저는 재밌는 것 같애요.

(母：そして有名な俳優らも多く、それでもって私は面白いと思います。)

c.아예 모르니까 네가 좀 설명을 해줘야 될 거 같애. (母：全くわからな
いから君がちょっと説明をしてくれなければならないと思う)

d.족발집 사장님도 좀 이케 참고는 해 주셔야 될 거 같애요. (母：豚足
屋の社長もちょっとこのように参考にしてくださらなければならぬと
思います)

(2)a.は実際に話者自身が過去に直接経験したことから判断した内容を柔らかく伝えている。(2)b.は何らかの作品に関し、出演している俳優の名前を見て、過去の経験を通じそうした有名な俳優が出ている作品は面白いだろうと判断し、(2)c.は聴者に対する命令を、(2)d.は忠告を柔らかくしている状況で、いずれも現時点までの状況を踏まえ、現場で判断している。このように「-은/-는/-을 것 같-」は色んな場面で使われるが、それは他の推量表現に比べ制約が少ないことによる。

以上のことから、「-은/-는/-을 것 같-」の婉曲的用法は、直示的・非直示的情報の両方によって、主観的な判断を聴者に伝える場合に用いる。

以上(2021)によると、推量表現項目の口語コーパスでの使用頻度は「-은/-는/-을 것 같-」が最も高く 40.24%、次に「-겠-」が 28.65%、「-을 것이-」が 10.68%で、全体の約 80%を占めることになる。そのため、以降の表現項目は「-은/-는/-을 것 같-」、「-겠-」、「-을 것이-」との比較を中心に考察を進めていく。

4. 2 -은/-는/-을 듯하-

(3) 친구의 이야기를 들어보면 그렇지도 {않은 듯한다/않은 것 같다/않을 것
이다/않겠다}.

(3)は「友だちの話を聞いてみると、そうでもない」という非直示的情報による主観的な判断を推量表現で表す場面である。「-은/-는/-을 들향-」の場合、少し硬い印象があるが婉曲的用法として可能である。そして「-은/-는/-을 것 같-」の場合、より柔らかい印象となり丁寧な印象を与える。一方、「-을 것이-」の場合、断定的な印象となり、婉曲的用法ではなく「そうでもないだろう」とやや相手を否定する印象を与えることになる。さらに「-겠-」の場合も、婉曲的用法ではなく「そうでもなさそうだ」と推量の意味となってしまう。

以上のことから、「-은/-는/-을 뜻하-」の婉曲的用法は、非直示的情報による主観的な判断を相手に伝える場合に用いるが、口語ではなく文語で用いる。

4. 3 -은/-는/-을 모양이-

이상속(2024 pp. 107)は、話者が客観的な態度を持って判断しているため「-은/-는/-을 모양이-」は婉曲の機能を持たないとしている。성미선(2009)も、「-모양이다」については、客観的な判断を見せる表現なので婉曲語法として発話されにくくと述べている。しかしこの文を見てみよう。

- (4) 깜짝 놀라서 말이 안 {나오나 봐요/나오는 모양이에요/나오는 것 같아요}.

(4)は、何も言えない様子を見て「とても驚いて言葉が出ない」と話者が目の前の直示的情報により判断をし、推量表現を用いて聴者に伝えている。「-나 보-」は視覚的な情報から主観的に判断したニュアンスがあり、逆に「-은/-는/-을 모양이-」は状況から客観的に判断したニュアンス、「-은/-는/-을 것 같-」は主観的に判断したニュアンスがより強くなる。いずれの表現も「とても驚いて言葉が出ない」と判断したことを断定するのではなく、「とても驚いて言葉が出ないようです」と曖昧に表現することにより、柔らかさを出し婉曲的な用法で用いていると言える。

以上のことから、「-은/-는/-을 모양이-」も婉曲的に使え、その婉曲的用法は、現場からの直示的情報による客観的な判断を相手に伝える場合に用いる。

4. 4 -은/-는/-을지 모르-

- (5) a. 제가 너무 {무례했는지 몰라요/무례한 것 같아요/무례했을 거예요/무례했겠어요}.
b. 지금 가면 너무 {이를지 몰라요/이를 것 같아요/이를 거예요/이르겠어요}.

(5)a. の「-은/-는/-을지 모르-」は話者自身が無礼を働いたことを直接的に話すのを避け、推量表現を用いることで柔らかさを出そうとしている。「무례한 것 같아요」に言い替えが可能であるが、「-은/-는/-을지 모르-」を用いたほうがより丁寧な印象を与える。そして「-을 것이-」や「-겠-」の場合、自分自身の過去の無礼を振り返り、確信している印象を与え、婉曲的な印象は弱い。いずれも主観的な判断である。(5)b. の「-은/-는/-을지 모르-」は出発しようとする聴者に対し、あるいは外出予定の話者にまだ出ないと尋ねる聽

者に対し非直示的情報による主観的な判断で早いであろうという可能性を示し、「もう少し後に」という提案や予定を遠回しに話している場面である。こちらも「이를 것 같아요」に言い替えが可能である。そして「-을 것이-」の場合、断定はしないもののある程度の確信を持っており、「-겠-」の場合、「でしょうね」とやや直接的な印象を与え距離を感じる。(5)b. の聽者に提案や予定を話す場合、「-을 것이-」、「-겠-」には婉曲的な機能は見られない。また、これら(5)は、非直示的情報によって判断しているが、確信の程度に差がある。以上(2024 pp.110)で「-은/-는/-을지 모르-」が「아마、혹시、어쩌면」といった確実性の程度が低い副詞とよく共起すると述べている。しかし、「아마」は確実性の程度が低い副詞だろうか。

- (6) a'. 혹시 제가 너무 {무례했는지 몰라요/무례한 것 같아요/?무례했을 거예요/?무례했겠어요}.
 a''. 아마 제가 너무 {?무례했는지 몰라요/?무례한 것 같아요/무례했을 거예요/무례했겠어요}.

(6)a.の文に「혹시」を追加した(6)a'. 「-을 것이-」と「-겠-」は不自然になる。一方、「아마」を追加した(6)a''.は「-은/-는/-을지 모르-」と「-은/-는/-을 것 같-」が不自然になる。推量表現の婉曲性の程度は、このように確実性の程度と反比例する。

以上のことから、「-은/-는/-을지 모르-」の婉曲的用法は、現場からの非直示的情報による主観的な判断を相手に伝える場合に用いる。そしてその判断の確実性は低い。

4. 5 -을 것이-

- (7) a. 오늘보다 내일 떠나시는 게 더 {좋으실 것 같습니다/좋으실 겁니다}.
 b. 죄송합니다. 오늘은 제가 일이 많아서 만나기는 좀 {힘들 것 같습니다/? 힘들 겁니다}.
 c. 제 생각에는 그렇게 하면 {안 될 것 같습니다/*안 될 겁니다}.
 (以上(2024 pp. 120) より引用)

(7)a. は話者が自身の意見を丁重に表現する場合で「-은/-는/-을 것 같-」と「-을 것이-」の使用が自然であるが、(7)b. c. のように相手の意見に反対したり断る状況では「-을 것이-」は使えないと述べている。

- (8) 그러니까 우리나라 대한민국 전체 통틀 게 아니라 형같이 생각하는 사람

{ 있을 거예요/있을 것 같아요/있겠어요}. (母：だから大韓民国全体を含めてではなく、兄さんのように考える人もいると思います)

(8)は兄の発言を受け、反対の意見を述べている場面である。話者は、断定せずに推量表現を用いており、「-을 것 같」や「-겠-」も使えるが、「-(으)ㄹ 것이다」がより、その意見に自信を持っている印象を与える。

『표준국어대사전』での解説に、主観的という言葉がある。しかし국립국어원(2005)では、「-(으)ㄹ 것이다」と「-겠-」との比較で、「-(으)ㄹ 것이다」は主にある客観的であっても一般的な事例に基づいて推測するとしている。(8)は、話者の経験から判断しており、客観的というより主観的であるが、話者の経験をもとに、一般的な判断をしている。成昊炫(2016)は「-(으)ㄹ 것이다」が「-겠-」に比べて、相対的に高い確信度を表す述べている。田窪・金(2009 pp. 305)も「-을 것이」の肯定形はある種の強い予測や予想を表していると述べている。そこで、母語話者コーパスから収集した「-겠-」と「-(으)ㄹ 것이다」の文で「아마」との共起の数を調査したところ、「-겠-」は7回、「-(으)ㄹ 것이다」は20回で、確かに「-(으)ㄹ 것이다」の方が多かった。しかし、「当然」に当たる「당연히」についても「-겠-」と「-(으)ㄹ 것이다」との共起の数を調査したところ、「-겠-」は13回、「-(으)ㄹ 것이다」は2回となった。つまり確信度の高低では「-겠-」と「-(으)ㄹ 것이다」の違いを判断できない。

以上のことから、「-(으)ㄹ 것이다」の婉曲的用法は、非直示的情報による自身の経験をもとに一般的にはこうだと主観的に判断した内容を相手に伝える場合に用いる。

4. 6 -을 터이-

- (9) a. 지금 출발하면 길이 {막힐 텐데요/막힐 것 같아요}.
- b. 옷이 좀 {큰 것 같아요/*클 텐데요}. (이상속(2024 pp. 129)より引用)

以上속(2024 pp. 129)は、(9)a.は「あとで出発するのが良い」という話者の考えを遠回しに表現したもので、この時「-을 터이-」は婉曲の機能を持つが、(9)b.ように「服が似合わない」という話者の考えを遠回しに表現する時は「-을 터이-」は婉曲の意味を持てないとするが、その理由については詳しく述べていない。いずれも話者の考えを遠回しに表現しようとしているが、違いは何だろうか。例えば、(9)b.の状況が「服が似合わない」のではなく「服のサイズが合っていない」なら可能である。

(9)b'. 웃이 좀 {큰 것 같아요/클 텐데요}.

(9)a. は、今の時間帯は混むということを客観的に判断し、暗に「あとで出発するのが良い」と、(9)b'. もサイズの合っていない大きな服を着ている相手を見て客観的に判断をし、暗に「もっと小さい服を着たほうがいい」ということを示しており、いずれも現場からの直示的情報による話者の判断による。しかし、(9)b. の状況はあくまでも相手に服が似合っていないと判断した話者の主観である。

以上のことから、「-을 터이-」の婉曲的用法は、現場からの直示的情報による客観的な判断をし、暗に何かを相手に伝える場合に用いる。

4.7 -은/는가 보-, -나 보-

(10) a. 유미 씨는 그런 말을 듣기 {싫은가 봐요/싫은 것 같아요}. 우리 다른 이야기 할까요?

b. 제가 말실수를 {했나 봐요/한 것 같아요}. 사과할게요.

c. 발음이 조금 {다른가 봐요/다른 것 같아요}. 다시 한번 해 봅시다.

(10)a. は「ユミさんはそういう話を聞きたくないです」とは言わず、話者がユミさんの気持ちを察し、推量の形で「ユミさんはそんなことを聞きたくないようです」と配慮しながら話題の内容を変えようとしている。(10)b. は自身の失敗を認め相手に謝る場面であるが、こちらも「私が失言しました」とはつきり言わずに「私が失言したようです」と柔らかい表現を使い気遣いをしている。(10)c. は相手のミスを「発音が少し違います」と指摘するのではなく、「発音が少し違うようです」と遠回しに指摘している。これらはいずれも「-은/-는/-을 것 같-」への言い替えが可能であり、「-은/는가 보-, -나 보-」による婉曲的用法と言える。

以上のことから、「-은/는가 보-、-나 보-」の婉曲的用法は、話者が見たこと、つまり現場からの直示的情報を根拠に主観的に判断した内容を婉曲的に聴者に伝える場合に用いる。

4.8 -을까 보-、

以上(2024) は、「-을까 보-」が「-아서」と結合した「-을까 봐서」の形態でのみ推量表現として使われ、「-을까 보-」は婉曲の機能を持たないとしている。母語話者コーパスで収集したものもすべて「～かと思って」という

推量表現でのみ使用されており、推測する内容は、話者の心配や疑心、問題に対する解決案といったものであった。

以上のことから「-을까 보-」は婉曲的用法を持たない。

4. 9 -겠-

(11) a. 주말에는 사람이 많으니까 월요일이 더 좋겠어요.

b. 주문하시겠어요? (以上속(2024 pp. 74) より引用)

(11)a. は週末ではなく月曜日がもっと良いであろうという推測の機能と共に断りという状況を柔らかく表現する婉曲の機能を持つが、(11)b. は推測の機能ではなく婉曲の機能のみ持つ。以上속(2024 pp. 202) は「-겠-」単独では使えず、他の様態表現と結合して使われるとするが、いずれも単独で使用している例である。성미선(2009)は、こうした婉曲は自身の考え方や意見を慎重に話す婉曲表現とし、他にも「처음 봤겠습니다, 잘 알겠습니다」のような慣用表現も婉曲表現のひとつであると述べている。

(12) a. 의견이 있으면 말씀해주시면 감사하겠습니다. (母：意見があればおっしゃっていただけだと嬉しいです)

b. 어떤 것에 관한 유튜브인지 여쭤봐도 되겠습니까? (母：どんなことに関する YouTube なのかお尋ねしてもよろしいでしょうか)

(13) 아무거나 잘 먹는 사람이 더 좋겠습니다. (なんでもよく食べる人がより良いです)

(12)は、話者が聴者に対し現場の状況から「言ってほしい」「尋ねたい」と直接的に依頼や許可を求めるのではなく、遠回しに要請している。つまり直示的情報による現場の判断である。(13)は推量のニュアンスではなく、話者の「～が良い」という気持ちを「-겠-」を用いて柔らかさを出す婉曲的用法である。この場合は、自身の過去を振り返り判断した非直示的情報による主観的な判断である。そして「처음 봤겠습니다, 잘 알겠습니다」のような慣用表現も判断は、非直示的情報による現場の判断であり気持ちを柔らかく伝える婉曲的用法である。

以上のことから、推量表現「-겠-」の婉曲的用法は、非直示的情報を根拠に自身の主観的な判断で断る場合や気持ちを伝える場合、直示的情報を根拠に自身の主観的な判断で依頼や許可を求める場合に用いる。

4. 10 -은/는지

(14) 어떤 문제를 틀렸는지? (どの問題を間違えたのだろうか?)

(国립国語院(2005)より引用)

(14)は話者が間違えた事実を知っていて、それを前提に事実を柔らかく確認している。その際、聴者からの答えを求めるという感じではなく、自身の経験によって推測した内容を相手に確認しているというニュアンスである。

(14). 어떤 문제를 {틀린 것 같아/틀렸을 거야/틀렸겠어/틀렸을까}?

(14).は「どの問題を間違えたと思う?」「どの問題を間違えたんだ?」「どの問題を間違えるというのか?」といった意味になり聴者からの答えを求めている。「-을까-」に言い替えると「どの問題を間違えただろうか」という意味にはなるが、あくまでの推量の意味しか表さず婉曲の機能は持たない。

以上のことから、推量表現「-은/는지」の婉曲的用法は、「～だろうか」という疑問の形でのみ現れ、話者が知覚可能な直示的・非直示的情報を根拠に自身の主観的な判断を婉曲的に聴者に確認する場合に用いる。

4. 11 -을까

(15) a. 아이가 좀 산만하다고나 할까? (子どもがちょっと落ち着きがないと言
うか)

b. 너한테는 좀 어렵지 않을까? (君にはちょっと難しくないだろうか)
(이상속(2024 pp. 83) より引用)

이상속(2024)「-을까?」を用いることで、話者はつきりとしない判断を不明瞭に表現しており、このような話者の判断を表す場合の「-을까?」は婉曲の機能を持つとしている。(15)a.の場合、「子どもがちょっと落ち着きがない」と感じているが、それをはつきりと述べることを避けている。

(16) 저는 이렇게 보여주는 성격 그리고 어~ 약간 외향적인 성격이라고 해
야 될까? (母: 私はこうして見せる性格、そして、んー少し外交的な性格
とでも言うか)

(16)は母語話者コーパスから収集した「-을까?」の(15)a. と同様の用途であ

るが、これら「-을까?」は確かに「～と（でも）言おうか」という話者のはつきりとしない判断を述べているが、意志を表しており、推量表現ではない。

- (17) 만약에 정말 막대한 피해를 끼치는 태풍이 온다면 아마 기상청에서 미리 경보를 주지 않을까. (母：もし本当に莫大な被害をもたらす台風が来るなら、恐らく気象庁から予め警報が出されるんじゃないかな)

(17)は、母語話者コーパスから収集した「-을까?」の(15)b.と同様の用途である。動詞、形容詞、存在詞は「-지 않을까?」、指定詞は「-지 않을까?」と「-가/이 아닐까?」の形態で見られた。以上(2024)は、これらも話者のはつきりとしない判断を不明瞭に表現しているとするが、はつきとしていないではなく、(15)b.は「難しいと思う」(17)は「警報を出すと思う」という話者の主観的な判断を聴者に配慮し、はつきりと述べることを避け、「-지 않을까?」「-가/이 아닐까?」といった否定疑問を用いて遠回しに述べているのである。

話者の主観的な判断を聴者に配慮する目的なので、「너한테는 좀 어려울 것 같아」に言い換えが可能であるが、「-을까?」の否定がより丁寧さを表している。このことについては、유혜령(2010 pp. 396)でも、命題を断定せずに不確実に推測する表現や言葉の終わりを濁す表現よりも、命題全体を否定する表現は話者から命題との距離を最も遠くする方法であり、そのような理由で否定文の形式が含まれた形態・統辞的丁寧表示が他の丁寧表示に比べ丁寧の程度性が最も高く感じられるものとみられると述べている。

以上のことから、推量表現「-을까?」の婉曲的用法は、「～ではないだろうか」という否定疑問の形でのみ現れ、非直示的情報による自身の主観的な判断を婉曲的に聴者に伝えたい場合に用いる。

4. 12 -을걸

- (18) a. 지금 비대면 된 학교가 서울대 한양대 명지대도 했을걸? (母：今、非対面になった学校がソウル大、漢陽大、明知大もだと思うよ)
b. 지금 비대면 된 학교가 서울대 한양대 명지대도 했을 거야.

(18)a. はらかの情報により話者が推量している場面であるが、推量表現を用いることで断定を避け、相手に同意などの反応を期待している。過去に見たり聞いたりしたことにより今判断しているため、非直示的情報による推量である。(18)b. のように同じく非直示的情報による推量表現「-을 것이-」に言い替えることができるが、相手へ期待がなくなり、自身の見立てをより強く提示する印象となってしまう。

以上のことから、「-을걸」の婉曲的用法は非直示的情報による判断による推量表現を用い、聴者に同意などの反応を促す場合に用いられる。

5. 終わりに

本稿では、韓国語の多様な推量表現について、それぞれの婉曲的用法の特徴を考察した。考察は、이상속(2024)が提示した推量表現項目を研究対象とし、各項目の婉曲的用法の有無、話者が推量する際の情報が直示的か、非直示的か、そしてその判断が主観的なものか客観的なものかという観点から行われた。

まず、主観的な判断を婉曲的に伝える表現としては「-은/-는/-을 것 같다」が口語や非格式的な状況で最も使われており、それは制限が少ないとによる。直示的・非直示的情報ともに判断の根拠についていた。そして同じく制限が少ないことでよく用いられる表現は「-은/-는/-을 뜻하-」であり、非直示的情報を判断の根拠とし、文語で格式的な状況で使われる。情報が直示的で客観的な判断を柔らかく表現するのが「-은/-는/-을 모양이-」、暗に伝えるのが「-을 터이-」、情報が直示的で主観的な判断を柔らかく伝えるのが「-은/는가 보-、-나 보-」である。一方、非直示的情報を根拠とするものは「-은/-는/-을지 모르-」「-을 것이-」「-을까」「-을걸」で、「-은/-는/-을지 모르-」は確実性が低い、自身の主観的な判断を柔らかく伝えたい場合や丁寧な印象を与える目的で用いる。「-을 것이-」は話者の過去の経験に基づき一般的な判断を主観的に伝える場合、「-을까」は「～ではないだろうか」という否定疑問の形を取り自身の主観的判断を、「-을걸」は相手に同意などの反応を促す場合に用いる。「-겠-」「-은/는지」は直示的・非直示的の両方を情報とし、「-겠-」は直示的情報を根拠に主観的な判断で依頼や許可を求め、非直示的情報を根拠に主観的な判断で断りや気持ちを伝える場合に用いる。「-은/는지」は疑問の形で現れ、話者が知覚可能な直示的・非直示的情報に基づいて主観的な判断を相手に確認する場合に用いる。なお、「-을까 보-」は婉曲的用法が確認されなかった。

이상속(2024)では「-은/-는/-을 모양이-」「-은/는가 보-, -나 보-」「-은/는지」には婉曲の機能がないとされていたが、「-을까 보-」を除く 11 個の推量表現で婉曲的用法が確認できた。これら婉曲的用法については、先行研究でも述べている通り、既存の教科書ではほとんど扱っていない。성미선(2009)で教育法案を提案しているが、本稿で扱った推量表現項目がすべて扱われているわけではなく、また、学習者の立場から見た指標となるものもないのが現状である。日本語には婉曲的な表現が多くあり、日本語母語話者にとって婉曲的な語用については馴染みがあるため、明確な判断基準が提示されると習得もス

ムーズになるはずである。本稿の研究結果をもとに、日本語母語話者の韓国語学習者を対象とした婉曲的用法を中心とした推量表現の指導モデルの構築や日本語との対照分析を活かした語用的判断トレーニング、学習者が自ら判断基準を構築できるようなチェックリストやフローチャートの開発などを今後の課題としたい。

<参考文献>

- 金善美(2016)「韓国語の「-겠-」と「-을 것이다」の出現を決定する情報の登録領域について－直示性の観点から－』『ありあけ：熊本大学言語学論集』熊本大学文学部言語学研究室
- 田窪行則、金善美(2009)「韓国語と日本語のモダリティ表現の対照」『朝鮮半島のことばと社会－油谷幸利先生還暦記念論文集』明石書店
- 국립국어원(2005)『외국인 위한 한국어 문법 2』커뮤니케이션북스
- 성미선(2009)『한국어 추측표현의 완곡어법 양상과 교육방안』한양대학교 교육대학원 석사학위논문
- 양정(2018)『한국어 완곡 표현 연구』박문사
- 유혜령(2010)국어의 형태·통사적 공손 표지에 대한 연구『청람어문교육』41, 청람어문교육학회, pp.377-409
- 이기종(1996)『국어의 짐작·추측 구문 연구』한남대학교 박사학위 논문
- 이상숙(2024)『한국어 교육용 추측 표현』역락

ChatGPT による字幕翻訳の可能性と限界

-日本語・韓国語ドラマを対象に

李載賢（関西大学非常勤講師）

＜要旨＞

本研究は ChatGPT による字幕翻訳の可能性と限界をテーマに、中国現代ドラマ 3 作品の第 1 話を対象に、人間翻訳、ChatGPT 基本翻訳、プロンプト指定翻訳を比較分析した。分析は正確性・流暢性、字幕翻訳における省略・簡略化・文化的調整、日韓字幕の翻訳戦略の差異に着目して行われた。その結果、ChatGPT は流暢性や簡潔な表現生成において一定の成果を示し、字幕に求められる省略や名詞止めの使用なども部分的に反映していた。一方で、代名詞の誤訳や文化的含意の欠落、情報省略の不適切さなど限界も多く、特にドラマ字幕のように繊細な判断を要する場面では不十分であることが明らかとなった。プロンプト設定は翻訳の簡潔性や文字数制約への対応に効果がある一方、自然さを損なう場合もあり、今後はプロンプト設計や語用論的要素の反映に関する精緻な検証が必要である。

キーワード 生成 AI 翻訳、翻訳品質、字幕翻訳戦略、プロンプト

1. はじめに

近年、機械翻訳（AI 翻訳）技術の性能が高度化する中で、さまざまな分野における応用可能性が急速に拡大している。特に、日常的な意思疎通や情報伝達を目的とする翻訳においては、AI 翻訳が一定水準以上の品質を確保し、実用的なツールとしての地位を確立しつつある。一方で、機械翻訳の品質や活用上の限界に着目した先行研究では、文学翻訳のように情緒的・文化的文脈の理解が重視される分野において、AI 翻訳は依然として人間翻訳者による繊細な解釈や意訳、文脈把握能力を代替することが困難であると指摘されている（마승혜 2018；윤호숙 2018；이해미 2021）。

こうした状況のもと、字幕翻訳や漫画翻訳といった大衆文化コンテンツに

も AI 技術の導入が進み¹、特にプロンプトを用いた出力制御が可能な ChatGPT への関心が高まっている。本研究は、プロンプト設定が翻訳の方向性と品質に与える影響を実証的に検討し、人間翻訳者が担ってきた複合的判断をどの程度置き換えるか、さらにその可能性と限界を具体的に明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

機械翻訳に関する本格的な研究は、2016 年頃を契機にニューラルネットワークベースの翻訳技術の進展とともに活発化し始めた。研究テーマも、翻訳の品質や誤訳の類型分析、人間翻訳者との協業の可能性、さらには多様なジャンルへの応用など、多岐にわたって拡張されている（마승해 2018、윤호숙 2018、이주리애 2019、徳永 2020、전현주 2020）。その中でも翻訳品質に関する研究では、機械翻訳が文法的には高い正確性を示す一方で、文脈や感情、文化的ニュアンスの解釈においては依然として限界があるという指摘が継続的になされてきた。しかし近年では、大規模言語モデル (Large Language Model: LLM) の発展に伴い、ChatGPT のような生成 AI による翻訳の可能性に注目する研究が増加している。プロンプトを適切に設計することで、こうした生成 AI が語用論的意味や情報構造を考慮した翻訳だけでなく、詩的効果や音律までもある程度再現可能であるとの研究結果も報告されている（山田 2023；成田 2024）。翻訳を主要機能としていないにもかかわらず、従来のニューラル機械翻訳よりも文脈に即した精緻な翻訳結果を生成する例も増えている。たとえば 박미정 (2023) は、ChatGPT による日韓翻訳結果を人間翻訳および従来の機械翻訳と比較分析した研究において、同モデルが含意的表現や非定型的な口語発話を文脈に応じて明示化し再構成する優れた能力を有することを評価している。また、多様なパラフレーズの生成が可能である点においても言語的柔軟性が高く、「単純化 (simplification)」および「明示化 (explication)」といった翻訳の普遍的傾向 (universality of translation) が顕著に現れると指摘している²。

一方で、字幕翻訳は一般的な文書翻訳とは異なり、限られた時間と画面スペースの中で視聴者の認知的負担を最小限に抑え、映像と字幕の同時理解を促す必要があるという独自の特徴を持つ。이은숙 (2012) の研究によれば、字

¹ <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/ko/news/backstories/3459/>

² 박미정 (2023) の表記をそのまま引用したものであり、ここでいう「明示化」は「*explication*」、「単純化」は「*simplification*」を指す。

幕翻訳においては不要な情報を省略したり、簡潔な口語表現へと圧縮したり、主要な情報を中心に再構成したりする戦略が用いられる。また、丁寧表現や呼称などの社会言語的要素も、文脈に応じて省略・調整され、自然な流れが保たれるように工夫されている。映像翻訳は単なる文字変換にとどまらず、登場人物の感情、発話状況、背景にある文脈、文化的背景などを総合的に反映する必要がある作業であり、高度な判断力と表現力が求められる。したがって、こうした複雑な作業は依然として生成 AI にとって困難な課題であるとされる（山田 2024）。

さらに、日韓字幕には文の構造や翻訳戦略において明確な違いが見られる。尹（2016）によれば、日本語字幕は助詞を省略し、名詞で終わる不完全な文が頻繁に用いられ、簡潔さ、リズム、強調といった語用論的效果を重視する傾向がある。一方、韓国語字幕は文法的構造を維持した完結した文を好み、意味の明確な伝達と論理的な流れを重視する傾向にある。そのため、日本語字幕は省略や圧縮に柔軟であるのに対し、韓国語字幕は文法的整合性や情報の完全性をより重視する傾向にある。

以上を踏まえ本研究では、①ChatGPT が字幕翻訳においてどの程度の品質を実現できるのか、②日韓字幕における文構造や翻訳戦略の違いが反映できるか、③プロンプト設定の違いが出力に及ぼす影響、の三点を中心に検証し、生成 AI 翻訳の適用可能性と限界を明確化する。

3. 研究対象と分析内容

本研究は、生成人工知能翻訳モデルである ChatGPT の字幕翻訳における翻訳品質と翻訳戦略を分析することを目的とし、韓国語と日本語のドラマ字幕を対象に比較分析を行った。対象データは中国現代ドラマ 3 作品の第 1 話であり、以下の 3 種類の翻訳を比較した。

- I. 人間翻訳 (Human Translation, HT) : Netflix が提供する公式字幕を使用
- II. ChatGPT 基本翻訳版 (Machine Translation, MT1) : 「自然な韓国語／日本語の会話体で翻訳してください」という一般的なプロンプトを入力して生成
- III. プロンプト指定翻訳版 (Machine Translation, MT2) : 「ドラマ字幕に適した表現で、1 行あたり 16 文字以内、文末に句点やコンマを使用しない

でください」という条件を提示して生成³

現代ドラマを分析対象としたのは、古装劇が歴史的背景や文語的表現に依拠するのに対し、現代劇は口語表現・流行語・日常語彙を豊富に含み、実際の字幕翻訳における自然性・受容性・流暢性を検討するのに適しているためである。

分析は以下の3点に焦点を当てた。

- (1) ChatGPT によって生成された字幕翻訳の正確性および流暢性はどの程度か。
- (2) 字幕翻訳における主要な翻訳戦略が ChatGPT の翻訳結果にも反映されているか。
- (3) プロンプトの設定方法によって翻訳品質や翻訳の傾向がどのように変化するか。

特に(2)に関しては、박윤철(2008)および이은숙(2012)の研究に基づき、字幕翻訳において重要な可読性と言語的経済性の観点から、以下の具体的な要素を中心に分析を行った。

- ①不要な反復表現や冗長な情報が効果的に省略されているか。
- ②音声や映像から視聴者が把握できる情報は字幕で省略または単純化され、認知的負担を軽減しているか。
- ③原文の文化的表現が、目標言語の受容者にとって理解可能な形に調整またはローカライズされているか。
- ④日韓字幕における翻訳戦略の違いが、ChatGPT の翻訳結果にも反映されているか。

以上の分析を通じて、ChatGPT を用いた字幕翻訳の品質を多角的に検討し、その実用可能性と限界、さらに改善の方向性を明らかにすることを目指す。

4. 分析

4.1 ChatGPT 翻訳の品質：正確性と流暢性

ChatGPT による字幕翻訳の品質は、先行研究（서보현 2018；山田 2023）を

³ ドラマ字幕では、1行あたり 12~16 文字以内に収めること、文末に句点やコンマを付けないことが一般的である。

もとに、「正確性 (accuracy)」と「流暢性 (fluency)」の 2 項目に分類して分析した。正確性の検討にあたっては、以下のような誤り項目を中心に、翻訳結果が原文の意味をどの程度忠実に伝達しているかを確認した。

- ① 語彙の意味の誤り（原文の語が異なる意味で誤って訳される）
- ② 固有名詞や専門用語の誤訳
- ③ 文の構成要素の脱落（意味伝達に不可欠な語句が抜けている）
- ④ 多義語の不適切な処理
- ⑤ 慣用表現の直訳
- ⑥ 指示語および代名詞の混同

たとえば、④の多義語の不適切な処理として、以下のような例が挙げられる。

- (1) ST: 说人话「普通に言って⁴」
- HT-K: 잘나셨네요! 그냥 솔직히 물어
MT1-K: 쉽게 말해봐.
MT2-K: 쉽게 말해
HT-J: あっそ で本当は?
MT1-J: 普通に話して
MT2-J: 普通に言って (ST1-K, ST1-J)

原文(ST)の「说人话」は直訳すれば「人間の言葉を話せ」という意味だが、実際の使用場面においては、話し手に対して「①難解な表現を平易に言い換えること」あるいは「②曖昧な言い方を避けて率直かつ明確に述べること」を求める口語的表現である。事例(1)においては、「②率直に本当のことを言う」という意図で用いられていたが、ChatGPT の翻訳結果では、日本語・韓国語とともに「①簡単に言いなさい」と解釈されていた。これは語彙レベルの意味伝達には一致しているものの、発話の語用論的機能や文脈上の含意を十分に反映できていない翻訳であると考えられる。

また、例(2)は⑤の慣用表現の直訳の誤りに該当する。「五毛钱技术」は粗雑な技術、未熟なスキルを意味する表現であり、原文(ST)では「未熟だが、いつでも手伝う」という意図で用いられている。しかし、MT1 および MT2 では、日本語も韓国語も「五毛钱」という語を直訳しており、文脈に即した意味として理解されにくい訳文となっていた。

⁴ ST (中国語原文、source text) の日本語訳は筆者による。以下同様である。

(2) ST: 没问题 五毛钱技术随时为你服务

「問題ないよ 素人技だけどいつでもサービスしてあげる」

HT-K: 그래, 간단하니까 얼마든지 고쳐 줄게

MT1-K: 콜! 오십 전 기술력으로 해결해드립니다!

MT2-K: 문제없어 오십전 기술력 언제든 가능

HT-J: 任して 簡単だから仰せのままに

MT1-J: 五毛スキルでいつでもサービス!

MT2-J: 五毛の技術 いつでも OK (ST1-K, ST-J)

⑥指示語および代名詞の混同に関しては、以下のような例が挙げられる。

(3) ST: 我刚才是打电话给您的?

「さっき私が電話した相手って、あなたでしたか?」

HT-K: 그럼 방금 제가 전화드린 분이 예 대표님이었어요?

MT1-K: 아까 그 전화, 혹시 저한테 하신 거예요?

MT2-K: 아까 전화한 사람 저예요

HT-J: まさか… あなたが飼い主の方ですか?

MT1-J: さっき電話したの私ですよね?

MT2-J: さっき電話したの私です (ST3-K, ST3-J)

原文は、話者が子犬の飼い主に電話をかけたところ、相手がイエ代表であったことを後になって認識し、驚く場面である。しかし、MT1 および MT2 の翻訳では「電話をかけたのが自分である」という情報のみが強調され、相手がイエ代表であったという点が反映されず、主語と対象の対比が希薄になっている。すなわち、「自分が電話をした」という内容は伝達されているものの、「その電話の相手がイエ代表であった」という文脈上重要な情報が再現されておらず、主語と対象の関係が曖昧になっている点に問題がある。さらに、代名詞の解釈が不正確であるだけでなく、韓国語や日本語では不要となる代名詞がそのまま訳出されるといった誤りも確認された。

続いて、流暢性の項目では、文が自然で文脈に適合しているかどうかを以下の基準に基づいて評価した。

- ① 文の流れと文脈における自然さ
- ② 話し方や社会的関係など語用論的要素の適切な反映
- ③ 文体の一貫性の保持

たとえば、例(4)は叔父と姪の会話であり、叔父が自分もコンピュータ好きであり、両親とは異なるという話をしてから、自身が経営するネットカフェの話題に移行する場面である。ドラマ字幕では簡潔化と可読性のために接続詞を省略することが多いが、例(4)のように場面が転換される場合は、人間翻訳者のように適切な接続詞を挿入するほうが視聴者の理解を助ける。このため、例(4)は誤訳とは言えないものの、①文の流れと文脈における自然さに欠ける例である。

(4) ST: 你说 你爸爸搞考古 妈妈搞历史/你却搞上计算机了/我看出来了 你跟舅舅真是一路人/这儿我也没有太多的精力打理了/回头啊 你要不要我就让它先空着「お前の父さんは考古学者で 母さんは歴史学者/でもお前はコンピュータばかり/やっぱりおじさんと同じだな/この店ももう世話を余裕がない/お前が引き継がないなら 閉めるしかない」

HT: 네 아빠는 고고학자고/엄마는 사학자인데/넌 컴퓨터 전공이지/다 날 닮아서 그래/근데 이제 힘들어서/가게 못 하겠다/네가 마다하면 그냥 접어야겠어

MT1: 네 아빠는 고고학, 엄마는 역사 전공인데/넌 컴퓨터에 빠졌으니 말 다 했지./보니까 삼촌이랑 성향이 똑같더라~/여긴 나도 신경 쓸 여력 없어서 말이지./너 안 쓸 거면 그냥 비워두지 뭐.

MT2: 아빠는 고고학 엄마는 역사/근데 넌 컴퓨/삼촌이랑 똑 닮았네/나도 이제 이 가게 돌볼 힘이 없어/네가 안 쓸 거면 일단 비워둘게

(ST1-K, ST1-J)

日本語や韓国語のように敬語体系が発達した言語においては、話者の話し方や丁寧表現の使用が、社会的関係を反映する重要な語用論的因素として機能する。特にドラマ字幕の翻訳においては、登場人物間の関係性に応じた適切な敬語使用と話し方の一貫性が、翻訳の自然さや受容性に大きな影響を与える。この点を確認する評価項目が、②話し方や社会的関係など語用論的因素の適切な反映、③文体の一貫性の維持である。

分析の結果、ChatGPT は、発話の中に話者と聞き手の関係を明示する情報（例：呼称、指示語など）が含まれている場合には、比較的適切な敬語表現を用いる傾向が見られた。しかし、相互関係に関する情報が不明確な場合や、場面が転換して文脈が変化する場合には、話し方が不適切に変化したり、文体の一貫性が保たれない事例も確認された。これらの結果は、生成 AI がある程度まで文脈を反映できるとはいえ、語用論的判断に必要な人物関係の把握や場面

間の接続性の処理には依然として限界があることを示している。

MT1 および MT2 における正確性と流暢性の誤りをそれぞれ計数した結果は表 1 に示した。全体的に見て、ChatGPT の字幕翻訳の品質は比較的良好な水準を示しており、全翻訳のうち誤訳の割合はおおよそ 5~10%程度であった。これは、英語から日本語への翻訳において機械翻訳の平均誤訳率が 10%以下であったとする山田(2023)の研究結果と類似した数値である。また、誤訳の種類別の分布を検討した結果、正確性の誤りが流暢性の誤りよりもやや高い割合を示した。これは、流暢性に関しては ChatGPT の性能が大幅に向上した一方で、意味の正確な伝達には依然として人間翻訳者による確認が必要であるという山田(2023)の指摘とも一致する結果である。

表 1 ChatGPT 翻訳の正確性・流暢性エラーの分類

		ST1-K	ST1-J	ST2-K	ST2-J	ST3-K	ST3-J
正確性	MT1	35 (6.4%)	41 (7.5%)	26 (3.7%)	30 (4.9%)	19 (3.9%)	30 (6.7%)
	MT2	56 (10.3%)	54 (9.9%)	67 (9.7%)	63 (10.2%)	32 (6.5%)	16 (3.6%)
流暢性	MT1	20 (3.7%)	24 (4.4%)	58 (8.4%)	8 (1.3%)	16 (3.3%)	5 (1.1%)
	MT2	55 (10.1%)	6 (1.1%)	76 (11.0%)	23 (3.7%)	23 (4.7%)	12 (2.7%)
合計		543	547	694	618	491	445

全体の誤訳率は約 10%前後に抑えられていたものの、意味の省略や重大な誤訳も確認され、翻訳品質に大きな影響を及ぼす可能性があるため看過できない。

翻訳品質を評価するにあたっては、誤訳を意味伝達および利用者への影響の程度に応じて、「重大な誤り(critical error)」と「軽微な誤り(minor error)」に分類することができる (JTF, 2015)。重大な誤りとは、読者や視聴者に誤解を与えたり、情報の誤った伝達を引き起こすような誤訳であり、特に否定・肯定の逆転、数値や固有名詞の誤訳など、訳文の信頼性を著しく損なう場合が該当する。一方、軽微な誤りは、文法や表現上の問題であるものの、全体的な理解には大きな支障をきたさないレベルのものである。たとえば、例(3)におけるように、主語や代名詞の解釈が不正確で、発話の主が明示されず、文脈理解を妨げる場合には、視聴者に実質的な混乱を生じさせるおそれがあり、「重大な誤り」と見なされる。

このような結果は、単なる誤訳率のみで翻訳品質を評価することに限界が

あることを示しており、翻訳誤りの性質と受容者への影響に関する質的な分析、および体系的な改善策の並行的な検討が必要であることを示唆している。

以上、ChatGPT による翻訳の品質を概観してきたが、本研究の対象はドラマ字幕であり、単に意味伝達の正確性と自然さだけでは十分とは言えない。次節では、ドラマ字幕というジャンルの特性が翻訳結果にどのように反映されているかを、より具体的に考察する。

4.2 字幕翻訳における特性の反映

4.2.1 冗長な表現・繰り返し表現の省略

ドラマ字幕は、時間的・空間的な制約がある中で、視聴者の認知的負担を軽減するために、冗長な表現や繰り返し表現を省略する戦略を用いる。ChatGPT においても、以下の例(5)のように簡潔に処理された例が確認された。MT1 にはやや直訳傾向が見られたが、MT2 では人間翻訳と同様の長さと省略戦略が用いられていると考えられる。

(5) ST: 你知道我的兴趣爱好吗? /你知道我什么时候高兴 什么时候不高兴吗? /你知道我工作压力大的时候 怎么样开解自己吗? /我开心和不开心的时候喜欢做什么? /这些你关心过吗? 「私の趣味知ってる? ・私がいつ嬉しくて いつ機嫌悪いか知ってる? /仕事でストレス溜まったとき どうやって発散するか知ってる? /私が嬉しいとき や悲しいとき 何するか知ってる? /そんなこと気にしたことある?」

HT: 私の好きなことや/喜ぶことは何? /仕事で疲れた時の/リラックス法は? /うれしい時や/悲しい時は何をする? /気にしたことあった?

MT1: じゃあ私のこと、どれだけ知ってる? 私の趣味は? いつ嬉しくて、いつ落ち込んでるか、知ってる? /仕事でストレスたまつた時、どうやって発散してるか知ってる? /嬉しい時、悲しい時、/私が何をしたいか、考えたことある?

MT2: 私の趣味知ってる? 喜怒哀楽わかる? /ストレス時の癒し方は? /嬉しい時何してるか/気にしたことある?

(ST2-K, ST-J)

4.2.2 非言語情報の反映および簡略化

視聴者は字幕以外にも、音楽、効果音、登場人物の表情や動作など、多様な視聴覚情報に基づいて意味を構築するため、字幕翻訳においては必ずしも言語的要素の完全な再現が求められるわけではない。むしろ、同一の表現が繰り返される場合、状況の文脈によってその機能や意味が変化することがあるため、直訳ではなく、画面上に現れる情報との関係を考慮し、意味的に適切な表現へ

と意訳する戦略が求められる。たとえば、例(6)では、登場人物がドアを叩きながら相手の名前を繰り返し呼ぶ場面であるが、単に名前を繰り返すのではなく、「開けて！」などのように行行為の目的を明示する翻訳の方が、より効果的な伝達を可能にする。しかし、このような視聴覚的文脈を踏まえた柔軟な翻訳戦略は、依然として機械翻訳にとって困難な課題であり、現在の生成AI翻訳でも、繰り返し表現の機能的意味を適切に把握して自然に意訳することには限界がある。したがって、この種の翻訳には、人間翻訳者による解釈と判断に基づく戦略的介入が依然として不可欠である。

(6) ST: 贺灿阳 贺灿阳「ハー・ツアンヤン、ハ-・ツアンヤン」

HT-K: 허찬양, 문 열어

MT1-K: 허찬양, 허찬양

MT2-K: 허찬양, 허찬양

HT-J: ハー・ツアンヤン, 開けなさい

MT1-J: ホ・ツアンヤン, ホ・ツアンヤン

MT2-J: ホ・ツアンヤン, ホ・ツアンヤン

(ST3-K, ST3-J)

4.2.3 文化的要素の適切な解釈

翻訳者は単なる言語の置き換え者ではなく、原文に含まれる文化的文脈や価値観を理解し、それを目的言語の文化に即して伝える「文化の仲介者」としての役割を担っている。特にドラマ翻訳においては、文化的特性が反映されたセリフや場面が多く、これらを適切に解釈・伝達する過程は、最も難しい課題の一つである。

本研究の分析結果からも、文化的背景に対する適切な解釈が欠如している事例が多数確認された。例(7)では、中国語の原文に「相手が人か犬かわからない」という表現が見られたが、これを韓国語や日本語に直訳すると「人と犬を直接比較する」表現となり、文化的感情や社会的受容規範にそぐわない表現となる。実際、人間翻訳では両言語において適切に意訳され、不必要的否定的含意が取り除かれていたが、ChatGPTによる翻訳では、プロンプトの設定の有無にかかわらず、文化的含意や社会的受容性を考慮せずに直訳する傾向が見られた。これは、文化的背景情報への参照の不足および意訳遂行の限界という、機械翻訳の構造的問題を再確認させるものである。

一方で、改善の可能性が見られる事例も存在した。例(8)では、中国語の原文にて、オンラインで知り合った相手に対して「食事をおごる」という形で会う約束をする場面が描かれている。韓国語訳では、人間翻訳・MT1・MT2 のすべてで同様の表現が用いられていたが、日本語訳では違いが確認された。日本

の文化圏では、親しくない相手に食事をご馳走するという習慣があまりなく、直訳では文化的な違和感が生じる可能性がある。このため、日本語の人間翻訳では「一緒に食事をしよう」といった形で意訳が行われており、MT2でもMT1とは異なり、日本の社会文化的特性を考慮した調整がなされたと見られる。これは単一の例文に基づくものであり一般化には限界があるものの、他のいくつかの例文においても同様の傾向が観察された。

(7) ST: 不知道和你玩游戏的是人还是狗

HT-K: 온라인 게임 상대의 정체는 절대 모른다고

MT1-K: 게임하는 상대가 사람인지 개인지 모른다고.

MT2-K: 같이 게임하는 사람이 사람인지 개인지 모른대

HT-K: 画面の向こうの相手はわからない

MT1-K: 一緒に遊んでる相手が人か犬かもわからないって

MT2-K: 相手が人か犬かわからないって

(ST1-K, ST1-J)

(8) ST: 我请你吃饭

HT-K: 내가 밥 살게

MT1-K: 내가 밥 살게.

MT2-K: 밥 한 끼 살게

ST-J: 食事にでもどう？

MT1-J: ご飯おごるよ

MT2-J: (会って)食事でもどう？

(ST1-K, ST1-J)

4.2.4 韓日字幕における差異

韓国語と日本語の字幕は、文の構成および翻訳戦略において明確な違いが見られる。尹(2016)は、日本語字幕が簡潔性および語用論的效果を重視し、助詞止めや名詞止めなどの不完全文を頻繁に使用するのに対し、韓国語字幕は文法的な完結性と意味伝達の明確さを重視すると指摘している。

本研究では、このような違いがChatGPTの翻訳にも反映されているかを確認するため、生成された字幕における名詞および助詞止め文の出現頻度を比較し、以下の表にまとめた。

表2 ChatGPT字幕翻訳における名詞・助詞止め文の頻度比較

	ST1-K	ST1-J	ST2-K	ST2-J	ST3-K	ST3-J
HT	5	82	0	53	0	42
MT1	12	53	0	48	1	41

MT2	22	67	4	96	2	41
合計	543	547	694	618	491	445

本研究は3作品のドラマを対象としており、結果を広く適用するには限界があるが、日本語訳 MT1・MT2において名詞止め・助詞止め文が相対的に多く使用されている傾向は確認された。これは、日本語字幕翻訳が文末の言い方を工夫して、文章のつながりを保ちつつ文体を簡潔にするという特徴を反映した結果だといえる。この点において、ChatGPTは韓日字幕翻訳における戦略的な違いを一定程度反映していると考えられる。

4.3 プロンプトの有無による違い

字幕翻訳は、媒体の特性上、文字数および画面表示時間に制限があるため、原文の一部情報を省略せざるを得ない。こうした状況下において、人間翻訳者は主要情報と副次的情報を選別し、副次的な内容については大胆に省略する戦略を採用する。これは、受容者の理解を妨げることなく、可読性と情報伝達のバランスを保つ意図に基づいている。

しかし、ChatGPTにおいてはこのような判断が常に適切に行われるわけではなく、例(9)のように、会う場所（金陵城の外の宿屋）といった重要な情報が省略されたり、逆に不必要的情報が残されたりするなど、判断の方向性が原文の意図と乖離する事例も確認された。これは、機械翻訳が文脈に応じて一貫性をもって情報選別および縮小戦略を遂行するには限界があることを示唆している。

- (9) ST: 五点金陵城外客棧見「5時に金陵城の外の客棧（宿屋）で会おう」
 HT: 5 시에 금릉성 외곽의 오두막에서 봐
 MT1: 5 시에 금릉성 외곽 여관에서 보자!
 MT2: 다섯 시에 보자 (ST1-K, ST1-J)

また、韓国語は助詞の省略があまり見られない言語であるが、ChatGPTにおいて文字数の制限をプロンプトで指定した場合、簡潔化のために名詞止め文や短文に分割され、例(10)MT2-Kのように助詞が省略される傾向がある。その結果、不自然またはぎこちない文が頻繁に生成されることが確認された。

- (10) ST: 我可能失去了 / 我最后一次 初恋的机会了
 「私はたぶん失った / 私の最後の初恋のチャンスを」
 HT-K: 아무래도 놓친 것 같아/첫사랑을 할 수 있는 마지막 기회를
 MT1-K: 어쩌면… 내 마지막 첫사랑 기회를 잃은 걸지도 몰라

MT2-K: 난 아마도/내 마지막 첫사랑 놓친 거 같아

HT-J: 私は彼を失ってー/ 最後のチャンスを逃しちゃった

MP1-J: 私… / 初恋のチャンス、最後だったかも

MP2-J: 私はきっと失った/最後の初恋のチャンスを

(ST3-K, ST3-J)

4.4 ChatGPT に見られた優れた点

これまでの分析では、ChatGPT による翻訳に見られた誤訳の事例や翻訳戦略の不十分さに焦点を当ててきたが、それと同時に、人間の翻訳に匹敵するレベルの優れた成果も一部で確認された。実際、いくつかの訳出には、人間翻訳者が用いるような戦略的アプローチが見られ、意味の調整や文脈に基づく創造的な介入が行われていた例も存在する。

たとえば、例(11)では、文脈の流れに応じて語順を調整することで、より自然な表現が実現されており、例(12)では単純な反復を避けて意訳を用いることで、翻訳の流暢性および受容性が高められていた。このような例は、ChatGPT が単なる言語の置き換えを超えて、ある程度の戦略的な思考を取り入れて働いていることを示す結果である。

(11) ST: 我叫你来例行谈话/ 是因为你这个月的考勤 实在是惨不忍睹

「君を定例の面談に呼んだのは、今月の勤怠状況が本当に目も当てられないほどだからだ」

HT-K: 내가 널 부른 건/이번 달 네 근태 상태가/너무 엉망진창이어서야

MT1-K: 이번 달 근태 기록이 너무 엉망이라/정기 면담하자고 부른
거예요.

MT2-K: 이건 정기 면담이고요/이번 달 근태가/진짜 심각해요

HT-J: 定期面談の日よ/ 今月の勤怠は/目も当てられない状況ね

MT1-J: 今月の勤怠がひどすぎて/定例の面談に呼んだの

MT2-J: 定例面談よ/今月の出勤がひどすぎる

(ST3-K, ST3-J)

(12) ST: 对 我们公司订了玻璃/好 /好 /好

「はい、弊社がガラスを発注いたしました。／承知しました／承知しました／承知しました」

HT-K: 네, 저희가 유리를 예약했어요/알겠습니다/네/그려죠

MT1-K: 네, 유리 주문은 저희 회사에서 했어요. /좋아요. /좋습니다./네,
그렇게 진행해 주세요.

MT2-K: 네 유리 주문했어요/네/네

HT-J: はい ガラスの注文を/ ええ/ そうですか / 分かりました

MT1-J: はい ガラスはうちが注文しました/はい/はい/はい

MT2-J: はい ガラス発注の件ですね/ はい/はい/はい

(ST3-K, ST3-J)

ただし、言語ごとに見られた翻訳の改善傾向には一貫性がなかった。同一の原文をもとにしているにもかかわらず、韓国語訳では人間翻訳に近いレベルの出力が得られたのに対し、日本語訳では直訳に近い形で処理された例や、その逆のケースも確認された。このことから、ChatGPTによる翻訳には、言語間で一貫した翻訳戦略や傾向が見られるとは断言しがたい側面があるといえる。

5. 結論および今後の課題

ChatGPTによる字幕翻訳は、全体的に従来の機械翻訳と比較して、正確性および流暢性の点で向上が見られ、一部の表現では人間の翻訳者と類似した戦略的処理も確認された。しかしながら、意味の脱落、代名詞の誤訳、文化的含意の未反映といった、機械翻訳に特有の誤りも数多く見受けられ、特に繊細な判断と解釈を要するドラマ字幕の翻訳を全面的に任せると、現段階では時期尚早であることが明らかとなった。

それでも、先行研究（山田 2024 など）が示すように、補助的な翻訳ツールとして活用できる可能性は高く、作業効率の向上に資する潜在力は確かに存在する。また、ChatGPTは冗長な表現の省略、文化的調整、字幕翻訳に特有の文体簡潔化などの戦略を一定程度再現し、人間翻訳と類似する成果も得られた。特に、日本語と韓国語の字幕に見られる文体的な相違点が、ある程度翻訳結果に反映されていた点は注目に値する。一方で、視聴覚的文脈の解釈や文化的含意の処理においては、依然として限界が存在することも確認された。

一方、具体的なプロンプトを設定することで、字幕翻訳に適した文字数制限、簡略化、可読性の確保といった戦略が一定程度実現可能であることも明らかになった。しかし一部のケースでは、むしろ一般的なプロンプトによる翻訳(MT1)の方が自然である例も見られた。これは、プロンプトの具体性が翻訳の質に影響を及ぼす可能性を示唆しているが、プロンプトの設計によってどの要素がどのように変化するかについて、より精緻な分析が今後必要であることを意味する。たとえば、이은숙(2012)が指摘したように、字幕翻訳では敬語表現の省略や簡略化が戦略的に活用されることがある。しかし、本研究において分析対象としたプロンプト設定による訳文(MT2)では、人間翻訳と比較した場合、不必要に敬語性が低下している事例が多数確認された。こうした変化が、文字数の削減を優先した結果によるものか、あるいはChatGPTの翻訳処理その

ものの限界に起因するものかについては、今後より体系的な検証が求められる。

今後の研究においては、プロンプトの構成要素ごとの影響分析、ジャンルや発話タイプによる翻訳傾向の比較、登場人物間の関係性や語用論的要素の反映度に関する評価など、より精緻な分析が必要とされる。これにより、生成AIによる翻訳の実用性に関する具体的な基準が確立されることが期待される。

＜参考文献＞

- 徳永和博(2020)「自動翻訳機が訳出困難な学習英文法の項目に関する一考察」『立命館言語文化研究』32(2), pp.45-63.
- 成田一 (2024) 「AI 翻訳にも限界がある」『Japio year book』pp. 230－238.
- 日本翻訳連盟 (2018) 『JTF 翻訳品質評価ガイドライン』第1版
- 尹盛熙(2016)「日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現 —韓国語との対照分析—」『社会言語科学』18(2), pp. 19-36.
- 山田優(2023)『ChatGPT』翻訳術、アルク.
- 山田優 (2024) 「映像と漫画の AI 翻訳についての現状と展望」『通訳翻訳ジャーナル 2024AUTUMN』54-56, イカロス出版.
- 마승혜(2018)「문학작품 기계번역의 한계에 대한 상세 고찰」『통번역학연구』22(3), pp. 65-88.
- 박미정(2023)「생성형 AI 와 기계번역-챗 GPT 번역을 통한 한일통역교육 고찰」『통번역학연구』27(3), pp. 27-56.
- 박윤철(2008)「자막번역의 생략과 삭제」『번역학연구』9(4), pp. 171-194
- 서보현·김순영(2018)「기계번역 결과물의 오류유형 고찰」『번역학연구』19(1), pp. 99-117.
- 윤호숙(2018)「일한기계번역의 오류유형에 관한 고찰-일본소설을 중심으로」『일어일문학연구』107(1), pp. 3-25.
- 이은숙(2012)「자막번역의 가독성 전략: 축약과 정보 변화 중심으로」『통역과 번역』14(2), pp. 153-171.
- 이주리애(2019)「한일 헤드라인 번역의 포스트에디팅 가이드라인 고찰」『통역과 번역』21(2), pp. 119-144.
- 이해미(2021)「AI 기반 한일 번역 서비스 구축에 관한 언어학적 제언-일본소설 내 수동문 패턴을 일례로-」『일본학연구』64, pp. 189-209.
- 전현주(2020)「인간과 기계번역의 공존 패러다임 모색: PBL 기반의 AI 번역 툴 활용 번역수업 운영 프로세서를 중심으로」『통번역교육연구』18(4), pp. 59-96.

<例文出典>

- ST1: 中国ドラマ『微微一笑很傾城』（邦題：『シンデレラはオンライン中！』、2016年）第1話字幕
- ST2: 中国ドラマ『理智派生活』（邦題：『理性的な人生』、2021年）第1話字幕
- ST3: 中国ドラマ『下一站是幸福』（邦題：『働く女子流ワタシ探し』、2020年）第1話字幕

일본에서의 한국어 수량사구 교육 현황 분석

-한국 현지와의 차이를 중심으로-

유아리사(이화여자대학교)

<요지>

본고는 한국어 수량사구가 일본에서 어떻게 교육되어 있는지 교육 현황을 한국 현지와의 비교를 중심으로 살펴보고 그 차이를 밝히는 데 목적을 두고 진행하였다. 이를 위해 교재 분석과 일본인 학습자를 대상으로 한 수량사구 이해 및 생산 과제를 실시하였다. 2 장에서는 어종에 따라 한국어 분류사와 수사를 부류화하여 한국어 수량사구의 특징에 대해 기술하였으며 수량사구가 어떻게 교육되어 있는지 알아보기 위해 일본과 한국에서 출판된 한국어 교재를 분석하여 제시되어 있는 분류사를 정리하였다. 3 장에서는 본 연구에서 실시한 실험 ‘그림 보고 정답 고르기 과제’와 ‘소리 내어 읽기 과제’의 연구 방법에 대해 기술하였으며 4 장에서는 실험 결과를 피험자 집단과 분류사 및 수량사구 유형에 따라 제시하였다. 교재 분석과 실험 결과를 통해 수량사구 교육에 있어 일본과 한국 간에 차이가 있으며, 그 차이가 학습자의 수량사구 이해도 및 사용 능력에 드러남을 확인하였다. 또한 수량사구 유형에 따라서도 다소 차이를 보여 어종을 고려한 수량사구 교육의 필요성을 알 수 있었다.

키워드 한국어교육, 한국어 분류사, 한국어 수량사구, 교재 분석, 일본인 한국어 학습자

1. 들어가며

본 연구는 한국어 수량사구가 일본에서 어떻게 교육되어 있는지 교육 현황을 한국 현지와의 비교를 중심으로 살펴보고 그 차이를 밝히는 데 목적이 있다.

이를 위해 교재 분석과 일본인 학습자를 대상으로 한 수량사구 이해 및 생산 과제를 실시하였으며 그 결과를 통해 교육 현황을 도출하였다.

수량 표현은 범언어적인 개념으로 어떤 언어에도 존재하는 매우 기본적인 범주이다. 한국어에서 수량 표현은 다양한 구조로 실현되는데 대체적으로 수사나 수관형사와 단위를 표시하는 분류사의 결합 형태로 나타난다. 또한 한국어는 수사와 분류사가 고유어 계, 한자어 계, 외래어 계로 구분되어 사용되는데 수사와 분류사의 어종에 따라 제약이 있으므로 이를 습득하여 사용하는 것이 한국어 학습자에게 쉬운 일이 아니다(문연정, 2024; 1). 한국어 분류사는 290 개 정도가 있는 것으로 확인되며 그 많은 분류사 중 일부가 일상생활에서 활발하게 사용되어 있다(이선영, 신혜원, 2013; 394). 학습자의 한국어 분류사 사용 능력을 조사한 이선영, 신혜원(2013)에서는 입력 빈도가 학습자의 수량사구 사용에 영향을 미침이 확인되었다. 즉 모어화자들의 사용빈도가 높은 분류사일수록 학습자들이 잘 사용한다는 뜻인데 한국에 거주하고 있지 않은 학습자의 경우 입력을 받을 빈도가 수업 시간이나 미디어 시청 시간 등에 제한되므로 더욱 수업 시간에 제공되는 교수 내용이 큰 역할을 할 것이다.

그간 한국어교육 분야에서 수량사구 혹은 분류사에 관한 연구는 다른 문법 범주에 비해 활발하게 이루어지지 않았다(문연정, 2024; 5). 연구 유형을 구분하면 분류사 범주화, 교재분석 및 교육용 분류사 선정, 교육 방안 제시, 오류 분석, 습득 연구로 나누어 볼 수 있는데 학습자를 대상으로 한 연구의 경우 중국어권 학습자에 치중되어 있으며, 아직까지 수의 크기에 주목하여 진행된 연구가 없다는 한계점이 있다. 본 연구에서 대상으로 삼은 일본인 학습자의 인식 및 사용을 관찰한 연구, 일본에서 출판된 교재를 조사한 연구는 부재한 실정이다. 이에 본 연구는 일본에서의 한국어 수량사구 교육 현황과 일본인 학습자의 수량사구 이해 및 사용 양상을 알아보고 시사점을 제시하고자 한다. 본 연구는 연구 문제를 다음과 같이 설정하였다.

연구 문제 1.

한국어 수량사구 교육 현황에 있어서 일본과 한국 현지 사이를 비교하였을 때 차이가 있는가?

연구 문제 2.

일본인 한국어 학습자의 수량사구 이해 및 인식은 수량사구 유형에 따라 차이가 있는가?

위의 연구 문제에 대해 모색하기 위해 교재 분석을 통해 교육 현황을 파악하였으며 수량사구 인식 및 사용 과제를 통해 학습자의 습득 양상을 알아보았다.

2. 한국어 수량사구의 특징

2.1. 한국어 수사 및 수관형사

2 장에서는 한국어 수량사구가 어떤 구조를 가지며 어떤 규칙 및 제약이 있는지에 대해 알아보고자 한다. 분류사를 다루는 데 있어서 독립적으로 사용되는 명사를 분류사에 포함시키는지에 대한 논의가 수렴되지 않은 부분이 있기는 하나 본 연구는 수사 및 수관형사 뒤에 결합되어 단위를 나타내는 명사를 모두 분류사에 포함시켜 연구를 진행하겠다.

수사는 ‘사람이나 사물, 장소, 사태 따위의 수량이나 순서를 나타내는 말’이며 사물의 수량을 지시하는 양수사와 대상의 순서를 헤아리는 서수라로 나뉜다(문연정, 2024; 22). 상술하였듯이 한국어 수사 (수관형사) 및 분류사는 어종에 따라 구분할 수 있는데 수사의 경우 한자어계와 고유어 계로 구분된다(양비, 2021; 33). 한국어 수사를 어종에 따라 제시하면 다음과 같다.

- (1) 한자어: 일, 이, 삼, 사, 오, 육, 칠 팔, 구, 십…, 이십…, 백, 천, 만…
고유어: 하나, 둘, 셋, 넷, 다섯, 여섯, 일곱, 여덟, 아홉, 열, 열한, 열둘, ……
스물, 서른, 마흔, 쉰, 예순, 일흔, 여든, 아흔
- (2) 한자어: 제일, 제이, 제삼, 제사, 제오…
고유어: 첫째, 둘째, 셋째, 넷째, 다섯째…, 열한째…, 스무째…
- (3) 한두, 두셋, 서너, 두서너, 일이, 이삼, 삼사…, 여러, 모든, 온, 온갖, 갖은, 전

(1)은 양수사를, (2)는 서수사를 한자어계와 고유어계로 나누어 제시한 것이다. 고유어계 수사와 한자어계 수사는 수의적으로 교차되어 사용할 수 있는 것이 아니라 셈의 대상이 되는 명사, 그리고 함께 쓰이는 분류사에 따라 결정된다. 또한 이십, 삼십, 사십, 오십, 육십, 칠십, 팔십, 구십에 대응되는 고유어계 수사 스물, 서른, 마흔, 쉰, 예순…이 있는데 한자어계 수사처럼 십까지 숫자의 조합으로 이루어지는 것이 아니므로 학습자들이 20에서 90까지의 고유어계 수사를 어휘학습처럼 외워야 한다. 그러하여 학습자들에게 한자어계 수사보다 고유어계 수사의 학습 및 사용이 더 부담이 크고 수의 크기가 스물 이상이 되면 더 사용이 어려울 것으로 예측된다. 또한 (3)은 부정수 수관형사인데 (3)을 통해 한국어가 부정수가 발달한 언어임을 알 수 있다.

한편 분류사의 경우 어종뿐만 아니라 의미 차질에 따라서도 분류할 수 있는데 의미 차질을 기준으로 한 범주화에 관해서는 본 연구에서 본격적으로 다루지 않고 어종, 즉 고유어, 한자어, 외래어의 세 가지로 분류하고자 한다. 본 연구는 숫자 뒤에 붙어서 수량이나 순서, 분량 따위를 나타내는 요소를 분류사로 보았는데 이는 단위성의존명사와 구분하기 위함이다. 단위성의존명사는 그 명칭으로부터 알 수 있듯이 독립적으로 쓰일 수 없는 의존적인 명사라는 전제가 있다. 그러하여 ‘한 사람’, ‘한 페이지’의 ‘사람’, ‘페이지’처럼 독립적으로 쓰이는 분류사는 단위성의존명사에서 배제하게 된다. 본고는 독립적으로 쓰이는 명사도 단위성의존명사와 같은 기능을 하는 경우 분류사에 포함시켰으며 수사 및 수관형사와 분류사가 결합하여 구를 구성한 것을 수량사구라고 부르기로 한다. 어종에 따라 한국어 수 분류사를 제시하면 다음과 같다.

<표 1> 어종을 기준을 한 분류사 구분

분류사 분류	예시
고유어 분류사	가지, 그릇, 끼, 마디, 마리, 별, 켈레, 포기, 바퀴, 살 등
한자어 분류사	개, 명, 대, 권, 평, 편, 장, 잔, 병, 대, 회, 개국, 갑, 충 등
외래어 분류사	미터, 킬로미터, 키로, 그램, 컵, 스푼, 페이지, 박스, 퍼센트 등

<표 1>에서 보는 바와 같이 한국어 수 분류사는 한자어계, 고유어계, 외래어계로 구분할 수 있으며 앞에서 제시한 것처럼 수사는 한자어계 수사와

고유어계 수사로 나눌 수 있는데 수사와 분류사가 결합하여 수량사구로 실현될 때 그 결합 양상에 정확한 규칙이 있는 것이 아니므로 교수하는 것이 쉽지 않다. 그래서 더 입력이 중요한 역할을 하는데 일정한 규칙으로 설명이 가능한 부분은 명시적인 교수가 효과적일 수 있고 규칙으로 설명이 어려운 부분에 대해서는 충분한 입력과 연습이 제공되어야 한다. 어떤 규칙이 작용되며 어떤 조합으로 실현되는지 유형으로 나누어서 알아보겠다. 한국어 수사(수관형사)와 수 분류사의 결합 패턴은 이론상으로 보면 ‘한자어 수관형사-한자어 수 분류사’, ‘한자어 수관형사-고유어 수 분류사’, ‘한자어 수관형사-외래어 수 분류사’, ‘고유어 수관형사-고유어 수 분류사’, ‘고유어 수관형사-한자어 수 분류사’, ‘고유어 수관형사-외래어 수 분류사’의 여섯 가지로 분류된 수 있다. 분류사를 독립적으로 쓰지 못하는 단위성 의존명사에 한정하는 경우 ‘한자어 수관형사-고유어 단위성의존명사’, ‘고유어 수관형사-외래어 단위성의존명사’의 결합이 허용되지 않는다. 분류사의 의존성을 따지지 않는다고 하더라도 ‘한자어 수관형사-고유어 분류사’의 조합은 매우 제한적으로 나타나며 ‘고유어 수관형사-외래어 분류사’의 조합도 ‘한자어 수관형사-외래어 분류사’ 조합에 비해 수가 적은 편이다.

<표 2> 수관형사와 분류사의 결합 유형

수관형사	분류사	결합 예시
고유어계 수관형사	고유어계 분류사	{한, 두, 세, 네, 다섯, 여섯, …스무, 서른, …} 마리, 마디, 그릇, 가지, 방울, 사람, 달, 분, 줄
	한자어계 분류사	{한, 두, 세, 네, 다섯, 여섯, …스무, 서른, …} 개, 평, 권, 대, 편, 잔, 명, 병, 장, 시간, 곡, 번
	외래어계 분류사	{한, 두, 세, 네, 다섯, 여섯, …스물, 서른, …} 다스, 페이지, 세트, 박스, 스푼, 컵, 캔, 팩
한자어계 수관형사	고유어계 분류사	{일, 이, 삼, 사, 오, 육, … 이십, 삼십, …} 원, 쪽
	한자어계 분류사	{일, 이, 삼, 사, 오, 육, … 이십, 삼십, …} 년, 분, 일, 개월, 도, 회, 등, 화, 변, 세,

		위, 교시
외래어계 분류사		{일, 이, 삼, 사, 오, 육, … 이십, 삼십, …} 미터, 킬로, 그램, 리터, 달러, 퍼센트, 센티미터

<표 2>를 보면 어종에 따른 수관형사와 분류사의 결합 유형의 예시를 확인할 수 있는데 각 수관형사-분류사 조합은 상보적 분포를 이루기 때문에 고유어계 수관형사가 쓰이는 조합에는 한자어계 수관형사가 쓰이지 못하고 반대도 마찬가지다. 또한 어떤 어종의 수관형사가 사용되는지에 따라 의미도 함께 달라지는 경우가 있다(문연정, 2024; 29). 즉 같은 형태를 가지는 분류사라도 나타내는 의미에 따라 결합되는 수관형사의 어종이 달라질 수 있다.

- (4) 가. 저는 일본에 {한, 두, *일, *이} 번 가 본적이 있어요.
 나. 시험 문제 {일, 이, *한, *두} 번에서 틀렸어.

예문 (4 가, 나) 모두 분류사로 ‘번’이 사용되었다. (4 가)는 횟수를 세는 표현이며 (4 나)는 차례나 순서를 나타내고 있음을 알 수 있는데 이때 (4 가)에서 한자어계 수관형사가 쓰이면 비문이 되고 반대로 (4 나)에서 고유어계 수관형사가 쓰이면 자연스럽지 못한 문장이 된다.

한편 원래 고유어 수관형사와만 결합하는 분류사들이 수가 커지면 한자어 수관형사와의 결합을 허용하는 경향이 있는데 보통 수가 20 이상일 때 원래 고유어 분류사가 사용되는 결합 구조임에도 한자어 수사가 선호되는 경향을 보인다(문연정, 2024; 23).

- (5) 가. 연필 {*일, *이, 천, 오십} 자루
 나. 소 {*일, *이, 천, 오십} 마리
 다. 학생 {*일, *이, 예순, 육십} 명

(5 가, 나, 다)를 보면 수가 작을 때는 고유어계 수관형사가 사용되지만 수가 크면 고유어계와 한자어계 모두 허용됨을 확인할 수 있다.

이상과 같이 고유어계 수관형사가 사용되는지 한자어계 수관형사가 사용되는지 분류사에 따라 결정되며 분류사가 나타내는 의미에 따라서도

달라지고 수의 크기도 수량사구 형성에 영향을 미침을 확인하였다.

2.2. 분류사 교재 분석

2.2 장에서는 수사 및 분류사가 한국어 교재에서 어떻게 제시되어 있는지 한국에서 출판된 교재와 일본에서 출판된 교재를 분석하여 비교해 보고자 한다. 한국에서 출판된 교재의 경우 한국 내 대학 소속 언어교육기관에서 출판된 초급 및 중급 교재를 살펴보았다. 한편 일본에서 출판된 한국어 교재의 경우 각 대학교에서 다양한 교재가 사용되어 있어 여러 대학교에서 공통적으로 사용되는 교재를 찾기 어렵다는 사정으로 초급 및 중급 학습자를 대상으로 제작된 교재를 문법 교재, 읽기쓰기 교재, 회화 교재, 통합 교재를 임의로 4 권 선정하여 분석하였다.

먼저 한국 소재 대학 언어교육원에서 출판된 교재에서 제시된 분류사를 정리하면 다음 <표 3>과 같다.

<표 3> 한국에서 출판된 교재에서 제시된 분류사 목록

등급/기관	경희대(2019-2020)	고려대(2008-2010)	서울대(2012, 2013, 2015)	연세대(2007, 2008, 2013)	이화여대(2010-2012)
초급	개, 권, 그릇, 마리, 명, 번, 별, 병, 분, 시, 시간, 원, 장, 주, 쪽 2, 층, 켤레, 호, 동, 등, 주일, 짐, 대, 도, 미터, 분(사람), 사이즈, 살, 센티미터, 송이, 월,	개, 권, 그릇, 달, 마리, 명, 분, 사람, 살, 시, 쌍, 잔, 가지, 켤레, 알, 회, 인분, 달려, 도, 등, 미터, 박, 병, 봉지, 분(사람), 선, 세, 센티미터, 원, 월,	월, 일, 잔, 충, 가지, 개월, 급, 년, 반, 살, 시간, 주, 주일, 쪽, 통, 인치, 사람, 달, 박, 앤, 리터, 판, 알,	가지, 개, 권, 근, 급, 년, 마리, 번(차례), 별, 병, 분, 시, 원, 월, 잔, 장, 주, 쪽, 켤레, 개월, 군데, 그릇, 다발, 봉지, 살, 그램, 자루, 폐이지, 번지, 달, 상자, 송이, 통, 박, 회,	가지, 개월, 권, 그램, 그릇, 년, 대, 도, 동, 마리, 미터, 박, 번, 별, 병, 살, 석, 세, 센티미터, 송이, 시, 시간, 원, 월, 인, 분, 인분, 일, 잔, 조각, 주일, 층, 켤레, 큰술, 킬로그램, 킬로미터,

	인분, 일, 잔, 초, 킬로그램, 킬로미터, 퍼센트, 호, 호선	인실, 주일, 주, 층, 킬로그램, 퍼센트, 해, 호	점, 초, 칸, 킬로그램, 킬로미터, 학년, 호선, 회, 개, 권, 그릇, 명, 별, 부, 분, 명, 시, 원	갑, 동, 호, 도, 세, 편, 초, 퍼센트, 킬로그램, 킬로미터, 판	학년, 호, 호선, 명, 세기, 장
중급	개월, 곡, 달, 대, 등, 박, 부작, 시간, 위, 인, 인분, 자루, 주, 주년, 학년, 고개, 군데, 냥, 대, 발, 석, 세, 잔, 쪽 1, 채, 통, 해, 행, 숟가락, 편	가지, 그램, 대, 밀리미터, 별, 순위, 줄, 컵, 퍼센트, 학기, 학번, 군데, 다발, 번, 병, 분, 시간, 층, 곳, 도, 마리, 장	가지, 골, 그램, 등, 밀리미터, 배, 번째, 별, 세기, 센티미터, 위, 인, 실, 장, 점, 주년, 즘, 집, 컵, 통, 퍼센트, 페이지, 학점, 걸음, 근, 놈, 대, 숟가락, 짐, 평, 회, 가락, 군데, 냥, 마디, 면, 바닥, 바퀴, 박, 방울, 세대, 쌍, 아름, 자루, 종류, 채, 판, 편, 호, 도, 리	가지, 과, 끼, 대, 리터, 센티미터, 주년, 칼로리, 편, 학기, 호, 회, 알, 방울, 발짝, 세기, 평, 곡, 차	급, 끼, 위, 정거장, 퍼센트, 학기, 칸, 통, 별, 뿌리

<표 3>을 보면 양적 측면, 내용적 측면 모두 기관별로 매우 다르게 제시되어 있음을 확인할 수 있다. 이는 아직 한국어 교육에서 분류사의 난이도 및 중요도

위계화를 위한 일정한 기준이 마련되어 있지 않음을 의미한다. 각 대학교 교재에서 공통적으로 확인할 수 있는 것은 중급보다 초급에서 더 많은 분류사가 제시되어 있다는 점이다. 초, 중, 고급 교재를 분석한 선행연구를 살펴보면 고급에 올라가면 제시되는 분류사의 종류가 더 줄어드는 것을 확인할 수 있다. 각 교제의 분류사 제시 목록을 자세히 살펴보면 사용 빈도가 매우 낮아 보이는 것이 초급에서 제시되어 있거나 반대로 일상 생활에서 접할 가능성이 높은 분류사가 제시되어 있지 않은 것을 볼 수 있다. 모든 교재에서 공통적으로 보이는 좋은 점은 사물이나 생명 따위의 개수를 나타내는 단위, 부피나 길이, 무게 등의 사용되는 단위 시간 단위 등 분류사를 의미 자질로 범주화하였을 때 다양한 범주의 분류사가 하나의 범주에 과도하게 치우치지 않게 제시되어 있다는 점, 분류사 및 수관형사의 어종이 고려되어 제시되어 있다는 점을 들 수 있다. 한국어 학습자들이 결합되는 분류사에 따라 한자어계인지 고유어계인지 수사(수관형사)의 사용이 달라짐에 대해 어려움을 겪는데 다양한 결합을 보여 주는 것이 학습자의 수량사구 사용에 도움이 될 것이다. 세 가지 이상의 교재에서 제시된 분류사 목록은 다음과 같다.

(6) 개, 권, 그릇, 마리, 명, 번, 별, 병, 분, 시, 시간, 원, 장, 주, 층, 캘레, 호, 동, 등, 주일, 대, 도, 미터, 분(사람), 살, 센티미터, 송이, 월, 인분, 일, 잔, 초, 킬로그램, 킬로미터, 퍼센트, 달, 박, 위, 인, 자루, 주년, 학년, 군데, 세, 통, 편, 가지, 알, 회, 봉지, 그램, 학기, 다발, 개월, 급, 년, 리터, 판, 세기, 근

정리하면 교육용 분류사 선정을 위한 일정한 기준이 마련되어야 하며 이를 위해 분류사의 등급화, 위계화가 이루어질 필요가 있다. 또한 수량사구에 대해 학습자가 많은 입력을 받고 수업에서 출력할 기회를 얻을 수 있도록 수관형사와 분류사의 어종, 범주도 고려되어야 한다.

다음으로 일본에서 출판된 책에 제시된 분류사 목록을 살펴보고자 한다.

<표 4> 일본에서 출판된 한국어 교재에 제시된 분류사

제목	はじめての 韓国語(기초- 초급, 회화)	本気で学ぶ 韓国語(초급- 중급 문법)	絵で学ぶ 中級韓国語 文法	できる韓国語 中級 I (문법, 통합)
	개, 명, 병, 장, 살, 년, 월, 일, 주일, 엔, 장, 시간, 호선, 인분, 시, 사람, 분, 알	월, 일, 년, 분, 엔, 원, 층, 학년, 원, 달리, 시, 시간, 명, 병, 개, 권, 마리, 장, 살, 주일, 번, 인분, 박, 장, 개월, 일째, 원어치, 편	시, 월, 층, 년, 달, 분, 시간, 살, 잔, 년생, 일, 개월, 번	년, 번, 주일, 월, 시, 시간, 분, 호선, 번(출구), 명, 년대, 대(代), 일, 개, 대(나이), 살, 층, 마리, 점, 세, 번째, 원, 손, 킬로그램, 학년, 채, 송이, 벌, 켤레, 편, 회, 곡, 상자, 쌍, 평

일본에서 출판된 교재에서 제시된 분류사 목록을 정리한 <표 4>를 보면 우선 한국에서 출판된 교재에 비해 양적으로 종류가 매우 적음을 알 수 있다. 교재의 분량 자체의 차이로 인한 것으로 생각할 수 있지만 교재의 페이지 수, 제시된 문법항목의 종류는 한국에서 출판된 교재와 유사하거나 더 많은 것도 있었다. 그러므로 교재 자체의 분량 차이가 이 결과에 반영되어 있다고 보기는 어려울 것이다. 내용적으로 자세히 살펴보면 모든 교재에서 공통적으로 시간과 관련된 단위 ‘일, 월, 년, 분, 시, 시간’ 등이 제시되어 있음이 확인되었으며 시간 관련 분류사가 교재에 매우 빈번히 나타났다. 시간 관련 분류사가 일상 생활에서 필수적으로 사용되는 것은 사실이나 한국어 분류사 가운데 사용빈도가 높은 분류사가 제시되어 있지 않아 선정 기준에 빈도가 고려되지 않았음이 보인다. 또한 전체적으로 한자어계 분류사에 치중되어 있으며 외래어 분류사가 한 교재를 제외하고 제시되어 있지 않다. 외래어계 분류사와 수관형사의 결합 유형도 빈번히 사용되며 학습자들이 접할 가능성이 높기 때문에 교수될 필요가 있어 보인다. 두 개 이상의 교재에서 등장한 분류사는 다음과 같다.

- (7) 개, 명, 병, 장, 살, 년, 월, 일, 주일, 엔, 시간, 호선, 인분, 시, 분, 원, 층,
학년, 마리, 번, 개월, 편, 달, 잔, 년생

일본에서 출판된 교재에서 발견된 특징은 수사를 다루는 파트가 별도로 있다는 점이다. 고유어계 수사와 한자어계 수사가 각각 하나의 파트로 다루어져 있으며 어떤 분류사가 어떤 수사와 결합하는지 한정적이나마 제시하는 교재도 있었다. 한국에서 출판된 교재의 경우 분류사가 어휘 항목에 제시되거나 대화문에 녹아 있는 경우가 대부분이었다. 반면 일본에서 출판된 교재의 경우 수사나 수량사구를 연습 시키는 파트가 있다는 점을 보았을 때 일본에서 수량사구 교육의 중요성이 어느 정도 인식되어 있는 것으로 보인다. 그러나 제시 목록이 한정적이며 사용 빈도나 어종이 고려되지 않은 감이 있으므로 사용 빈도나 학습자가 접할 상황을 고려하여 더 다양하게 교수될 필요가 있어 보인다.

이상 한국과 일본에서 출판된 한국어 교재를 분석하여 수량 표현이 어떻게 다루어지고 있는지 알아보았다. 한국에서 출판된 교재와 일본에서 출판된 교재를 비교하였을 때 양적, 내용적 측면 모두 한국에서 출판된 교재가 보다 다양하게 다루고 있음이 확인되었으며, 제시 방식에 있어서도 차이가 있었다. 아직 교육용 분류사 선정 기준이 마련되어 있지 않아 교재마다 제시 목록과 순서의 통일성이 없다는 점이 개선되어야 하며 일정한 기준이 일본에서 한국어 교재를 제작할 때에도 반영될 필요가 있다고 본다.

3. 연구방법

3 장에서는 연구 방법과 연구 절차에 대해 기술하고자 한다. 본 연구는 일본 소재 대학교에서 한국어를 학습하는 혹은 학습한 학습자와 한국 소재 언어교육원에서 한국어를 학습한 학습자 사이에 수량사구 이해 및 사용 능력의 차이가 있는지 관찰함으로써 수량사구 교육 현황을 밝히는 데에 목적을 두고 있다. 이에 학습자의 수량사구 이해 및 사용 능력을 측정하기 위한 실험을 실시하였다. 한국어 수량사구에 대한 지식이라고 할 때 여러 측면을 생각할 수 있는데 본 연구에서는 1. 셈의 대상인 명사와 분류사의 일치, 2. 어종에 따른 수사-분류사의 일치에 초점을 두고 살펴보았다. 1. 셈의 대상인 명사와 분류사의 일치는 학습자가 한국어 분류사를 얼마나 알고 있는지에 대한 어휘적인 지식으로 볼 수 있으며 2. 어종에 따른 수사-분류사의 일치는 수사와 분류사의 결합을 말하는 것으로 형태적 층위의 지식이라고 할 수 있다.

즉 본 연구는 실험을 통해서 일본인 학습자의 수량사구에 대한 어휘, 형태 충위의 지식 및 사용 양상을 측정하였으며 실험은 모두 실시간 온라인으로 진행되었다. 연구 절차는 2 장에서 살펴본 선행 연구를 바탕으로 한 문헌 연구-> 문헌 연구를 바탕으로 실험 문항 제작-> 실험 참여자 모집-> 모어화자를 대상으로 한 예비 실험-> 본 실험-> 결과 분석의 절차로 이루어졌다. 다음으로 실험 참여자와 실험 도구, 분석 방법에 대해 기술하겠다.

3.1. 실험 참여자

본 연구는 일본인 학습자 가운데 일본 소재 대학교에서 한국어를 학습하는 학습자와 한국 소재 언어교육원에서 학습하는 학습자를 대상으로 실험을 진행하고 그 결과를 피험자 집단과 분류사 및 수량사구 유형별에 따라 비교였다. 실험 참여자는 일본 소재 대학교에서 한국어 수업을 수강하고 있거나 수강한 일본인 학습자와 한국 소재 한국어 교육 기관에서 한국어를 배우고 있거나 배운 경험이 있는 일본인 학습자를 각각 5 명씩 두 집단으로 나누어 총 10 명을 대상으로 하였다. 실험 문항에 문제가 없는지를 확인하기 위해 한국어 모어화자를 대상으로 예비 실험을 진행하였으며 예비 실험의 결과를 본실험의 정오답 판단 기준으로 삼았다. 대상 학습자의 한국어 숙달도는 고급에 해당하는 TOPIK 5급 이상 소지자였으며 한국어 학습 기간, 성별, 나이는 따로 제약을 두지 않았다. 또한 특정 학습 기관의 교수 내용이나 방식이 수량사구 관련 실험 결과에 영향을 미칠 가능성을 고려하여 다양한 학교의 학생을 모집하도록 노력하였다. 실험 참여자는 모두 한국어 학습 기간이 3 년 이상인 일본인 학습자였으며 한국 소재 언어교육원에서 학습한 참여자 집단의 경우 1 년 이상의 거주 경험이 있는 것으로 조사되었다. 또한 일본 소재 대학교 학습자 집단은 5급 4 명 6급 1 명, 한국 언어교육원 학습자 집단은 5급 3 명 6급 2 명의 비율로 구성되었다.

3.2. 측정 도구

3.2.에서는 실험에서 활용한 측정 도구에 대해서 기술하겠다. 본고는 한국어 수량사구의 어휘, 형태적 측면에 대한 일본인 학습자의 이해 및 사용 양상을 관찰하는 것이 주목적이다. 따라서 실험도 어휘적 측면, 형태적 측면으로 나누어서 두 가지 과제를 실시하였다. 분류사에 대한 어휘적인 지식을 조사하기 위해 그림 보고 정답 고르기 과제를 제작하였으며, 분류사와 수사의 일치에 대한

지식 즉 형태적인 측면을 확인하기 위해 소리 내어 읽기 과제를 제작하여 진행하였다.

우선 학습자가 분류사를 얼마나 잘 아는지 확인하기 위해 실시한 그림 보고 정답 고르기 과제의 경우 해당 명사의 그림을 보고 정답을 포함한 다섯 가지 보기 가운데 정답을 선택하는 방식으로 구성하였다. 이 실험은 피험자가 어떤 분류사가 해당 명사의 수적 부류화에 적합한지 알고 있어야 정답을 고를 수 있는 과제였다. 실험 문항의 예시는 다음과 같다.

<그림 1> 그림 보고 정답 고르기 과제의 예시

1. 그림을 보고 그림을 설명하는 데에 가장 적절한 것을 보기에서 모두 고르십시오.



보기: ① 꽃 3 송이 ② 꽃 3 개
꽃 3 다발 ⑤ 꽃 3 쪽

<그림 1>에서 보는 바와 같이 어휘적인 지식을 확인하기 위한 그림 보고 정답 고르기 과제에서는 수사를 모두 아라비아 숫자로 표기하였고 수량사구 유형 중 가장 전형적이 ‘명사–수사–분류사’ 유형으로 구성하였다. 이는 수사와 분류사의 일치에 관한 두 번째 실험에 영향을 미치지 않기 위함이다. 이 과제에서 정답은 하나일 수 있고 두개 이상일 수도 있으며 그림 속 명사의 수를 세는 부담을 줄이기 위해 숫자는 1에서 5를 사용하였다. 문항 수는 총 10 개이며 한자어계 분류사 5 개, 고유어계 분류사 5 개로 1 대 1 의 비율로 구성하였다.

한편 수사와 분류사의 일치를 관찰하기 위한 실험으로 소리 내어 읽기 과제를 실시하였는데 이 과제는 한 쌍의 대화를 연구자와 피험자가 상황극처럼 소리를 내어 읽는 과제이다. 연구자가 A를 발화한 다음에 피험자가 B를 읽는 방식으로 진행하였는데 피험자가 읽는 B의 발화에는 수량사구가 포함되며 아라비아 숫자로 표시된 수관형사를 대상 명사와 분류사에 따라 한자어와

고유어를 구분하여 정확하게 읽을 수 있는지 관찰하였다. 대화는 초급에서 중급 수준의 어렵지 않은 어휘로 이루어진 짧은 문장으로 구성하였으며 종결어미는 학습자가 익숙한 반말체 혹은 '-아/어요'에 통일하여 사용하였다. 또한 소리내어 읽기 과제의 문항은 '수사-분류사'의 수량사구 유형으로 통일하였으며 수의 크기에 따라 부담감에 차이가 있는지 확인하기 위해 1에서 10 까지의 수사로 구성된 문항과 30에서 199 까지의 수사로 구성된 문항을 제작하였다. 소리내어 읽기 과제의 문항 예시는 다음과 같다.

<그림 2> 소리 내어 읽기 과제 문항 예시

- (1) 다음 A 와 B 의 대화를 보고 연구자가 A 를 읽으면 이어서 B 를 소리를 내어 읽어 주세요.

A: 승희야, 너 이사 간 집이 몇 평이야?

B: 9 평 정도야. 혼자 살기에는 충분해.

<그림 2>에서 보는 바와 같이 피험자가 읽게 되는 B 의 발화에는 '9 평'이라는 수량사구가 포함되어 있으며 이를 '아홉 평'이라고 읽어야 정답으로 판정된다. 문장 자체의 어려움으로 인한 차이가 생기지 않도록 문장 길이는 2-8 단어로 통일하였으며, A 의 발화가 끝난 후 시간을 두어 문장을 훑어봐도 되고 말하는 속도는 편하게 발화할 수 있는 속도로 말하라고 사전에 안내하였다. 문항 수는 '고유어계 수관형사-고유어계 분류사' 유형 3 문항, '고유어계 수관형사-한자어계 분류사' 유형 3 문항과 같이 6 가지 유형에 각 3 문항 씩으로 구성하였으나 '한자어계 수관형사-고유어계 분류사' 유형의 경우 '원, 쪽'의 두 가지만 존재하므로 실험 문항도 두 개만 제작하여 총 34 문항이었다. 실험이 끝난 후 피험자들에게 수량사구와 관련된 내용으로 사후 인터뷰를 실시하였으며 인터뷰에 대한 답변은 질적으로만 분석하였다. 실험 문항에 사용한 분류사는 한국에서 출판된 교재 중 3 가지 이상의 교재에서 제시된 분류사에 한정하였으며 이선영, 신혜원(2013)에서 제시한 고빈도 목록에서 초중급에 해당하는 분류사를 사용하였다. 실험 문항의 예시를 제시하면 다음과 같다.

<표 5> 소리 내어 읽기 과제 문항 예시

수관형사	분류사	문항 예시
고유어	고유어	A: 너 강이지 키운대고 했지? B: 응. 강이지 2 마리랑 고양이도 있어.
	한자어	A: 현주야, 네 가방 왜 이렇게 무거워? B: 안에 책이 4 권 들어가 있어서.
	외래어	A: 건강을 위해서 특별히 하는 거 있어요? B: 저는 매일 아침에 올리브 2 스푼 먹어요.
한자어	고유어	A: 새로 출판된 책에 문제 생겼어요? B: 네, 6 쪽에 오타가 있었대요..
	한자어	A: 너 피티 받는 얼마나 남았어? B: 나 10 회 끊어서 이제 4 회 남았어.
	외래어	A: 승희 씨는 물 많이 마셔요? B: 저 하루에 2 리터씩 마셔요.

수관형사	분류사	문항 예시
고유어	고유어	A: 할머니 연세가 어떻게 되셔? B: 올해 68살이셔.
	한자어	A: 1 학년 학생이 총 몇 명이야? B: 168 명이요.
	외래어	A: 설탕 500 그램의 양이 어느 정도인지 알아? B: 모르겠어… 50 스푼 정도 아니야?
한자어	고유어	A: 아까 계산한 거 얼마였어? B: 3980 원 나왔어.
	한자어	A: 그 드라마 몇 회까지 나왔어? B: 38 회 예고하는 거 봤어.
	외래어	A: 이 문제 정답율이 어떻게 돼요? B: 예상보다 높게 나와서 45 퍼센트였어요.

3.3. 분석 방법

본고에서는 실험 과제에 대한 피험자의 응답을 모두 점수화하여 양적으로 분석하였다. 그럼 보고 정답 고르기 과제, 소리 내어 읽기 과제의 두 가지 실험이 수행되었으며 모두 정답과 오답으로 결과를 나눌 수 있는 실험이었다. 그럼 보고 정답 고르기 과제의 경우 그림과 일치하는 분류사를 적절하게 선택하면 1 점, 해당 명사에는 쓰일 수 없는 분류사를 선택하면 0 점을 부여하였으며 정답이 2

개 이상인 경우 정답을 모두 고르면 1 점을 부여하고 하나라도 오답을 고르거나 정답을 고르지 않으면 0 점을 주었다.

한편 소리 내어 읽기 과제의 경우 1-10 까지의 수관형사를 활용한 문항은 정확하게 읽으면 1 점, 틀리면 0 점을 부여하였으며 30-199 까지의 수관형사를 활용한 문항은 고유어계 수관형사와 한자어계 수관형사 모두 사용 가능하여 정오를 판단하기 어렵기 때문에 양적으로 점수화하지 않고 어떤 경향을 보이는지 관찰하였다. 분석한 결과들은 문항 유형과 학습자 집단에 따라 구분하여 비교하였으며 결과를 통해 한국어 교육에 시사하는 점을 도출하였다.

4. 실험 결과

4 장은 실험 결과와 인터뷰 내용을 기술하고자 한다. 본고는 일본 소재 대학교에서 한국어를 학습한 일본인 학습자 집단과와 한국 소재 대학교 소속 언어교육원에서 한국어를 학습한 일본인 학습자 집단으로 나누어서 한국어 수량사구 이해 및 사용에 차이가 있는지 살펴보았다. 피험자들의 한국어 수량사구에 대한 이해 및 사용을 관찰하기 위해 2 가지의 실험을 실시하였으며 실험이 끝난 뒤에 수량사구에 관한 인식을 물어보는 인터뷰를 진행하였다. 각 실험의 결과를 집단 및 수량사구 유형에 따라 분석하여 제시하면 다음과 같다.

<표 6> 그림 보고 정답 고르기 과제의 실험 결과

집단	분류사 유형	평균 값
일본 대학교 학습자	고유어 분류사	1.2
	한자어 분류사	4
한국 언어교육원 학습자	고유어 분류사	2.2
	한자어 분류사	4.4

<표 6>은 셈의 대상이 되는 명사에 따라 분류사를 선택하는 그림 보고 정답 고르기 과제의 집단 및 분류사 유형별 결과이다. 이 과제는 학습자들이 한국어 분류사를 얼마나 잘 이해하고 있는지를 관찰하기 위한 과제로 어휘적인 지식을 측정하는 것이었으며 최고 값은 5 점이다. 실험결과를 보면 우선 두 집단 모두 한자어 분류사에 비해 고유어 분류사에 대한 지식이 확연히 부족한 것을 확인할 수 있다. 이는 일본인 학습자의 경우 모어인 일본어에서도 한자어를 사용하기

때문에 한자어 분류사를 보고 의미를 추정할 수 있기 때문인 것으로, 모어의 영향을 요인으로 생각할 수 있고, 더 하나는 교재의 효과로 볼 수 있다. 앞에서 제시한 한국어 교재 고빈도 분류사 목록을 보면 한국에서 출판된 교재와 일본에서 출판된 교재 모두 한자어 분류사의 비율이 더 높은 것을 알 수 있다. 어종이 교육용 분류사의 선정 기준의 하나로 적절한지에 대해서는 더 논의될 필요가 있지만 학습자가 고유어계 분류사를 어려워하는 실험 결과를 보았을 때 고유어계 분류사에 비중이 좀 더 할애될 필요가 있어 보인다. 한편 학습자 집단별로 보면 분류사의 어종에 상관없이 한국에서 학습한 학습자의 점수가 더 높게 나타났으며 점수 차이는 고유어계 분류사에서 더 크게 나타났다. 이와 같은 차이는 우선 한국 소재 대학 소속 언어교육원에서 한국어를 학습한 학습자의 경우 한국에 거주하면서 한국어를 공부하기 때문에 일본에서 학습하는 학습자에 비해 한국어에 접하는 기회가 훨씬 많아 입력의 빈도가 영향을 미친 것으로 예측할 수 있다. 또한 사후 인터뷰에서 숫자나 분류사에 대해 학습한 적이 있는지를 확인한 결과 일본에서 학습한 학습자는 별로 없다고 대답한 경우가 많았는데 반해 한국에서 학습한 학습자들은 언어교육원을 다니면서 학습한 적이 있다고 대답한 경우가 대부분이었다. 이를 통해 분류사 교육 현황에 있어 일본 소재 대학교와 한국 소재 언어교육원 간에 차이가 있으며 그 차이가 학습자의 분류사 이해도에 영향을 미치고 있음을 알 수 있다.

다음으로 학습자의 수량사구 사용, 즉 수관형사와 분류사의 일치에 대한 지식을 관찰하기 위한 소리 내어 읽기 과제의 실험 결과를 제시하면 <표 7>과 같다. ‘한자어계 수관형사-고유어계 분류사’은 최고 값이 2 점이며 나머지는 모두 3 점이 최고 값이다.

<표 7> 소리 내어 읽기 과제 결과

수량사구 유형	집단	평균 값
고유어계 수관형사- 고유어계 분류사	일본 대학교 학습자	2.4
	한국 언어교육원 학습자	2.6
고유어계 수관형사- 한자어계 분류사	일본 대학교 학습자	1.4
	한국 언어교육원 학습자	2.0
고유어계 수관형사- 외래어계 분류사	일본 대학교 학습자	0.8
	한국 언어교육원 학습자	1.6
한자어계 수관형사- 고유어계 분류사	일본 대학교 학습자	1.8
	한국 언어교육원 학습자	2.0

한자어계 수관형사- 한자어계 분류사	일본 대학교 학습자	1.8
	한국 언어교육원 학습자	2.2
한자어계 수관형사- 외래어계 분류사	일본 대학교 학습자	3.0
	한국 언어교육원 학습자	3.0

소리 내어 읽기 과제의 결과를 수량사구 유형별로 보면 두 집단 모두 ‘한자어계 수관형사-외래어계 분류사’ 유형에서 최고 값으로 가장 높은 점수를 보였다. 반면 두 집단 모두 ‘고유어계 수관형사-외래어계 분류사’ 유형에서 가장 낮은 점수를 보였는데 이를 통해 일본인 학습자들은 외래어계 분류사가 결합할 때 한자어계 수관형사를 선호함을 알 수 있다. 그러나 ‘스푼, 박스’ 등 독립성이 있는 외래어계 분류사가 사용될 때는 고유어계 수관형사와 결합하는 경향이 있으므로 이에 대한 교육이 필요해 보인다. 한편 집단별로 보면 전체적으로 한국 소재 대학 소속 언어교육원에서 학습한 학습자가 높은 점수를 보였으나 그 차이가 그림 보고 정답 고르기 과제에 비해 크지 않았다. 가장 크게 차이가 나타난 유형은 ‘고유어계 수관형사-외래어계 분류사’ 유형이었으며 그 다음이 ‘고유어계 수관형사-한자어계 분류사’ 유형이었다. 또한 30-199 의 숫자를 사용하여 구성된 문항의 경우 ‘30 바퀴’를 ‘서른 바퀴’로 발음한 2 명의 학습자를 제외하고 나머지 33 문항에서 10 명의 참여자 모두가 한자어 수관형사만 사용하였으며 나이를 나타내는 ’68 살’을 발음할 때 가장 시간이 오래 걸리고 어려워하는 모습을 보였다.

사후 인터뷰에서 분류사나 숫자에 대해 배워 본 적이 있느냐는 질문에 대해 일본 소재 대학교에서 학습한 학습자의 경우 ‘분류사나 수량사구에 대해 ‘개’나 ‘살’, 시간 단위 등의 기본적이며 초보적인 것을 제외하고 배운 적이 없다’고 대답하였으며, 한국에서 학습한 학습자의 경우 ‘수업에서 배웠지만 기억이 잘 안 나서 실험 과제가 어려웠다’고 대답하였다. 숫자를 말할 때 어려움을 겪은 적이 있느냐는 질문에 대해 일본에서 학습한 학습자의 경우 ‘단위를 나타내는 분류사가 너무 많아서 어렵다’는 대답이 많았다. 한편 한국에서 학습하고 한국에 거주 중인 학습자의 경우 ‘한자어 수관형사(일, 이, 삼, 사)와 고유어 수관형사(한, 두, 세, 네)를 구별하여 사용하는 것이 지금도 헷갈리고 고민할 때가 많다’는 대답이 많이 보였다. 또한 숫자의 크기가 부담감에 영향을 주는지에 대해 질문한 결과 대체로 마흔을 넘으면 부담감이 크다고 대답하였으며 특히 나이를 말할 때 숫자가 큰 고유어계 수사(수관형사)의 사용이 어렵다고 대답하였다. 실제로

소리 내어 읽기 과제에서 모든 학습자가 '68 살'을 '육십팔 살'로 발음하였다. 이상 두 가지 실험과 인터뷰 결과를 정리하면 대체로 보아 일본 소재 대학교에서 한국어를 학습한 학습자들은 분류사에 대한 학습이 한국 소재 언어교육원에서 학습한 학습자에 비해 부족하며 한국에서 학습한 학습자들도 고유어계 수관형사와 한자어계 수관형사를 분류사에 따라 구분하여 사용함에 있어 어려움을 느끼고 있음을 확인할 수 있었다. 또한 분류사 및 수량사구의 유형에 따라서도 격차를 보여 수량사구를 교육할 때 어종도 고려하여 다양한 유형의 수량사구에 대한 입력과 연습이 필요함을 알 수 있었다. 본 연구는 숫자의 크기에도 주목하였는데 일본인 학습자들은 30 이상의 숫자를 읽을 때 결합하는 분류사에 상관없이 한자어계 수사를 사용하는 경향을 보였으며 큰 숫자를 말하는 데에 부담감을 느낀다는 것이 확인되었다.

5. 나가며

본 연구는 한국어 수량사구의 교육현황에 대해 일본과 한국 간의 비교를 중심으로 알아보았다. 교재 분석과 일본인 학습자를 대상으로 한 실험을 통해 도출된 시사점은 다음 네 가지로 요약할 수 있다. 첫째, 일본에서도 다양한 범주, 어종의 분류사를 교수할 필요가 있으며 교육용 분류사 선정에 일정한 기준이 마련되어야 한다. 둘째, 분류사를 어휘 학습처럼 제시할 뿐만 아니라 수관형사와 어떻게 결합을 이루는지에 대한 교수도 이루어져야 한다. 셋째, 학습자가 큰 숫자에도 익숙해지도록 숫자의 크기를 고려한 충분한 연습이 필요하다. 넷째, 한국어 교육 현황에 있어 일본과 한국 현지 사이에 다소 차이가 있으며 학습자의 토픽 등급은 유사함에도 불구하고 한국 유학 경험의 여부에 따라 한국어 이해도 및 사용 능력에 차이가 있다. 일본에서 한국어를 공부하는 학생들도 한국에서 공부하는 학생에 못지않게 한국어 의사소통 능력을 키워 줄 수 있도록 한국 현지화의 차이를 파악하는 작업도 필요해 보인다. 본 연구는 실험 참여자의 수가 적어 결과를 일반화하기는 어려우나 그동안 주목을 받지 않았던 수량사구에 주목하여 교재, 학습자의 이해도 및 사용을 분석하였다는 점, 일본과 한국에서의 한국어교육 현황 차이에 주목하였다는 점에 의의가 있다고 본다.

<참고문헌>

- 문연정 (2024) 「영어권과 중국어권 한국어 학습자의 수량사구 습득 연구」
이화여자대학교 박사학위 청구 논문.
- 양비 (2021) 「중국인 한국어 학습자의 단위성 의존명사 사용 및 오류 양상 연구」
연세대학교 석사학위 청구 논문.
- 윤희수 · 이선웅(2018) 「한국어 교육을 위한 수량사구 연구 한국어 교육을 위한
수량사구 연구」 『한민족문화연구』 62, 한민족문화학회, pp. 139-172.
- 이선영 · 신혜원 (2013). 「한국어 학습자의 수 분류사 습득과 입력빈도의
영향」 『새국어교육』 0.95, 한국국어교육학회, pp. 391-422.
- 정은실 (2010) 「한국어 학습자를 위한 분류사 선정에 관한
연구」 『한국어문화교육』 4.1, 한국어문화교육학회, pp. 219-241.
- 최민아 (2023) 「한국어 중고급 학습자의 한국어 수 분류사 인지 처리 양상」
경희대학교 석사학위 청구 논문.
- 최정도 (2017) 「한국어 수량 표현의 계량적 연구」 연세대학교 박사학위 청구
논문.

교재

- 李志嘸 · 金貞姬 (2014) 『できる韓国語 中級 I <改正版>』 DEKIRU 出版
- 金京子 · 河村光雅 (2015) 『絵で学ぶ中級韓国語文法』 白水社
- チョ · ヒチョル (2017) 『本気で学ぶ韓国語』 ベレ出版
- ちょん · ひょんしる (2016) 『基礎からレッスン はじめての韓国語』 株式会
社ナツメ社
- 경희한국어 교재편찬위원회 (2019). 경희 한국어 초급 1: 문법. 경희대학교
출판문화원.
- 경희한국어 교재편찬위원회 (2019). 경희 한국어 초급 2: 문법. 경희대학교
출판문화원.
- 경희한국어 교재편찬위원회 (2020). 경희 한국어 중급 1: 문법. 경희대학교

출판문화원.

경희한국어 교재편찬위원회 (2020). 경희 한국어 중급 2: 문법. 경희대학교
출판문화원.

고려대학교 한국어문화교육센터 (2008). 재미있는 한국어 1. 교보문고.

고려대학교 한국어문화교육센터 (2009). 재미있는 한국어 2. 교보문고.

고려대학교 한국어문화교육센터 (2010). 재미있는 한국어 3. 교보문고.

고려대학교 한국어문화교육센터 (2010). 재미있는 한국어 4. 교보문고.

서울대학교 언어교육원 (2013). 서울대 한국어 1A(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2013). 서울대 한국어 1B(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2013). 서울대 한국어 2A(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2013). 서울대 한국어 2B(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2015). 서울대 한국어 3A(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2015). 서울대 한국어 3B(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2015). 서울대 한국어 4A(Student's Book). 투판즈.

서울대학교 언어교육원 (2015). 서울대 한국어 4B(Student's Book). 투판즈.

연세대학교 한국어학당 (2007). 연세한국어 1-1. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2007). 연세한국어 1-2. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2007). 연세한국어 2-1. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2007). 연세한국어 2-2. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2008). 연세한국어 3-1. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2008). 연세한국어 3-2. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2008). 연세한국어 4-1. 연세대학교 대학출판문화원.

연세대학교 한국어학당 (2008). 연세한국어 4-2. 연세대학교 대학출판문화원.

이화여자대학교 언어교육원 (2010). 이화 한국어 1-1. Epress.

이화여자대학교 언어교육원 (2010). 이화 한국어 1-2. Epress.

이화여자대학교 언어교육원 (2010). 이화 한국어 2-2. Epress.

이화여자대학교 언어교육원 (2011). 이화 한국어 2-1. Epress.

이화여자대학교 언어교육원 (2011). 이화 한국어 3-1. Epress.

이화여자대학교 언어교육원 (2011). 이화 한국어 3-2. Epress.

이화여자대학교 언어교육원 (2011). 이화 한국어 4. Epress.

『밤을 걸고』에 나타난 난민적 주체의 공간과 윤리 연구

方閨濟 (関西学院大学)

<요지>

본 발표는 양석일의 장편소설 『밤을 걸고』를 통해 재일조선인의 삶을 ‘민족적 디아스포라’의 틀을 넘어 ‘난민적 주체’로 재조명한다. 작품은 1950년대 오사카의 아파치 부락과 오무라 수용소를 배경으로, 생존·망각·침묵이 교차하는 경계적 공간을 제시한다. 기존 연구가 정체성의 혼종성에 집중했다면, 본 연구는 조르조 아감벤의 ‘호모 사케르’ 개념을 빌려 재일조선인을 법과 제도의 바깥에서 윤리적 응답을 실천하는 존재로 해석한다. 특히 침묵을 언어의 부재가 아닌 타자에 대한 윤리적 책임의 표현으로 규정하고, 이를 공간·존재·행위·윤리라는 체계적 분석 틀 속에서 고찰한다. 그 결과, 난민적 주체는 단순한 피해자의 이미지가 아니라 배제의 경계를 넘어 새로운 연대의 가능성을 여는 윤리적 주체로 재개념화된다.

키워드 양석일, 『밤을 걸고』, 난민적 주체, 호모사케르, 침묵의 윤리

1. 들어가며

양석일의 장편소설 『밤을 걸고』¹는 1950년대 일본 오사카의 ‘아파치 부락’과 ‘오무라 수용소’를 배경으로, 재일조선인의 생존과 망각, 회상과 침묵이 교차하는 복합적 서사를 제시한다. 이 작품은 민족적 디아스포라의 문학적 재현을 넘어, 제도적 경계에 포획되지 않는 삶의 윤리와 정치, 즉 ‘존재의 조건’에 대한 질문을 던진다. 본 논문은 『밤을 걸고』에 나타난 공간과 인물, 그리고 침묵의 서사를 통해, 재일조선인을 단순한 ‘디아스포라의 주체’가 아니라

¹ 양석일, 『밤을 걸고』 1, 2, 김성기 옮김, 태동출판사, 2001. 이하 작품 인용시 본문에 권과 페이지 수만 표시.

조르조 아감벤(Giorgio Agamben)이 말한 ‘호모 사케르’의 윤리적 존재, 즉 ‘난민적 주체’로 사유하고자 하는 데 그 목적이 있다.

기존의 연구들은 재일조선인을 주로 민족적 디아스포라의 맥락에서 조망하며, 그 정체성의 혼종성과 경계성을 분석하는 데 초점을 맞춰왔다. 그러나 이러한 접근은 종종 이들의 삶을 고정된 범주에 가두거나, 정체성이라는 프레임을 통해서만 이해하려는 경향을 보인다. 이에 반해 본 논문은, 재일조선인을 정체성의 틀로 규정하기보다, 그들이 처한 배제의 조건 속에서 어떻게 타자의 고통에 윤리적으로 응답하는지를 탐색하고자 한다. 이때 침묵은 단순한 말의 부재가 아니라, 언어의 한계 속에서 수행되는 비언어적 응답의 방식이며, 그 실천은 윤리적 책임의 표현이다.

이를 위해 본 연구는 공간-존재-행위-윤리로 이어지는 체계적 분석을 수행한다. 이러한 접근은 ‘난민적 주체’를 단순한 피해자의 이미지에서 벗어나, 실천성과 응답 능력을 갖춘 존재로 재개념화하는 데 핵심적인 역할을 한다. 여기서 ‘난민적 주체’는 단순히 국적 없는 불법체류자나 제도적 배제의 피해자가 아니라, 공동체의 법과 정치 바깥에서 존재를 유지하며 침묵·기다림·환대 등을 통해 타자에게 응답하는 주체를 의미한다. 이 개념은 아감벤의 ‘호모 사케르’를 기반으로 하되, 공동체 경계 위에서 윤리적 실천을 통해 존재를 증명하는 능동적 주체로 재개념화한다.

『밤을 걸고』는 이러한 ‘난민적 주체’들의 삶을 ‘예외 상태’라는 정치적 조건 아래에서 그려내며, 제도적 언어로는 완전히 포섭되지 않는 침묵의 형식을 통해 존재의 윤리를 드러낸다. 이러한 맥락에서 이 소설을 ‘난민적 주체’의 문학적 형상화로 읽는 시도는 기존의 민족문학 중심 해석에서 벗어나, 문학이 존재와 윤리, 권력과 배제의 문제를 사유하는 철학적 공간이 될 수 있음을 보여준다. 기존의 선행연구들은 대체로 『밤을 걸고』를 재일조선인의 정체성과 집단기억의 형성, 또는 민족문학 내부의 계보화 속에서 분석해왔다. 김계자는 이 소설을 “재일코리언의 역사적 기억과 당사자성의 문학적 환기”로 읽으며², 서사의 순환적 구조 속에서 민족적 주체의 기억 복원을 강조하였다. 박정이는 신문 기사와 소설의 서사적 차이를 통해 ‘아파치 부락’의 재현 전략을 분석하면서도³, 그것이 가지는 공간적 윤리의 문제까지는 다루지 못했다. 신서영은 『밤을 걸고』를 ‘식민주의의 잔여 공간’에서 벌어지는 저항의 서사로 읽으면서도⁴, 여전히 공간을 민족 담론의 장치로 활용하는 경향이 강하다.

² 김계자, 「재일코리언 문학의 당사자성-양석일의 『밤을 걸고』 -」, 『일본학』 41, 2015.

³ 박정이, 「양석일 『밤을 걸고』의 세 공간의 의미」, 『일어일문학연구』, 71, 2009.

⁴ 신서영, 「양석일의 『밤을 걸고』 분석 연구- 전후 일본사회에 대한 자기비판과 식민주의 -」, 『Culture and Convergence』, 43(10), 2021.

이처럼 선행연구들은 『밤을 걸고』를 민족적 정체성, 집단기억, 탈식민의식의 연장선상에서 해석함으로써, 공간과 인물의 ‘존재론적 조건’이 제기하는 정치적·윤리적 함의를 충분히 조망하지 못하는 한계를 보인다. 한편, 서동주는 『밤을 걸고』가 보여주는 인물들의 “전후-밖-존재”의 윤리를 통해 작품 속 배경이 되는 공간을 단순한 배경이 아닌 존재의 실천이 이루어지는 장소로 보았으며⁵, 오윤호는 ‘경계 공간의 디아스포라 수행성’이라는 개념을 통해 아파치 부락과 같은 장소가 재일조선인의 비가시적 생존 양식을 드러내는 수행적 장으로 기능한다고 분석하였다⁶. 이들은 공간의 윤리성과 주체의 실천을 연결하고자 했다는 점에서 본 논문과 방향을 공유하지만, 여전히 디아스포라의 담론을 넘어선 ‘존재론적 난민’ 개념의 본격적인 적용에는 이르지 못하고 있다.

이에 본 연구는 『밤을 걸고』에서 등장하는 아파치 부락과 오무라 수용소를 ‘예외 상태의 공간’이자 ‘비가시적 생존의 장소’로 재해석하고, 그 안에서 수행되는 침묵과 기다림, 중언 등의 윤리적 실천을 통해 문학이 ‘존재를 증명하는 윤리의 형식’으로 작동함을 밝히고자 한다. 이를 위해 르페브르, 드 세르토, 아감벤, 카비르, 레비나스의 핵심 개념들을 상호보완적으로 결합하여, 공간-존재-행위-윤리라는 통합적 분석 틀을 구성한다. 이 이론들은 각기 다른 충위를 다루지만, 『밤을 걸고』가 보여주는 공간성과 존재론, 침묵의 실천과 타자성의 윤리를 유기적으로 연결하는 사유 구조로 작동한다.

본 논문은 총 4 장으로 구성된다. 제 2 장에서는 이 이론적 틀을 구성하는 각 이론의 핵심 개념을 정리하고, 이를 통합적으로 연결하는 이론적 구성을 제시한다. 제 3 장에서는 『밤을 걸고』의 주요 서사 공간인 아파치 부락과 오무라 수용소에서 수행되는 주체의 윤리적 행위들을 분석한다. 제 4 장에서는 앞선 논의를 종합하여, 이 작품이 그려내는 ‘윤리적 중언’의 문학적 형식과 그 의의를 규명하고, 이를 통해 재일조선인 문학의 새로운 해석 가능성을 제안한다.

2. 이론적 틀: 공간, 존재, 행위, 윤리의 연쇄 구조

2.1 공간은 생산된다: 르페브르와 드 세르토

앙리 르페브르는 『공간의 생산』에서 공간을 “자연적·물리적 배경”이 아닌 “사회적 생산물”로 규정했다. 그는 “(물리적) 자연공간은 점차 멀어지는 대신,

⁵ 서동주, 「‘전후-밖-존재’의 장소는 어디인가? – 양석일의 <밤을 걸고>를 중심으로-」 『한국학연구』, 43(43), 2016.

⁶ 오윤호, 「제국의 경계 공간과 전후 재일 조선인의 디아스포라 정체성 연구 – 양석일의 『밤을 걸고』를 중심으로」, 『日語日文學研究』 102, 2011.

각각의 사회(각각의 생산양식)는—자기 고유의 공간을 생산한다”고 주장하며, 이러한 사회적으로 생산된 공간은 “사고에서는 물론 행위에서도 도구 구실을 하는 동시에 생산의 수단이며, 통제의 수단, 따라서 지배와 권력의 수단”이 된다고 설명한다. 앙리 르페브르는 『공간의 생산』에서 공간을 ‘공간적 실천(spatial practice)’, ‘공간 재현(representations of space)’, ‘재현 공간(representational space)’의 세 가지 층위로 구분한다⁸.

이 개념은 문학 텍스트를 분석할 때 다음과 같은 방식으로 적용될 수 있다. ‘공간의 실천’은 일상 속에서 공간이 경험되고 사용되는 삶의 반복적 실천을 뜻하며, ‘표상된 공간’은 국가나 권력이 기획하고 기호화한 공간으로서 질서와 통제를 목적으로 한다. 마지막으로 ‘재현 공간’은 감정, 기억, 서사적 의미가 투영된 내면화된 공간으로, 인물의 정체성과 존재 방식에 깊게 연관된다.

재일조선인에게 공간은 특별한 의미를 갖는다. 아파치 부락은 일본 국가가 조선인을 격리하고 통제하기 위해 기획한 지배적 공간이다. 동시에 이곳은 조선인들이 일상적 삶을 영위하며 공동체적 유대를 형성하는 생활 공간이기도 하다. 그러나 가장 중요한 것은 이 공간이 거주자들에 의해 새로운 의미로 전유되는 저항적 공간으로 변화한다는 점이다.

미셸 드 세르토의 ‘전술(tactics)’개념은 이러한 공간의 전유 과정을 구체화한다. 드 세르토는 ‘전략(Strategy)’과 전술의 개념을 대조의 개념으로 설명하는데, 권력자가 자율적으로 공간과 규칙을 설정할 수 있는 체계적 행위가 전략이라면, 전술은 권력 없는 주체가 권력의 공간(전략) 안에서 순간적인 기회를 포착해 사용하는 창의적 생존 기술이다. 드 세르토는 “전술을 약자의 기예”라고 정의한다⁹. 또한 그는 “권력이 일상을 지배하는 상황에서도 행위자는 권력의 의도와 일치하지 않는 전술에 따라 일상생활에서 고유한 실천을 수행한다”고 설명한다¹⁰. 이는 “권력 기술의 단순한 적용 대상으로서의 행위자 대신에 권력의 실행 구조에서 벗어날 수 있는 행위자의 가능성, 곧 권력의 이해로부터 누락되는, 따라서 권력에 대항할 수 있는 세력의 존재 가능성¹¹”을 보여준다. 즉, ‘전술’은 권력자들 만들어 낸 전술의 틈새를 파고 들어 생존을 이어가는 약자들의 임기응변적 삶의 태도이자 실천이라 할 수 있다. 이러한 전술적 실천은 권력의 완전한 지배를 불가능하게 만드는 틈새와 균열을

⁷ 앙리 르페브르, 『공간의 생산』, 양영란 옮김, 에코리브르, 2019, pp.76-77
참조.

⁸ 앙리 르페브르, 위의 책, pp. 86-88

⁹ 미셸 드 세르토, 『일상의 발명』, 신지은 옮김, 문학동네, 2025, p.113

¹⁰ 양재혁, 「하이브리드 시대 미셸 드 세르토(Michel de Certeau)의 역사서술 다시 읽기(또는 다시 쓰기)」, 『HOMO MIGRANS』 24, 2021, p.204

¹¹ 양재혁, 위의 논문. 같은 쪽.

만들어낸다.

『밤을 걸고』에서 아파치 부락과 같은 공간은 국가가 기획한 ‘표상된 공간’이자, 동시에 그 안에서 인물들이 이러한 전술적 실천을 통해 새로운 의미를 부여하며 살아가는 ‘재현 공간’으로 기능한다. 국가가 의도한 통제된 공간 안에서도 그들만의 생존 전략, 경제적 네트워크, 공동체적 결속을 구축해낸다. 이는 단순한 저항이 아니라 주어진 조건 속에서 삶의 가능성을 창조해내는 창조적 전유의 과정이다.

이러한 공간적 실천은 재일조선인의 존재 양태를 규정하는 출발점이 된다. 그들은 배제된 공간 안에서 새로운 존재 방식을 모색해야 하며, 이는 이후 논의할 존재론적 조건과 윤리적 실천의 기반을 형성한다. 공간의 사회적 생산과 전술적 전유라는 이중적 과정은 난민적 주체의 복합적 존재 양태를 이해하는 핵심 열쇠가 된다.

공간은 사회적으로 생산될 뿐 아니라, 그러한 공간은 하위 주체에 의해 전술적으로 전유된다. 본 논문은 이 이중적 과정을 분석하기 위한 해석 틀로서, ‘전술적 공간’과 ‘전술적 실천’이라는 두 개념을 상호보완적으로 설정한다. ‘전술적 공간’은 국가 권력에 의해 기획된 통제의 장소가 하위 주체의 창조적 실천을 통해 의미 전환을 겪는 장소이며, ‘전술적 실천’은 그 공간 안에서 수행되는 생존과 윤리의 행위로서, 존재를 증명하는 행위성을 내포한다¹². 이러한 개념 구조는 아파치 부락과 오무라 수용소를 분석하는 이론적 기반이 되며, 해당 장소에서 이루어지는 침묵, 기다림, 중언 등의 실천은 문학이 재현하는 존재의 윤리적 형식을 드러낸다. 나아가 본 논문은 이러한 분석을 통해, 재일조선인을 피해의 언어에만 포섭된 수동적 타자가 아니라, 배제의 조건 속에서 실천을 통해 윤리를 구성해 나가는 능동적 주체로 재정립하고자 한다.

2. 2 예외 상태의 존재론: 아감벤의 호모 사케르

조르조 아감벤은 『호모 사케르』와 『예외 상태』를 통해 현대 정치의 가장 어두운 역설을 폭로한다. 법이 작동을 중지하는 순간 주권의 힘이 가장 노골적으로 드러나는 ‘예외 상태’야말로 현대 정치의 숨겨진 본질이라는 것이다. 그는 고대 로마법의 ‘호모 사케르’를 “죽일 수 있지만 희생될 수는 없는 자”로 정의하며, 이 고대의 법적 형상이 현대에 되살아나 모든 인간을 잠재적으로 ‘벌거벗은 생명(bare life)’상태로 만들 수 있는 주권 권력의 메커니즘을

¹² 여기서 ‘전술적 공간’과 ‘전술적 실천’은 동일한 개념이 아니다. 전자는 권력에 의해 기획된 ‘표상된 공간’이 하위 주체의 실천을 통해 재구성되는 장소를 의미하며, 후자는 그 공간 내에서 하위 주체가 수행하는 생존 전략, 공동체 조직, 침묵과 기다림 등 일상의 윤리적 실천을 가리킨다. 이 두 개념은 각각 구조(공간)와 수행(행위)의 층위에서 기능하며, 서로를 전제하지만 서로 환원되지 않는다.

드러낸다.

여기서 핵심은 호모 사케르가 단순히 법 밖으로 추방된 존재가 아니라는 점이다. 호모 사케르는 배제를 통해 더욱 강력하게 법 안으로 포섭되는 존재이다. 법이 그를 포기함으로써 법은 오히려 그에 대한 절대적 권력을 행사하게 된다. 이는 근대 국민국가가 시민을 보호한다는 명목으로 실제로는 모든 시민을 잠재적 호모 사케르로 만들 수 있는 구조적 폭력을 보여준다.

그러나 아감벤의 호모 사케르 개념은 현대 정치의 배제 메커니즘을 날카롭게 포착하면서도 동시에 몇 가지 이론적 한계를 내포한다. 첫째, 그의 분석은 서구 중심적 관점에 머물러 있어 탈식민적 맥락에서의 예외 상태를 충분히 설명하지 못한다. 재일조선인의 경우, 단순히 국민국가의 예외 상태로 환원될 수 없는 식민주의적 잔재와 냉전 구조의 복합적 작용이 존재한다. 일본의 식민 지배, 미군정, 한국전쟁이라는 중첩된 역사 속에서 형성된 이들의 조건은 서구적 주권 개념으로는 포착되지 않는 복수의 권리가 경합하는 장이다.

둘째, 아감벤은 호모 사케르를 극단적으로 수동적인 존재로 그리는 경향이 있다. 그러나 실제 재일조선인들은 다양한 형태의 저항과 연대를 통해 주체성을 구축해왔다. 이는 벌거벗은 생명이 단순히 권리에 의해 생산되는 것이 아니라, 끊임없이 그 조건을 협상하고 전복하려는 능동적 주체임을 시사한다.

이러한 비판적 관점은 다른 이론가들과의 대화를 통해 더욱 확장된다. 발터 벤야민은 『역사의 개념에 대하여』에서 “억압받는 자들의 전통은 우리가 그 속에서 살고 있는 ‘비상사태(Ausnahmezustand, 예외상태)’가 상례임을 가르쳐 준다”고 말하며, 예외 상태가 일시적 특수 상황이 아니라 억압 구조의 상시적 규칙임을 지적하였다. 이는 재일조선인의 삶이 단순히 예외의 경계에 놓인 것이 아니라, 그러한 상태 자체가 일상화된 존재 조건임을 암시한다.

또한 주디스 버틀러는 『위태로운 삶』의 서문에서 “누가 인간으로 인정받는가? 누구의 삶이 삶으로 간주되는가? 무엇이 애도할 만한 삶이 되게 해주는가?”라는 질문을 제기하며, 사회적 인식과 권리 관계 속에서 특정한 삶만이 ‘애도 가능한 삶(grievable life)’으로 승인된다는 점을 밝힌다. 버틀러의 통찰은 재일조선인이라는 존재가 국적, 민족, 시민권의 경계 바깥에 머무르며, 그 생명이 제도적으로 인정되지 않고, 죽음마저도 공적 기억이나 애도의 대상이 되지 않는 현실에 대한 윤리적 사유를 더욱 확장한다.

신원경(2019)은 아감벤의 이론을 바탕으로, 난민이 법적 소속과 정치적 권리로부터 배제된 채 ‘벌거벗은 생명’으로 존재하는 생명정치의 핵심 사례임을 분석하였다. 난민은 더 이상 일시적 보호의 대상이 아니라, 국민국가 체제가 생산해내는 구조적 산물이다. 그들의 존재는 국민국가의 포용력을 증명하는 것이 아니라, 오히려 그 체제의 배제적 본질을 적나라하게 드러낸다.

재일조선인의 ‘호모 사케르’적 조건은 서구의 그것과 구별되는 특수성을 지닌다. 첫째, 이들의 예외 상태는 식민지배의 유산과 분단체제라는 이중의

역사적 조건 속에서 형성되었다. 둘째, 법적 지위의 불안정성은 단순한 시민권의 부재가 아니라 ‘조선적’이라는 독특한 법적 범주를 통해 구현된다. 이는 국적과 민족, 시민권이 일치하지 않는 포스트식민 상황의 복잡성을 보여준다. 따라서 재일조선인의 경험은 아감벤의 이론을 단순히 적용하는 것이 아니라, 그것을 탈식민적 관점에서 재구성할 것을 요구한다. 이들의 ‘벌거벗은 생명’은 서구적 주권 권력의 산물일 뿐 아니라, 동아시아 냉전 체제와 식민주의의 연속성 속에서 생산된 특수한 형태의 생명정치적 주체성이다.

본 논문에서 제안하는 ‘난민적 주체’는 아감벤의 ‘호모 사케르’ 개념을 토대로 하되, 그것을 탈식민적 맥락에서 변형한 개념이다. 이 주체는 식민지 통치 체제 하에서 국민국가의 경계 바깥으로 추방된 ‘식민적 호모 사케르(*colonial homo sacer*)’의 조건을 품고 있으며, 동시에 침묵과 기다림, 그리고 환대라는 윤리적 실천을 수행함으로써 존재를 증명하는 능동적 행위자로 형상화된다. ‘식민적 호모 사케르’가 제도적 배제와 예외 상태에 놓인 존재의 존재론적 조건을 설명한다면, ‘난민적 주체’는 그러한 조건 속에서도 침묵, 기다림, 환대와 같은 윤리적 실천을 수행하며 문학 안에서 형상화되는 주체를 지칭한다. 따라서 ‘난민적 주체’는 정치적 박탈 상태를 넘어, 타자에 대한 윤리적 응답의 가능성을 지닌 실천적 존재로 재일조선인을 새롭게 사유하려는 개념적 시도이다.

『밤을 걸고』의 오무라 수용소는 이러한 ‘예외 상태’를 공간적으로 실현한 대표적 사례다. 이곳에서 법은 효력을 정지하지만 사라지지 않으며, 주권은 법적 형식 없이도 생명에 대한 절대적 통제를 행사한다. 수용소는 예외적 공간이 아니라 현대 정치 공간의 은밀한 원형이며, 모든 정치적 공간이 언제든 수용소로 전환될 수 있는 잠재성을 내포한다.

재일조선인의 존재론적 조건은 이러한 아감벤의 분석들과 직접적으로 연결된다. 『밤을 걸고』의 오무라 수용소와 같은 공간은 바로 이러한 ‘예외 상태’의 구현체이며, 그 안에 수용된 인물들은 전형적인 ‘호모 사케르’의 조건에 놓인다. 국적이 없어 어느 국가에도 속하지 못한 채 무기한 억류된 이들은 법적 권리에서 배제된 ‘벌거벗은 생명’의 상태를 경험한다.

이처럼 예외 상태에서 발생한 침묵은 억압의 징후이자, 제도 바깥에 존재하는 생명이 권리 질서에 가할 수 있는 가장 급진적인 교란으로 기능한다. 말할 수 없음 자체가 발화의 질서를 잠식하며, 주어진 해석과 정치적 재현의 틀을 거부하는 윤리적 가능성으로 전화될 때, 침묵은 단지 결핍이나 부재가 아니라 타자성과의 관계를 열어주는 실천의 형식으로 재구성된다. 이는 침묵이 선택 불가능한 조건 속에서도 능동적 응답의 기제로 전환될 수 있음을 보여주는 지점이며, 이러한 침묵은 존재의 차원에서 작동하는 ‘윤리적 전술’¹³로서, 권력

¹³ 여기서 ‘윤리적 실천’ 이란 타자의 고통에 대한 비폭력적 응답이며, 침묵과 기다림

질서에 대한 급진적 교란을 수행한다. 다음 절에서는 이들의 이론을 바탕으로, 침묵을 단순한 억압이 아닌 타자에 대한 윤리적 응답이자 존재의 실천으로 사유해보고자 한다.

2.3 말해지지 않는 타자와 윤리적 응답: 카비르와 페비나스

앞 장에서는 ‘예외 상태’에서의 침묵을 권력에 의해 강제된 억압적 결과로 분석하였다. 그러나 이 절에서는 그 침묵이 억압의 산물일 뿐 아니라, 때로는 윤리적이고 전략적인 실천으로 전환될 수 있음을 고찰한다. 특히, 카비르는, ‘말해지지 않는 존재’와의 관계에서 침묵이 단순한 무력함이 아닌, 생존의 전략이자 타자에 대한 윤리적 응답으로 기능할 수 있음을 보여준다.

나일라 카비르는 여성의 역량 강화(empowerment)를 “선택할 능력이 부정되어 온 이들이 그러한 능력을 획득하는 과정”으로 정의하며, 이 ‘선택’이 진정으로 의미를 가지려면 “다르게 선택할 수 있는 대안이 존재해야 한다”고 강조한다. 카비르는 역량 강화가 단순히 개인의 선택 능력 증진을 넘어, “권력 관계에 도전하는 방식”으로 선택을 행사하는 것을 포함한다고 보았다¹⁴. 이러한 관점에서, 침묵은 단지 발화의 부재가 아니라, 맥락에 따라 능동적 선택이자 저항의 기제가 될 수 있다. 그녀의 분석은 목소리를 내는 것만이 주체성의 표지라는 통념에 도전하며, 침묵의 전략적 의미를 조명한다.

이러한 카비르의 통찰은 제인 파파트(Jane L. Parpart)의 논의를 통해 보다 구체적인 사회적 맥락을 얻게 된다. 파파트는 공개적으로 목소리를 내는 것이 치명적인 결과를 초래할 수 있는 위험한 상황에서 침묵과 비밀이 ‘생존을 위한 필수적인 전략’이 될 수 있음을 강조한다¹⁵. 더 나아가 그녀는 침묵이 권력과 저항, 목소리의 가능성이 끊임없이 협상되는 ‘정치적 장’으로 기능할 수 있음을 보여주며¹⁶, 카비르의 개인적 차원의 논의를 집단적 실천의 영역으로 확장시킨다. 즉, 침묵은 개별적 생존 전략일 뿐만 아니라, 억압적 공간 안에서 침묵하는 주체들 간의 ‘비가시적 연대’를 형성하고 기존 권력 구조에 균열을 만드는 ‘집단적 실천’이 될 수 있는 것이다.

이라는 방식으로 이루어지는 관계적 행위성을 지칭한다.

¹⁴ Naila Kabeer, “Gender equality and women’s empowerment: a critical analysis of the third Millennium Development Goal,” *Gender and Development*, 13(1), 2005, pp. 13–14

¹⁵ Jane L. Parpart, “Choosing Silence: Rethinking Voice, Agency, and Women’s Empowerment”, Working Paper# 297, Michigan State University, 2010, pp.3–4

¹⁶ Ibid., p.8

이러한 논의는 침묵을 타자에 대한 윤리적 응답으로 해석하는 레비나스의 사유와도 맞닿아 있다. 억압적 상황에서 침묵을 선택하는 주체는 홀로 존재하지 않으며, 그의 침묵은 필연적으로 고통받는 타자들—말할 수 없는 자들, 들을 수 없는 자들—과의 관계 속에서 의미를 갖는다. 이로써 침묵은 생존을 위한 개인적 전략에서 타자에 대한 윤리적 응답으로 질적 전환을 겪게 되며, 단순한 자기 보호를 넘어 말할 수 없는 타자의 고통을 함께 ‘감내하는 방식’으로 나아간다. 레비나스에게 윤리는 추상적 사유 체계로부터 출발하지 않는다. 오히려 그것은 나의 지각이나 이해의 범주로 환원되지 않는 타자의 ‘타자성’이 얼굴을 통해 드러나는 사건에서 비롯된다¹⁷. 레비나스에 따르면, 타자의 얼굴은 권력이나 위압이 아닌 “무방비하고 벌거벗은 연약함”으로 우리 앞에 다가온다. 타인의 궁핍과 비참함이 담긴 이 얼굴은 나에게 “너는 살해할 수 없을 것이다”라고 명령하며, 모든 계산과 목적론에 앞서는 무조건적이고 비대칭적인 책임을 지게 한다¹⁸.

이러한 맥락에서 ‘환대’는 침묵의 윤리적 실천으로 기능한다. 환대란 타자를 나의 질서와 동일성의 체계에 포섭하는 것이 아니라, 그의 고유한 타자성을 침해하지 않고 수용하는 역설적 행위이다. 레비나스는 『전체성과 무한』 서두에서 “이 책은 주체성을 타인을 맞아들이는 것으로서, 즉 환대(hospitalité)로서 제시할 것이다. 환대로서의 주체성 속에서 무한의 관념은 완수된다”고 서술하며, 환대가 타자의 타자성을 그대로 보존하는 행위임을 강조한다¹⁹.

침묵은 바로 이러한 환대의 윤리적 형식이 된다. 타자의 고통 앞에서 성급한 위로나 해석, 해결을 제시하기보다 나의 해석 틀이나 의지를 강요하지 않은 채 그 고통과 ‘함께 머무르는 것’—이것이 침묵의 윤리적 차원이다. 이는 타자의 고통을 대상화하거나 소비하지 않으려는 절제의 윤리이자, 타자의 존재 자체를 인정하고 존중하는 가장 근원적인 응답이다.

레비나스는 ‘책임의 무한’이란, 그것을 다하면 다할수록 더욱 깊어지는 역설적 구조를 지닌다고 강조한다²⁰. 이러한 윤리적 역설은 침묵이 단순한 수동적 태도나 개인의 행위로 머물지 않고, 타자의 무한한 요구에 대한 비가시적이며 비종결적인 응답으로 끊임없이 재생산되고 개신된다는 것을 뜻한다. 결국 침묵의 윤리는 결코 완결될 수 없는 윤리적 책임의 실천이며, 그 안에는 무한한 응답 가능성을 내포하는 것이다.

카비르는 위험한 상황에서 선택된 침묵이 주체의 전략적 행위일 수 있음을

¹⁷ 에마뉘엘 레비나스, 『전체성과 무한: 외재성에 대한 에세이』, 김도형 외
옮김, 그린비, 2018, p.291

¹⁸ 에마뉘엘 레비나스, 위의 책, p.293

¹⁹ 에마뉘엘 레비나스, 위의 책, p.16

²⁰ 에마뉘엘 레비나스, 위의 책, p.371

강조하고, 레비나스는 타자의 얼굴 앞에서 발생하는 비대칭적 책임을 통해 언어 이전의 윤리적 응답 가능성을 제시한다. 이 두 이론은 침묵을 단순한 언어의 결핍이 아닌, 타자의 고통에 머무르며 책임지는 윤리적 실천으로 재의미화한다. 이러한 관점은 『밤을 걸고』가 보여주는 침묵의 장면들을 단순한 억압의 산물이 아니라, 말해지지 않는 타자에 대한 윤리적 응답의 방식으로 해석할 수 있게 해준다. 나아가 이 작품은 민족적 정체성의 담론을 넘어서, 공간·존재·행위·윤리가 교차하는 지점에서 형성되는 윤리적 주체성의 문학적 형상화로 이해될 수 있다.

2.4 이론적 틀의 상호작용 및 연구 의의

본 연구는 『밤을 걸고』 속 난민적 주체의 존재 양태를 다층적으로 조망하기 위해 “공간 → 존재 → 행위 → 윤리”로 이어지는 연쇄적 구조를 분석틀로 삼았다. 이 연쇄 구조는 단순히 이론들을 병렬적으로 배열하는 것이 아니라, 각 개념이 선행 개념의 이론적 함의를 심화·확장하거나 새로운 차원으로 전환함으로써, 난민적 주체의 존재론과 윤리적 실천을 단계적으로 드러내는 유기적 구조로 작동한다.

첫째, 르페브르와 드 세르토의 공간 이론은 재일조선인이 거주하는 공간이 단순히 수동적 배경이 아니라, 권력의 통제와 이에 대한 ‘전술적 실천’이 교차하는 역동적 장임을 밝히는 출발점이 된다. 둘째, 이러한 공간적 조건은 곧 주체의 존재론적 조건을 형성하는 토대가 되며, 이는 아감벤의 ‘예외 상태’와 ‘호모 사케르’ 개념으로 이어진다. 본 논문에서 제안한 ‘난민적 주체’는 바로 이 지점에서 ‘호모 사케르’를 포괄하고 확장하는 개념으로 작동한다. 셋째, 주권 권력에 의해 법 밖으로 밀려난 존재가 강요받는 침묵은 카비르의 ‘전략적 침묵’ 개념을 통해 능동적 행위성을 획득하는 과정으로 이해된다. 넷째, 이러한 침묵의 층위는 공간과 존재, 행위의 조건 속에서 발생하는 윤리적 실천의 최종 단계로 나아간다. 카비르의 ‘전략적 침묵’은 침묵이 단지 강요된 침묵이 아니라, 권력에 대한 능동적 전술일 수 있음을 보여주며, 레비나스의 ‘타자 윤리’는 그러한 침묵이 언어 이전에 이루어지는 응답과 책임의 행위임을 시사한다. 즉, 침묵은 행위의 부재가 아니라, 말해지지 않음을 통해 타자에게 응답하려는 윤리적 실천의 방식으로 자리매김된다.

이처럼 본 연구의 분석 틀은 공간의 생산에서 시작해 존재의 조건, 행위의 실천, 윤리의 응답으로 이어지는 구조적 사유의 흐름을 구성한다. 이러한 연쇄 구조는 『밤을 걸고』의 분석 전반을 관통하는 이론적 기반이자 해석의 지도로 기능하며, 각 장의 논의를 통해 점차 그 이론적 함의가 구체화될 것이다. 본 연구는 이 분석을 통해 문학이 ‘존재를 증명하는 윤리의 형식’으로 어떻게 기능하는지를 드러내고자 한다.

3. 『밤을 걸고』에 나타난 공간과 난민적 주체의 윤리적 형상화

3.1 아파치 부락: 국가의 전략을 교란하는 전술적 생존 공간

『밤을 걸고』의 주요 배경 중 하나인 아파치 부락은 1990년대 일본 오사카의 니시나리구 아이린 지구 인근에 실재했던 공간으로, 전후 조병창 폐허 위에 형성된 재일조선인의 비공식 거주지였다. 이곳은 일본 정부의 행정적 시야에서 벗어난 ‘치외법권’적 장소로, 언론과 국가 권력에 의해 ‘범죄지대’, ‘불법 고철 집단’ 등으로 낙인찍힌 대표적인 ‘표상된 공간’이었다. 소설은 오사카 병기제조창 터가 “대낮에도 스스한 느낌이 들” 정도로 황폐하게 방치되어 “세상의 끝임을 고하는 듯한 황량한 풍경”(1권, 13쪽)을 이루었다고 묘사한다. 또한, “무허가 건물인 부락의 판잣집들은 구청으로부터 퇴거명령을 받은 상태로, 가로등의 설치가 허가되지 않기 때문에 밤이 되면 부락 자체가 어두운 암흑세계로 변한다”(1권, 20쪽)고 서술되어, 이곳이 국가의 통제와 행정 체계에서 벗어난 ‘예외 공간’임을 명확히 보여준다.

르페브르의 공간 삼분론에 따르면, 표상된 공간은 지배 권력에 의해 계획되고 통제된 공간이지만, 『밤을 걸고』는 이러한 공간이 지닌 외부의 부정적 표상에도 불구하고, 하위 주체의 실천을 통해 새로운 의미를 부여하는 ‘재현 공간’으로 전환되는 과정을 섬세하게 포착한다.

이러한 특수한 환경 속에서 아파치 부락의 재일조선인들은 필사적인 생존을 위한 ‘전술’을 펼친다. 소설은 “폐허에 들어가 숯덩이를 훔치던 무렵의 아파치족은 굽주린 늑대처럼 이빨을 드러내며 무슨 일이든 닥치는 대로 덤벼들었”(2권, 51쪽)다고 묘사하며, 이들의 생존 행위가 단순한 노동을 넘어선 절박한 ‘존재론적 투쟁’임을 보여준다. 이러한 전술은 드 세르토(Michel de Certeau)가 제시한 ‘전술’ 개념, 즉 제도화된 질서에 저항하면서 일상 속에서 수행되는 창의적 실천으로 이해할 수 있으며, 때로는 육체적 고통을 수반하기도 한다. 예컨대 노파가 “고철을 캐다가 손가락이 끊어졌는데도 이를 만에 다시 나왔다”(1권, 22쪽)고 언급되듯, 이들은 극심한 고통 속에서도 끈질기게 생존을 이어간다. 이는 드 세르토(Michel de Certeau)가 제시한 ‘전술’ 개념과 맞닿아 있으며, 단순히 기민하고 영리한 전략일 뿐만 아니라 고통과 희생을 감내하는 절박한 생존임을 부각한다.

부락민들은 국가의 통제를 우회하고 교란하기 위해 밤의 어둠과 단속의 허점을 전략적으로 활용한다. “밤에 조용히 움직이면 못 본 척 눈감아줄 수도 있”고 “밤에는 단속하기도 힘들 테니까”(1권, 44쪽)라는 인식은, 이들이 외부 권력의 시선을 피하면서도 공동체 생존을 위한 구체적 실천을 지속해왔음을

보여준다. 그 결과, “쇳덩이의 가격은 1 판당 10 엔씩 쳐서 전부 15,600 엔으로, 1 인당 2,600 엔씩 배당이 돌아갔다”(1 권, 36 쪽)는 구체적인 수익이 제시되어, 이러한 전술적 생존이 단순한 생존을 넘어 경제적 효과를 수반했음을 보여준다.

이러한 ‘전술적 생존’은 비공식적 공동체 내에서의 강력한 연대를 통해 ‘윤리적 실천’으로 확장된다. 국가의 법적 보호와 공식적인 소통 체계가 부재한 상황에서, 부락민들은 ‘조직’을 편성하고 ‘반’을 나누는 등 자율적인 공동체 질서를 구축하며 협력한다 (1 권, 98 쪽). 이들의 집합적인 힘은 외부의 위협에 맞서는 과정에서 극명하게 드러난다. 경찰관들이 단속을 위해 부락으로 들어서자, “경찰관들은 사방에서 갑자기 우르르 몰려든 이삼백 명의 부락민들에게 겹겹이 둘러싸여 한 발자국도 움직일 수 없었다. 굽주린 늄대들에게 둘러싸인 듯 신변의 위험을 느낀 경찰관들은 부랴부랴 철수해버렸다”(1 권, 99 쪽)는 장면은, 아파치 부락이 국가 권력의 직접적인 통제를 벗어나 스스로 독자적인 생존 양식을 구축하고, 그 안에서 상호 보호와 연대라는 윤리적 관계를 형성했음을 입증한다.

이처럼 ‘함께 살아남는’ 과정 자체는 타자를 배제하지 않는 연대와 환대의 윤리적 함의를 지닌다. 이는 실용적 협력을 넘어선 윤리적 태도의 기반이 된다. 공동체 내부의 생존 전략은 단순한 실용적 협력을 넘어, 타자의 고통과 존재를 수용하려는 윤리적 태도로 확장된다. 배제된 존재들이 서로를 포섭하며, 생존 그 자체를 통해 수행하는 이러한 윤리적 응답은, 국가가 지우려 했던 ‘벌거벗은 생명’의 존엄성을 비가시적으로 지켜내는 실천이 된다.

아파치 부락은 도시계획상 폐기된 장소이자, 언론에 의해 부정적으로 표상되는 공간이지만, 그 속에서 난민적 주체들은 고통과 희생을 감내하며 생존을 이어가고, 이를 통해 윤리를 실천하는 장소로 전환시킨다. 이러한 공간적 전유는 국가의 전략에 포섭되지 않는 방식으로 작동하며, 정치적 권리로 환원되지 않는 생명들의 ‘증언’으로 해석될 수 있다. 그들은 발화하지 않지만, 생존 그 자체로 과거의 폭력과 현재의 배제를 고발한다. 또한 국가적 서사에 포섭되지 않는 방식으로 자신들의 존재를 드러내며, 나아가 미래를 향해 존재의 조건을 묻는 윤리적 기호로 기능한다.

결국 아파치 부락은 전후 일본 사회의 억압적 도시 질서 속에서, 배제된 존재들이 몸으로 새겨나간 공간적 응답의 장이자, 생존이 곧 윤리가 되는 ‘전술적 공간’으로 기능한다. 이러한 공간적 실천은 다음 장에서 살펴볼 오무라 수용소의 ‘예외 공간성’과 어떻게 상보적 윤리 구조를 이루는지를 대비적으로 보여준다.

3.2 오무라 수용소: 예외 상태의 공간과 침묵의 윤리

『밤을 걸고』 제 2 권의 주요 배경인 오무라 수용소는 1950 년대

나가사키현에 실제 존재했던 외국인 수용시설이다. 이곳은 재일조선인 가운데 국적 미확정자, 특히 남한과 북한 어느 국가로부터도 정치적 승인이나 귀국을 보장받지 못한 이들을 억류하기 위해 설치되었다. 일본 법무성 출입국관리국은 이 수용소를 “배를 기다리게 하는, 즉 집단으로 대기 수용시키는 곳”으로 규정했으나 (2권, 109쪽), 실제로는 밀입국자뿐만 아니라 “수많은 형벌법령 위반자가 수용되고, 형기와는 상관없이 장기로 구속하고 있”는 ‘모순적인 공간’이었다. 이러한 이중 구속은 “분명 인간의 존엄성을 짓밟는 행위”로 지적된다 (2권, 110쪽).

“오무라 수용소는 해방 이후 냉전 분단 체제에서 한국과 일본 양국이 국민국가를 공고히 하는 과정에서 국민과 비국민을 분류하고 재배치하는 과정을 정당화하는 공간”²¹으로 기능했다. 특히, 오무라 수용소는 식민 지배의 경험을 바탕으로 식민지 백성에게 책임 전가를 가능하게 하는 ‘혜게모니 장치’이자, 법적 질서 밖에 존재하는 ‘영구적인 예외 공간’으로 설정되었다. 수용소는 한때 자국민이었던 조선인을 ‘이질화된 존재’로 규정하고, 국가를 배반한 국민을 통제하고 관리하는 과정에서 발생한 ‘잉여 공간’이자 ‘안전장치’ 역할을 수행했다²². 오무라 수용소는 앞서 논의한 아감벤의 ‘예외 상태’가 구현된 전형적인 공간이다.

김의부는 재판에서 집행유예를 언도받고 석방되는 줄로만 생각했지만, “재판이 끝나자마자 난데없는 밀입국자가 되어 입국관리소 직원에게 구속되었고, 곧바로 열차에 실려 오무라 수용소로 이송되었다”. 그는 이러한 “심리에서 판결까지 순식간에 이루어진 일이며 느닷없이 오무라 수용소로 강제 수용된 일 등이 모두 비정상적이었다”고 느끼며, “자신이 아무도 모르게 매장되는 게 아닌가 싶은 두려움에 사로잡혔다” (2권, 111쪽)고 절감하는 등, 법의 언어로부터 배제된 ‘말할 수 없는 자’이자 동시에 ‘말해지지 않는 존재’가 된다. 이는 아감벤이 말한 ‘법에 속하지만 법의 보호를 받지 못하는 존재’이자, 생명 그 자체가 정치화된 ‘호모 사케르’의 존재 조건을 극명하게 드러낸다.

김의부의 상황은 단순한 무국적 상태를 넘어선다. 샌프란시스코 조약 발효 후 일본이 재일조선인을 “외국인으로 명확히 규정”(2권, 109쪽)하면서, ‘조선적’이라는 지위는 남한이나 북한 어느 쪽에도 속하지 않은 법적 공백 상태, 즉 무국적의 위치를 의미하게 되었다. 김의부는 남한으로 귀국할 경우 ‘사상범’으로 낙인찍혀 사형이나 종신형을 받을 위험에 처했기에 사실상 안전한 귀환이 불가능했으며 (2권, 112쪽), 북한 또한 ‘궁핍을 호소하는’ (2권, 205쪽)

²¹ 이정은, 「‘난민’ 아닌 ‘난민수용소’, 오무라 수용소」, 『사회와 역사』 103, 2014, p.323

²² 이정은, 「예외상태의 규범화된 공간, 오무라 수용소」, 『사회와 역사』 106, 2015, 78쪽 참조.

편지나 ‘귀국하지 말라’는 암시를 통해 (2 권, 205 쪽) 그에게 온전한 삶을 보장하는 대안이 되지 못했다. 이는 아감벤이 분석한 서구의 무국적자와는 다른 특수성을 지닌다. 김의부는 ‘조선’이라는 민족적 배경 때문에 수용되지만, 정작 그 민족성에 기반한 어떠한 국가적 보호도 받지 못한다. 오히려 ‘조선인’이라는 이유로 일본에서는 외국인으로, 남북한에서는 위험한 사상범으로 분류되어 삼중의 배제를 경험한다. 이는 식민지배가 남긴 법적 공백과 냉전 분단이 만든 정치적 불가능성이 교차하는 지점에서 발생하는 ‘식민적 호모 사케르’의 조건이다.

오무라 수용소에 도착한 김의부는 “경비과 취조실에 끌려가서야 겨우 수갑을 풀”게 된다. 이후 그는 “신분증 확인과 예방주사에 이어 수용소에서 지켜야 할 규칙을 전해 들은 뒤, 전신 구석구석에 DDT(살충제)가 뿌려졌다”. 이러한 비인간적인 처우는 그를 철저히 관리 대상으로 전락시킨다. 또한 “만기 석방일에 대해서는 일언반구도 없”었고, “언제 석방되고 언제 강제 소환되는 것인지 수용자들은 전혀 알 수가 없다” (2 권, 111 쪽).

김의부가 처한 ‘조선적’ 지위의 모호성은 그를 더욱 취약한 상태로 만든다. 어느 국가에도 속하지 않으면서도 ‘조선인’이라는 민족적 정체성으로 인해 끊임없이 의심받고 감시당한다. 경비계장은 김의부를 ‘사상범’으로 단정하고 그가 저지르지 않은 난바 사건, 이쿠노 폭파 사건, 아마가사키 파출소 습격 사건 등을 나열하며 “아주 악질이구만”이라고 몰아붙인다. 김의부가 “저는 그런 사건과 전혀 무관합니다”라고 단호히 부인함에도 불구하고, 경비계장은 “틀림없이 네가 한 짓이야” (2 권, 112 면)라고 단정하며 그를 잠재적 범죄자로 낙인찍는다. 이러한 ‘조선인=잠재적 위험분자’라는 등식은 식민적 시선의 연장선에 있다.

나일라 카비르(Naila Kabeer)가 제시한 ‘침묵의 윤리’ 개념은 김의부의 이러한 실존적 상황을 이해하는 데 중요한 통찰을 제공한다. 카비르는 침묵이 단순히 억압의 결과만을 의미하는 것이 아니며, 어떤 상황에서는 ‘저항이자 윤리적 응답’의 한 방식일 수 있다고 보았다. 김의부는 수용소에서 “뇌가 조금씩 썩어 들어가는 듯한 감각”에 시달리며 (2 권, 115 쪽) 강제로 사고를 중지당하고 육체적 굴종을 강요받는다. 그는 젊은 경비원에게 지속적으로 괴롭힘을 당하고 폭행당하며 “만신창이가 된” (2 권, 152 쪽) 상태로 돌아오기도 한다. 이처럼 시스템에 의해 강요된 침묵과 육체적 고통은 단순한 무기력이 아니라, 발화 불가능성이라는 극한 상황 속에서 시스템의 폭력성에 저항하며 존재를 역설적으로 증언하는 ‘비가시적 윤리의 실천’이다. 법적 언어에 포섭되지 않는 그의 침묵은 시스템의 비인간성을 드러내고, 나아가 시스템이 마땅히 져야 할 책임을 역설적으로 드러내는 지점이 된다.

종합하자면, 오무라 수용소는 단지 국가가 관리하는 시설이 아니라, 르페브르의 관점에서 주권의 전략이 작동하는 '표상된 공간'인 동시에, 김의부의

침묵과 같은 ‘비가시적 실천’이 축적되며 시스템의 폭력성을 고발하는 ‘재현 공간’으로 전화되는 ‘예외 상태’의 장소다. 김의부는 정치적 공동체로부터 철저히 배제된 존재이지만, 그의 침묵은 말하지 못함으로써 시스템의 실패와 책임 부재를 묻는 윤리적 기호로 기능한다.

3.3 하쓰코의 기다림: 침묵과 연대의 윤리적 실천

3.2 절에서 오무라 수용소를 아감벤적 의미의 ‘예외 상태’ 공간으로 규정하고, 그 안에서 김의부가 ‘호모 사케르’라는 벌거벗은 생명으로 전락하며 시스템에 의해 강제된 침묵을 경험하는 정치-존재론적 조건을 분석했다. 김의부의 강제된 침묵이 시스템의 폭력성을 고발하는 존재론적 증언이라면, 이에 대한 윤리적 응답은 하쓰코의 행위를 통해 구현된다. 이러한 예외 상태 속에서 하쓰코 개인이 어떻게 능동적인 ‘행위성(agency)’을 발휘하고, 침묵을 포함한 다양한 방식으로 ‘윤리적 응답’을 수행하는지에 초점을 맞춰 분석한다. 특히 나일라 카비르의 ‘전략적 침묵’과 에마뉘엘 레비나스의 ‘타자 윤리’를 중심으로, 하쓰코의 지속적인 기다림과 적극적인 연대 행위가 어떤 윤리적 의미를 지니는지 고찰할 것이다.

여기서 하쓰코의 행위성은 단순한 보편 윤리의 실천으로 환원되지 않는다. 그녀는 ‘클럽 호스티스 출신 재일조선인 여성’이라는 다층적 주변성 속에서, 사회적 낙인과 제도적 배제를 동시에 겪는 주체이다. 이러한 교차된 배제는 그녀의 윤리적 응답이 김의부와는 다른 방식으로 구성되게 하며, 그것은 제도적 언어로 포착되지 않는 ‘비언어적 환대’의 형식으로 드러난다. 이때 하쓰코의 침묵과 기다림, 연대의 실천은 가야트리 스피박(Gayatri Spivak)이 제기한 “서발턴은 말할 수 있는가”라는 문제의식을 활기시킨다. 스피박이 지적했듯, 서발턴은 스스로 말하지 않는 존재가 아니라, 기존의 권력 담론과 언어 체계가 그 발화를 인지하거나 수용하지 않는 구조 속에 놓여 있다. 하쓰코의 ‘비언어적 행위성’은 바로 이러한 구조를 드러내는 방식으로 작동하며, 문학 속에서 서발턴의 윤리적 응답 가능성을 형상화하는 사례가 된다.

이러한 비언어적 실천의 첫 번째 예가 바로 끈질긴 ‘기다림’이다. 소설은 하쓰코가 김의부와 “처음 면회한 이후로 거의 2년 만에(2권, 191쪽)” 만났다고 서술하며, 그녀의 끈질긴 기다림의 시간을 강조한다. 이 오랜 시간 동안 그녀는 수용소에 억류된 김의부를 만나기 위해 열 달 넘게 “매주 한 번씩 꼬박꼬박 면회하러 갔”음에도 구체적 이유는 알려주지 않은 채 면회가 불가능하다며 “번번히 접수창구에서 거절당했”다(2권, 166쪽). 이러한 면회 거절의 이유는 김의부가 “요주의 인물”로 감시당하고 남쪽 조직의 수용동에 들어가 폭행을 당한 ‘비공식적인 상황’ 때문이었다. 제도와 법의 언어가 통하지 않는 이 상황 속에서 클럽 호스티스 출신으로 일본 사회 내 이중의 경계에 놓인 재일조선인

여성 하쓰코는, 오직 ‘기다림’과 ‘몸’의 실천을 통해 윤리를 수행한다. 그녀는 “모든 걸 버리고 한 사내를 찾아온 것에 대해 후회는 하지 않았다”고 다짐하며(2 권, 92 쪽) 김의부의 존재 자체에 대한 간절한 확인과 헌신적인 태도를 드러낸다.

하쓰코의 ‘기다림’은 나일라 카비르가 말하는 ‘전략적 침묵’이자 ‘비가시적 행위성’이다. 카비르는 침묵을 단순히 억압이나 무력감의 결과가 아니라, 말하지 않음 자체가 행위이자 전략일 수 있다고 보았다. 하쓰코는 수용소 당국의 비합리적인 거부와 김의부의 “요주의 인물”이라는 낙인 속에서 직접적으로 항의하거나 논쟁하는 대신, ‘기다림’이라는 비언어적 실천을 통해 시스템의 폭력에 저항한다. 그녀의 침묵은 김의부의 존재를 지우려는 시스템의 전략에 대한 소극적이지만 끈질긴 거부이며, 그를 향한 윤리적 책임을 포기하지 않겠다는 의지의 표현이다. 이는 ‘선택할 능력이 부정되어 온 이들이 그러한 능력을 획득하는 과정’으로서의 역량 강화에 해당하며, ‘권력 관계에 도전하는 방식’으로 자신의 선택을 행사하는 것이다. 여기서 하쓰코의 ‘기다림’은 여성에게 흔히 요구되는 수동적인 덕목이, 오무라 수용소라는 ‘예외 공간’에서는 권력에 대한 비가시적이지만 끈질긴 저항의 형태로 전환되는 과정이다. 그녀는 논리적 언어와 권력의 논리가 통하지 않는 곳에서 자신의 몸으로 시간을 견디는 방식으로 존재를 증명한다.

하쓰코의 끈질긴 기다림은 레비나스의 ‘타자의 얼굴’ 개념과 ‘환대’의 윤리와 깊이 연결된다. 하쓰코의 지속적인 ‘기다림’은 레비나스가 강조한 ‘타자에 대한 무조건적 책임’의 구체적 실천으로 해석된다. 그녀는 김의부의 고통을 분석하거나 평가하지 않고, 그의 존재 앞에서 끝까지 응답한다. 그녀의 ‘기다림’은 타자에게 나의 의지나 폭력을 강요하지 않고, 그의 고유성과 존엄성을 침범하지 않으려는 ‘환대’의 윤리적 실천으로 해석될 수 있다. 이는 억압적 상황에서 자신을 보호하기 위한 (카비르적) 선택일 수 있지만, 동시에 타자의 고통과 함께 머무르며 그 고통을 대상화하거나 소비하지 않으려는 (레비나스적) 윤리적 태도의 표현이 되는 것이다. 오무라 수용소라는 폐쇄적이고 비인간적인 공간 속에서 하쓰코의 기다림은 ‘무한성을 파악하는 것, 이것은 이미 타인을 환대하는 것’이라는 레비나스의 통찰처럼, 타자의 존재를 무조건적으로 수용하고 그에 대한 책임을 다하려는 윤리적 공간을 창출한다.

그러나 하쓰코의 윤리적 실천은 ‘기다림’이라는 비가시적 행위에만 머무르지 않는다. 그녀는 더욱 적극적인 방식으로 ‘윤리적 응답’을 실천한다. 그녀는 면회 시도가 번번이 좌절되자, 김의부의 석방을 위해 시민들과 연대하여 데모에 참여한다. 시위대와 경비원들 사이의 몸싸움에서 “하쓰코는 경비원에게 얼굴을 얻어맞고 정강이를 차여 앞으로 고꾸라졌다”(2 권, 188 쪽) 음에도 불구하고, “강제 송환 반대!”(2 권, 187 쪽)를 외치며 적극적으로 연대한다. 이 시위는 “상당한 효력을 발휘하여”(2 권, 190 쪽), 결국 “김의부의 가석방을 약속받”는 (2 권,

199 쪽) 결과를 이끌어낸다. 이러한 모습은 하쓰코의 행위성이 단순히 ‘침묵’이라는 소극적 형태로만 나타나지 않음을 보여준다.

카비르의 관점에서 보면, 하쓰코의 행위는 ‘침묵하는 기다림’과 ‘적극적 시위 참여’라는 두 층위에서 모두 권력에 도전하는 ‘전략적 선택’으로 해석된다. 하쓰코의 비가시적 행위성인 ‘침묵하는 기다림’이 제도적 폭력 앞에서 자신의 위치를 지키고 타자의 존재를 긍정하는 비가시적 행위성이라면, ‘시위 참여’는 직접적으로 그 권력에 도전하고 변화를 요구하는 가시적 행위성이다. 두 방식 모두 김의부의 ‘별거벗은 생명’에 대한 근원적인 윤리적 책임감에서 비롯되며, ‘타자를 버리지 않겠다’는 의지의 표현이다.

이처럼 시위 현장에서 하쓰코의 몸은 단순히 폭력의 대상이 아닌, 저항의 장소이자 윤리적 실천의 도구로 변모한다. 경비원에게 얼굴을 맞고 정강이를 차이는 등 직접적인 신체적 폭력을 당하면서도 끝까지 저항의 목소리를 멈추지 않는 행위는, 남성 중심의 정치 투쟁 서사에서 종종 가려졌던 여성의 몸이 어떻게 저항의 장소이자 윤리적 실천의 도구가 되는지를 보여준다. 이러한 신체적 고통은 ‘별거벗은 생명’의 취약성을 가시화하는 동시에, 그 고통을 감내하며 타자의 고통에 연대하겠다는 윤리적 의지를 몸으로 증명하는 행위이다. 그녀의 몸은 김의부의 존재를 지우려는 국가 권력에 대한 저항의 표식이 되며, 상처는 ‘말하지 못하는’들의 고통을 대신 증언하는 기호로 작용한다. 이는 제도적 언어가 포착하지 못하는 윤리적 책임이 어떻게 비언어적 형태로 발현되는지를 극명하게 보여준다.

특히 김의부가 석방된 후 “얼굴과 턱에 길게 찢긴 상처가 있고 왼쪽 눈가는 종양처럼 살이 엉겨 있으며, 웃고 있는 앞니는 세 개나 부러져 있”는 (2권, 192 쪽) 만신창이가 된 얼굴로 나타났을 때, 하쓰코가 “당신의 얼굴이 아무리 변해도 전 당신을 사랑해요” (2권, 193 쪽)라고 고백하는 장면은 레비나스적 윤리의 극점이다. 이는 타자의 고통과 상흔을 회피하거나 대상화하지 않고, 그의 변형된 존재 자체를 무조건적으로 긍정하고 그 고통을 함께 짊어지려는 윤리적 태도를 보여준다. 하쓰코의 이러한 응답은 ‘타자에 대한 책임’이 다하면 다할수록 더 커지고 짊어진다는 레비나스의 강조를 실천적으로 구현하는 것이다.

결론적으로 하쓰코는 ‘말하지 못하는’ 상황에 갇힌 김의부의 고통에 침묵으로 응답하며 결에 머무르고, 때로는 그의 목소리를 대신해 몸으로 시위하고 목소리를 내는 방식으로 다양한 ‘윤리적 응답’을 수행한다. 그녀의 이러한 행위는 단순한 수동성에 머물지 않고, 감내하고 지속하는 몸의 실천을 통해 존재의 윤리를 드러내는 응답이 된다. 이러한 실천은 ‘여성-재일조선인’이라는 이중적 타자성 속에서, 제도적 언어로는 포착되지 않는 윤리를 비언어적으로 실현하는 환대의 방식이자, 국가 시스템에 맞서는 능동적 저항의 형식으로 기능한다. 하쓰코는 타자의 고통을 외면하지 않고, 그것을 말해지지 않는

방식으로 함께 감당함으로써, 문학 속 ‘비가시적 윤리’의 가능성을 증언한다.

3.4 장유진의 회상과 문학적 증언: 말해지지 않는 기억의 윤리

『밤을 걸고』의 서사는 장유진이라는 인물의 시점을 통해 구성된다. 그는 전후 일본에서 성장한 재일조선인으로, 김의부와 하쓰코의 생을 기억의 언어로 다시 쓰는 증언자 역할을 수행한다. 그러나 장유진의 증언은 완전하지 않으며, 그는 서사 내내 “그때 그가 무슨 말을 했는지 나는 듣지 못했다”거나 “기억이 선명하지 않다”고 반복해서 말한다(2권, 169면). 이 반복은 단지 기억력의 문제가 아니라, 말해질 수 없는 고통, 증언 불가능성의 문제를 중심에 둔 문학적 전략이다.

아감벤은 『남은 자들』(Remnants of Auschwitz)에서 증언의 핵심은 “말할 수 없는 자를 대신해 말하는 것”이 아니라, “그 말할 수 없음을 드러내는 것”이라고 말한다²³. 장유진은 김의부와 하쓰코의 고통을 서술하면서, 완전한 정보나 인과를 제공하기보다는 오히려 그 틈과 단절을 강조한다. 그는 ‘말하지 않음’을 말하기 위한 서술자로 기능하며, 그 틈과 결핍의 공간을 문학적 윤리의 장으로 구성한다.

이러한 서술 방식은 『밤을 걸고』의 회상 장면에서 극명하게 드러난다. 예를 들어 장유진은 조병창이 공원으로 재개발된 장면을 서술하며 “여전히 여긴 무언가 말하지 못한 채 남아 있다”고 말한다(2권, 186쪽). 이 장소는 기억과 침묵이 중첩된 ‘재현 공간’이며, 과거의 폭력이 은폐되었지만, 여전히 무언가를 말하고자 하는 흔적이 남아 있는 공간이다. 장유진은 그 흔적을 ‘기억’하려 하기보다는, 그 기억의 불가능성을 있는 그대로 인정함으로써, 문학의 윤리적 가능성을 탐색한다.

레비나스는 타자의 고통 앞에 무조건적인 책임이 발생한다고 말했지만, 그 책임은 항상 발화나 전달을 통해 수행되는 것은 아니다. 장유진은 기억의 단절, 회상의 실패, 서술의 불완전함을 그대로 드러냄으로써, ‘말해지지 않음’을 윤리의 한 형식으로 전환시킨다. 그는 말할 수 없는 고통을 침묵으로 감싸며, 존재의 결핍을 윤리적 증언의 방식으로 떠안는다.

장유진의 서사는 또한 독자를 향한 윤리적 요청이기도 하다. 그는 김의부의 마지막을 전하지 않고, 하쓰코의 기다림을 설명하지 않으며, 이야기 너머에 빈 자리를 남긴다. 이로써 독자는 완성되지 않은 서사 속에서 타자의 고통 앞에 머무는 법을 배운다. 이는 단지 감정이입의 문제가 아니라, 문학이 고통의 전달자가 아니라 ‘고통의 현장’을 구성하는 공간이 될 수 있음을 시사한다.

²³ Giorgio Agamben 『アウシュ維ッツの残りのもの：アルシ-ヴと証人』 上村忠男・廣石正和 訳、月曜社、2001、42頁。

『밤을 걸고』에서 장유진은 단지 이야기꾼이 아니라, 그는 완전한 증언을 유보하고, 서사의 틈을 남김으로써 윤리를 형상화하는 증언의 매개자로 기능한다. 그의 서술은 회상이라는 형식을 통해 말해지지 않는 것을 말하려는 시도이자, 기억의 불완전함을 인정함으로써 고통의 장소에 머무는 방식이다. 이러한 방식은 문학이 ‘증언의 서사’가 아니라 ‘침묵의 윤리’로 작동할 수 있는 가능성을 제시한다.

4. 나가며

본 논문은 양석일의 장편소설 『밤을 걸고』를 통해, 재일조선인의 삶을 민족 정체성이나 디아스포라 정체성의 틀에 고정시키기보다는, 그러한 범주들이 오히려 이들의 삶을 또다시 단일한 해석틀로 환원시켜온 방식을 비판적으로 성찰하며, 그것을 포괄하면서도 그 너머에 있는 윤리적 실천의 지형으로 조명하고자 하였다. 재일조선인이라는 존재가 ‘경계적 정체성’이나 ‘디아스포라의 혼종성’으로 환원되어 왔던 기존 담론을 비판적으로 계승하면서, 본 연구는 정체성의 문제가 아닌 ‘삶의 조건’과 ‘윤리적 응답’이라는 관점에서 문학적 형상을 해석하고자 했다. ‘공간–존재–행위–윤리’라는 분석 틀을 적용하여, 제도 밖의 삶이 어떻게 타자의 고통에 응답하는 형식으로 문학 속에 형상화되는지를 탐색하였다.

『밤을 걸고』는 국가의 보호로부터 배제된 이들이 ‘예외 상태’의 공간에서 수행하는 침묵, 기다림, 증언과 같은 비언어적 실천을 통해, 존재를 증명하는 방식으로서의 문학적 증언을 구성한다. 아파치 부락은 ‘전술적 공간’으로, 오무라 수용소는 ‘강제된 침묵’의 장소로, 하쓰코의 기다림은 전략적 침묵을 넘어서는 윤리적 환대의 장면으로 제시된다. 이와 같은 행위들은 단순한 생존의 방식이 아니라, 언어의 한계 속에서 이루어지는 윤리적 응답의 실천이다.

이러한 논의를 통해 본 연구는 아감벤의 ‘호모 사케르’, 카비르의 ‘전략적 침묵’, 레비나스의 타자 윤리 등을 종합하여 ‘난민적 주체’라는 개념을 재일조선인 문학 속에서 구체화하고자 했다. 특히 『밤을 걸고』에서 말해지지 않는 존재들의 침묵과 기다림, 증언의 실패가 단순한 결핍이 아니라, 윤리적 가능성의 방식으로 문학적으로 형상화된다는 점을 밝히고자 하였다. 문학은 정치적 주체화의 언어를 넘어서, 고통과 결핍의 장소에 머무르며 타자의 고통에 응답하고자 하는 존재의 윤리, 곧 타자의 상처 앞에 머무르며 침묵과 결여를 받아들이는 감수성과 책임의 태도를 사유하는 장으로 기능할 수 있다.

다만 본 연구는 『밤을 걸고』라는 단일 작품에 초점을 맞추었기에, 이 분석틀이 다른 재일조선인 문학 혹은 난민 서사에도 확장 가능한지를 살펴보는 후속 연구가 필요하다. 또한 하쓰코의 윤리적 실천을 젠더적 관점에서 해석한

논의는 아직 출발점에 머물러 있으며, 향후 스피박의 서발턴 개념이나 크렌쇼의 교차성 이론 등을 적용함으로써, 젠더화된 난민 주체의 윤리를 보다 입체적으로 조명할 필요가 있다.

이 논문은 문학이 증언의 장르이기 이전에, 증언할 수 없음의 자리를 외면하지 않고, 결여된 말과 상처 입은 몸, 침묵과 기다림의 시간을 감내하는 윤리적 사유의 공간이 될 수 있음을 제안한다. 이는 고통을 서사화하거나 환원하지 않고, 그 고통과 더불어 머무는 문학의 방식에 대한 모색이자, 문학이 존재를 증명하는 또 하나의 윤리적 형식이 될 수 있음을 보여준다.

앞으로의 연구는 『밤을 걸고』의 분석틀을 다른 작품들과 비교하거나, 난민 주체의 윤리적 실천이 문화적·역사적 맥락에 따라 어떻게 변형되고 계승되는지를 탐색하는 방식으로 확장될 수 있을 것이다. 문학은 그렇게 고통을 서술하는 언어가 아니라, 고통과 함께 머무는 언어로서, 아직 말해지지 않은 세계—폭력의 상흔과 침묵의 기억, 그리고 배제된 존재들의 윤리를 간직한 세계—를 향한 윤리적 응답이 될 수 있을 것이다.

<참고문헌>

1. 기본자료

- 양석일, 『밤을 걸고』 1, 2, 김성기 옮김, 태동출판사, 2001.
에마뉘엘 래비나스, 『전체성과 무한: 외재성에 대한 에세이』, 김도형 외
옮김, 그린비, 2018.
조르조 아감벤, 『호모 사케르』, 박진우 옮김, 새물결, 2008.
양리 르페브르, 『공간의 생산』, 양영란 옮김, 에코리브르, 2019.
미셸 드 세르토, 『일상의 발명』, 신지은 옮김, 문학동네, 2025.
발터 벤야민, 『역사의 개념을 위하여』, 최성만 옮김, 길, 2012.
Naila Kabeer, “Gender equality and women’s empowerment: a critical analysis of the third Millennium Development Goal,” *Gender and Development*, vol. 13, no. 1, 2005.

2. 논문

- 김계자, 「재일코리언 문학의 당사자성 -양석일의 『밤을
걸고』」 『일본학』 41, 2015.
박성준, 「웹소설 플랫폼에서 나타나는 공간 생산의 주체 -양리 르페브르의
『공간의 생산』을 중심으로-」, 『문화콘텐츠연구』 31, 2024
박정이, 「양석일 『밤을 걸고』의 세 공간의 의미」, 『일어일문학연구』, 71,
2009.
서동주, 「‘전후—밖—존재’의 장소는 어디인가? —양석일의 <밤을 걸고>를

- 중심으로—」 『한국학연구』, 43(43), 2016.
- 신서영, 「양석일의 밤을 걸고 분석 연구- 전후 일본사회에 대한 자기비판과
식민주의 -」, 『Culture and Convergence』, 43(10), 2021.
- 신원경, 「코르넬 문드록초의 『주피터스 문』을 통해 ‘벌거벗은 생명’을
사유하기」, 『영미연구』 53, 2019.
- 양재혁, 「하이브리드 시대 미셸 드 세르토(Michel de Certeau)의 역사서술
다시 읽기(또는 다시 쓰기)」, 『HOMO MIGRANS』 24, 2021.
- 오윤호, 「제국의 경계 공간과 전후 재일 조선인의 디아스포라 정체성 연구 -
양석일의 『밤을 걸고』를 중심으로」, 『日語日文學研究』 102, 2011.
- 이정은, 「‘난민’ 아닌 ‘난민수용소’, 오무라 수용소」, 『사회와
역사』 103, 2014
- _____, 「예외상태의 규범화된 공간, 오무라 수용소」, 『사회와 역사』 106,
2015.

3. 단행본

- 조르조 아감벤, 『예외상태』, 김항 옮김, 새물결, 2022.
- 주디스 버틀러, 『위태로운 삶』, 윤조원 옮김, 필로소피, 2021.
- Giorgio Agamben 『アウシュヴィッツの残りのもの: アルシーヴと証人』 上村 忠男
・廣石 正和 訳、月曜社、2001.
- Jane L. Parpart, “Choosing Silence: Rethinking Voice, Agency, and
Women’s Empowerment,” Working Paper #297, Michigan State
University, 2010.

日本韓国研究 2025年度第5回研究大会発表予稿集

発行日 2025年8月21日

発 行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪公立大学 国際基幹教育機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) jak.jimu(at)gmail.com*(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編 集 日本韓国研究会編集委員

日本韓国研究会 
Japan Association of Koreanology